

彼を第二の『マダム』として説き示せる金言語は、乃てこれ彼の人間以上なる尊榮を表せるものに非ずして何ぞや且つ夫れ自ら單に一個の生ける靈而已にはあらずして、亦た他を活かすの靈者たり、其の更新したる全人性十生命を普及せしめ、又た我儕の墮落したる祖先より傳與せられし罪の量よりも更に豐澤なる惠福の由て流れ出る所たる彼キリストは、焉が該使徒の心中に於て其自ら福み且つ救ふ所の人類の一質たるに止るを得んや、然り而してイエス、キリスト若し果して人間以上の者なりとせば彼を以て神の寶座と人類との中保地位にある者と爲さんとは豈イスラエルの神を熱信せる聖保羅の克く信じ得可き所ならんや。

其の哥林多人に贈れる二個の書簡に於ては、聖保羅は救贖の何等一大真理をも格別に説示する所なく、唯だ雜多なる實際的生活上の事柄及び此地方教會の急需たる要件に應じて臨機の諸教訓を與ふ然るも尙ほ、此等書簡のみを以てして、他に克く聖保羅の心情及び思想に於てイエス、キリストに對し最高く無比の尊敬を呈せられたることを證明するに足れり、即ち該書簡中、該使徒が已れの教説と希臘の哲學及び其周圍の猶太人社の希望とを比較して其差異を明にせる所に於ては、十字架に懸り給ひしイエスは彼の中心的主題たり、又た彼の全哲學たり（哥林多前書一章二十三、四節、同章二節）其靈性上の教會を建設せる使徒的勤勞の法順を以て屋樓の築造に譬へたる所に於ては彼はイエス、キリストの外に何人も他の基礎を置く能はずと云ひ（同三章十一節）其の教會といふもの、性質を明にするに方りては則ち教會とは決して單だ若干の問題に一致せる所の群宗教等が自ら組織したる團體の謂に非ずして實に是れキリスト體なりと言ひ且（同書十二章二十七節）其の基督教徒の不貞不節の罪を責るに方りては爾曹はキリス

ストの肢なるを思へと言ひ（同書十六章十五節）人をして基督教徒たることの榮譽及び責任の感念を強く深からしめんが爲には、爾曹もし棄らるゝ者に非る以上はイエス、キリストは爾曹の中にありと言ひ（同後書十三章五節）其自然道德法に背きて甚しき罪犯せる者を絶交し又た之を寛赦せる所を見るに該使徒はキリストの名に頼りて人を「サタン」に交たすと言ひ又たキリストの身に於て彼に救を得させんと言へり（同前書五章四十五節）又た不敬にして聖餐式に與る者を譬きたる麴麩と祝の杯は、單に世を逝りて跡無き一教師の名残りを模表せる者にはあらずして是れ主の惠福なる併し乍ら恐懼す可き現存在の外表面なりとなし、不正直にして爲る者は主の體と血を辨へずして之を干すの罪を得べしと警めたり（同前書十章十六節、十一章二十七節）人の靈性が光明の生命に於て生まれ且つ長ずるとの源を指し示しては彼は之を以て神の像なるキリストの榮の福音の照す光となし又たキリストの身位にある神の榮光を知ることの光に在りと爲し（同後書四章四、六節）其の基督教徒生活の精神如何を説與するに於てはこれイエスの道德上生けることを我儕の身によりて世に顯れしめんが爲に絶へず自ら制することなりと言ひ（同後書四章十節）又た己が公役務の智力上の目的を概説してはこれ諸の意思を擒にしてキリストに服はしむるに在りと云ひ（同後書十章七節）其の百難千苦の中に在て彼を屈撓せしめさりし所の動念を明にしては「キリストの爲に凡ての患難に遭ふを樂みとせりと云へり（同後書十二章十節）其の身體上并に精神上に痛酷なる困苦に悩みては彼はキリストイエスに向ひ三たび之が爲めに救助を祈りたりき然れどもキリストの既に彼に足れるが故に、其困難の免除せられざる可きを聞くや乃ち彼は其爲めに祈りたる弱所を以て却て喜びとなして『これキリス



トの能われに宿らん爲なり」と言へり(同後書十二章七—九節) 又たキリストと基督教徒との關係を約言しては神の前に於ける智慧義及び聖徳の進歩、罪と死よりの贖は悉くキリストに負ふものと爲せり(同前書一章三十一節) 彼が教會に於て完き者の中に語るといひ世の非基督教の治者等には隠れたりといへる所の奧義的智慧の教訓の福徳を示しては、曰へるあり「若し之を識らば榮の主を十字架に釘けざりしならん」と(同書二章十八節) 又た道德的墮落の最上標準を設けては即ち言へらく「人若し主イエス、キリストを愛せざれば沮はるべし主臨らん」と(同前書十六章二十六節) 其の使徒的施恩權を用ゆるに方りては、彼は一の書簡に於ては單にキリストの名のみを以て祝福を授け(同章二十三節) 他の書簡に於ては萬徳なる三身位の尊名に於て之を授く、但し其然るときと雖も「我儕の主イエス、キリストの恩」といふ語は、曾に「聖靈の交際」の前に措かるゝのみならず又た「神の富み」といふ語の前にすらも措かれたるを見る(同後書十三章十三節) なり

以上はこれ聖保羅の較長き二個の書簡即ち毫も教義的論辨の系式を帯びずして、純ら一種特別の教會の刻下の利害及び紛争を處理せんが爲に記されたる哥林多前書の二書よりして、手に任せて抜き出したる章句なりとす但し此等章句の中には、若し之を一個別々に取り離して考ふるときは以てイエス、キリストの神性を確信することは爲し難きもの無きにしもあらず、然れども若し之を悉く一處に集め見よ、縦令へ如何様に之を解釋するとも、必ずや其等の言語全體の中には、聖保羅が思想纏情及び教説に於てキリストに歸するに、苟くも眞率なる獨一神教家に取りては何等の被造物にも與ふるに由なき高尊の他位を以てせることを見る可し蓋しキリス

トと若し果して一個の被造物ならば、神の至上獨古の權力と並ひ立たざる者なること論を俟たざればなり、之を約するに此等の書簡に於て聖保羅の眼を止むる所は、基督教の教説にはあらずして實にイエス、キリストの身位及び事業に在て存す他語以て之を言へば聖保羅の心に於ては、キリスト其もの乃ちこれキリストの福音たり然るに其キリストにして若し神に非りせば、聖保羅は何を以てホ斯くも一神教の眞理に對する至重の忠義心と全然並ひ立たざる所の高尊位を彼に與へたるの罪を推諉するを得んや

若し夫れ聖保羅の第一投獄中に認めたる書簡に於て我儕の主の事業及び身位を描き出せる言語に至ては縦令表面的に明言せざる所に於てすら主の神性の教義を斷然と決定せること右の二書簡より更に顯著なるものあり、按ずるに以弗所及び哥羅西の二書は其互に相干係せること羅馬書と加拉太書との干係よりも一層密接なるものなり、該二書簡は共に眞理の同一系統を論ず唯だ其異なる所は論述の法式に在り即ち以弗所書は敬虔的講解的にして哥羅西書は論評議駁的なる差あるのみ哥羅西に於ては夫のキリストを貶して天使長の列に置き又た物品及び自然力を板ひ潔むるの功徳を信するより起れる所の禁厭を重んじ勤むることを以てキリストの救贖的功業に代んとせし猶太風の接神學に對抗せんが爲に、キリストの身位の尊嚴は最も明かに論示せられ以弗所に於ては然らずして此の尊嚴は較間接に説與せられたり即ち後者に於ては此ことはキリストが猶太人と異教人とを復和せしめ共に神に復和せしめ給ふこと並に聖徒たる者の運命を豫め定むるにキリストの關係し給ふことを説ける中に含蓄暗示せられたり。我儕は此兩書簡に於て、同じく二個の重要な思想系を見る、而して共にキリストの神たる尊嚴を最も剴功に示せ



るものなるを知る其一は猶太教及び異教の相對的性質なるに引き替へて基督教信仰の絕對的性質を示せ……二はキリストの惠の新創造的能（哥羅西書三章九、以弗書二十一節）を示せるを則ち是れなり而して兩書簡に共に教會は其高莊雄大なる範域の中に、世界の萬民を繼嗣者として統轄するの外、更に不可視界の被覆を徹きて天上の諸族を包容する所の以弗所書三章十五節虚性的の大社會として示さる（哥羅西書一章五、六節、以弗所書一章十三節）而して此教會に於てキリストは其元首たり（以弗所書一章二十二、三、節同二十三、三十節）教會はキリストの『體肢』たり凡てのものに充たすものゝ充てる所たり、イエス、キリストは地と天を猶太人の死は靈的世界に於ける平和の戦勝たり、神と人との和ぎは罪の律法を十字架に釘て之を取り去り暗きの權の上に公然と勝を得給ひしキリストの死に由りて得られ（哥羅西書二章十四、十五節）人と人との和ぎに、其の十字架が道德世界の中心點たるを共に又た更新世界中心點たるが故に得られたり（哥羅西書一章二十一、二十二、節）分離したる人種宗教國家階級は悉く十字架の下に相會して兄弟として相懷き超脱的愛の無限の恩澤に浴すてふ一般感念に於て反映せらるゝ所の其内存在者即ちキリストに由りて團結したる一大社會の中に渾然として融和結合す（哥羅西書三章十一節）此二書簡に於て『キリスト』の體肢の結交といふことに兩が重きを措かれたるも亦故ありと云ふべし何と云へば道德的存在者間の復和は取りも直さずキリストの身位的榮光を發表する所以のものにして而してキリスト即ち其復和者なればなり彼は其苦死に於て天と地との萬物の結合の傳令使として地下に降り又た天上に昇り給へり（以弗所書四章十、

節）彼は教會の宗制を建設し給ふ（以弗所書四章十一—十三節）而して自ら其教會の活生命の由て發する所の根源なり其の建造體の由て基する所の基礎にてあり給ふ（哥羅西書二章七節）彼は教會の袖に在て獎勵組織統一の原力たり（以弗所書四章十五、十六節）人類間の最も親密なる關係即ち兩性婚合のことは彼と教會との關係の親密を表する爲めの記號にして採用せられ彼は教會の夫たり教會は彼の妻たるなり、彼は教會の爲めに己れを死に附し給へり是れ彼の洗禮の潔むる功徳に依りて教會聖なる者となし而して之を其主たる己れに對して點汚なく瑕なき榮なる者たらしめんが爲なり（以弗所書五章二十五—二十七節）斯の如くして彼は自ら其の教會が努して以て應答せざる可らざる完徳の標準たり教會の各員は凡てのことに於て育ちて彼の如くなるに至らざる可らず、是に依て之れを觀れば縱令へ我等は前既に論及したる哥羅西書中著大の一節を措て問はざるも尙ほ且つ該書中に於てはイエス、キリストを以て神性の勢力的其他有らゆる資性を兼備する者と爲されあることを見ずんばある可らず（哥羅西書二章二、三節）以弗所書の組織及び外想の根底として爾かく著しく指示せられたる三至聖者の中に、イエスキリストは最も明かに父及び聖靈と等稱せられたり（以弗所書一章三節）キリストは無形の君王にして其信徒は彼の僕なり（同書六章六節）然り彼の王國は明かにキリストと神との國と稱する（同書五章五節）教會は彼の臣民たり（同書五章二十四節）彼は基督教研究と其希望の目的者たり（同書四章二十八節一章十二節、六章六節九節）更に腓立比書に至ては斷然と明言して曰へり彼の勝利の完ふせらるゝ時は天に在るもの地に在るもの及び地の下に在る者悉くイエスなる彼の人性の尊嚴を認めて膝を屈めんと（腓立比書二章十節）福音を宣ふことはキリストを宣



ることを稱せられ(同書一章十六節)死はキリストと共に無窮に在るを得る所以の道なるが故にキリスト教徒に取りては美福の事と言はれ(腓立比書一章二十三節)腓立比人は只だキリストを信ずるの恩を賜はれるのみならず亦た彼の爲に苦むことをも許されたるが故に特に恵まれたる者と稱せらる(同章二十九節)該使徒はテモテを速に腓立比に遣し得んことを望むや恰も神の攝理を頼めるが如くにキリストを頼みたり(同章二十九節)凡の基督教徒等己のが事而已惟れ求むる私利心とキリストの事(神のことは言はずして)を求むる廉徳とを比較したり(同章二十一節)又た基督教徒はキリストを以て其の誇と爲すこと尙ほ猶太人が律法を以て其の誇と爲せしが如くせよといひ(同書三章十二節)而して該使徒自身はキリストを得んが爲めに其の猶太人たる凡ての特權を糞土の如くせり(同章八節)斯くして自ら曰ひけらく「キリストト我を執へ給へる也(同章十二節)キリストは我に力を予ふる也(同書四章十二節)又た曰しめんとすと(腓立比書三章二十一節)夫れ此書簡に於ては恰も哥林多書に於けるが如く該使徒は決して何等の一貫の教義論を爲せるにあらず、全體の趣向は、彼れ自らと腓立比人の虚的利害に關する所の論示を以て巧に織り成されたる道徳訓たるものなり、然るも尙其中にイエス、キリストに關する言をなせることの何ぞそれ斯の如く繁きや而して其諸言語は彼の神性を否定する何等のキリスト觀とも全然相容れざること如何に著しきものぞや若し夫れ彼の牧會的諸書簡に至ては唯に其中使徒教會の宗制及び教團に關する一種特別の指揮訓論を載するが爲に著きのみならず(提摩太前書三章四五節提多書一章五—九節、二章一—十

節等)其の正統教義と異端説とを斷然區別するに特に重きを措けるが爲に著しきものなり(提摩太前書三四五章。提多書一章九節、二章一節、八節、提摩太後書一章十三節同前書四章六節、六章一節、一章三節六章三節、提多書三章十節、提摩多前書一章十九節、六章十節同後書二章十八節、同前書四章一、二節同後書三章八節、四章四節、二章十七節、同前書三章十五節、同後書一章十三節)然り而して此の教系は共にイエス、キリストの身位をば或は統御的權能の本源として或は正統教理の北辰として最高無上のものと觀するの(提摩太前書一章十六節同後書二章三節、同前書五章十一、十二節及び同前書六章三節)又た救贖の教義を語るに方りては、教會書は其の力の遍達普及なることを強く主張せり(提摩太前書二章三節)蓋し全世界はキリストの經論に由て贖はれたり、但だ此經論は人類の意思の爲に其結果に於て制限せらるゝとあらんのみ。然るに夫の猶太主義及び神智主義の理論に於てはキリストの贖罪行の恩澤は若干の種族若くは階級に限りたりが故にキリスト品性を觀するや多少ともに單人主義なりしなり、聖保羅は是に對して世界包容の贖罪力を認め隨て一個の神なる贖罪主を信じたりき。かかるが故に彼の教會書簡に於ては我儕の主の神性は明白なる發意の言語と共に又た合意暗指の言語を用て教へらる(提多書二章十三節並に提摩太後書一章一節、二章一節聖約翰傳一第十四、十六節參照。提摩太後書一章九、十節提多書十一節三章四節等參照)矜恤と寛容の制裁者としての彼の職任、天使の扈從者に侍せられたる彼の不可視的臨在彼の僕等の上に於ける活々たる治理及び其の惱める者を治するに躊躇し給はざること等は殆んど自然の活題として載せらる(提摩太前書一章十六節、同章十三節參照)而して一方に於て唯一仲保者の人性を其の仲保業の要具



として主として論ぜる所あれば(提摩多前書二章五節)他方には之に對して彼の高本性に於ける豫先存在のことを明白に説き示されたり(提摩多前書三章十六節同章五節)却説希伯來書に於てキリスト神性の教義が其の主要の題目となれることは前既に論及したるを以て茲には唯た左の如くに一言せば即ち足らん曰く該書中に主張せられたるキリストの祭司的仲保の權能は縦ひ彼の定められたる人性に於て表示せらるると雖も其中自ら彼の超人的身位性を含めるものなりと

(註) キリストの十字架上の犠牲をして無上の價值あらしめたる所以は即ち彼は神性に在て存すとのことは希伯來書九章十四節に於て教へられざるものゝ如し彼所に於ける即ち靈なる語は取も直さず靈性者なる神の性質を言ふなり(羅馬書一章四節提摩多前書三章十六節、聖約翰傳四章二十四節參照)

然り此事は優に彼のメルキセデクと其後型たる神性者との間に立てられたる比較の言語中に消息せられて見ゆ、夫れメルキセデクのこと就ては歴史は其の父母族譜出生死去共に何の記載する所なし彼は聖譚話中に於て恰も生涯の始めもなく生命の終りも無き者の如くにして現はれ此無始の存在無終の生活の點に於ては神の子に象られたるものと言はる(希伯來書七章三節)而して此無始無終なるキリスト最終に至るべし救を爲すを得給ふ何となれば彼は己れの無始無終の存在に基けるが故に隨て萬古不易なる所の祭司職を帯び給はなり(希伯來書七章二十四、二十五節)之を要するに我儕若し仲保者としてこのキリストは神且つ人なる者なりといふことを念頭に指

きだにせば聖保羅の彼に就て語れる言語は此二重の意義を以て瞭解せらる可し即ち一方に於ては彼が唯一の神と唯一の主或は保持者との間に至る區別の眞消息は、彼が人性を取りたるキリスト降世せざる父なる神とを對觀應せる所の章句に於て明にす可く(哥林多前書八章六節、以弗所書四章五節、提摩太前書二章五節)而して他方に於ては、我儕若しキリストを神と信するに非んば彼のキリスト觀の大文字は、其の意義を害せずして了解し得可くもあらざるなり。固より聖保羅のキリストは神秘異義の掩ふ所となれることは疑はなし、然れども亦た思はざる可らず、苟くも神と人との眞交通を回復すといふが如き絶妙の事業豈全く神秘なくして遂げ得らるべきのことならんや、若しキリストに關する神祕的分子を取除かんが爲に彼も其神性より離し見よ然らば聖保羅の彼に就て語れる諸の大文字は、敢て何の章何の節といはず全體を擧げて、果た如何なる意味を有するものとなる可き等、試に彼の一書簡書を取りて其中に語られたる神なる救贖者の名を悉く取除き、之に代ふるに聖徒中の第一なる者若くは天使中の最高なる者の名を以てせよ其書簡は果して如何に了解せらる可きや、姑く聖保羅の挑論の語を受容して保羅は我儕の當に十字架に懸り我儕は保羅の名に於て洗禮を受け(哥林多前書一章十三節)知慧と聖きこと贖とは該使徒より來り教會はキリストのもの非ずして保羅のものなりと見よ(羅馬書十六章十三節加拉太書一章二十二節、馬太傳十六章十八節)(哥林多前書一章二節十章二十二節、十一章十六節、二十二節十五章九節、哥林多後書一章一節、加拉太書一章十三節、提摩太前書三章十五節)而して若し能ふ可くんば該使徒は其の主の寶位に登りて使徒保羅を愛せざる者には呪の宣告を發し保羅は凡ての人の思想を擧にし己に服はせんと欲し自ら



智慧と智識の資産は已に藏せられありと宣告し且つ彼が其の『われら自己の事を宣るに非ず唯だキリスト、イエスの主たること又われらイエスに由て爾曹の僕たることを宣ふ』(哥林多後書四章五節)と言へるに代へて保羅は凡て信する者の爲めに律法の終なり(羅馬書十章四節)といふが或は、予は保羅により聖虚の愛に縁に爾曹に勸む(羅馬書十五章三十節)と言ふと假想し見よ、諸ろ斯の如き言語がキリストの名に於て有する所の意義を保羅の名に適用し見よ是れ豈忍容すべきものならんや、敢て問ふ斯く聖保羅がキリストイスマエルに關して語れる所の言語を以て他人に擬するに方ては、其人にして如何に高尊に如何に聖徳なるも尙ほ且つ之をして單に誇大の言とならしむる而已ならず裏談も亦た極れる者たらざんばあらじ其故抑も何ぞや他なし是れ眞理は眞理に對して始めて相應するを以てたり敢て一、二、と言はず彼の書簡の全體を通じて其の數聯の教義の中心實核たるものとなして、キリストの神性なる觀念を基とせるを以てなり若し彼の書中より此觀念を要はんか其の凡ては支離滅裂意義の捕捉す可き無きものなるを以てせり唯だ克く此眞理を認めてこり保羅全書簡の言語は始めて各其所を得し彼の無限無極の權能者慈愛者が謙遜と犠牲との外衣に包まれて人類の救極及び照道の爲に力を盡せしことを説示するものなるを悟り得るを以てなり

(四) 聖保羅の出色なる教説の主たる要求に於ては其の大書簡の一般趣向に於ける同じく徹頭徹尾一個神なるキリストを合示せることを争ふ可くもあらず  
 (五) 思ふに尙くも新約聖書の讀者にして、聖保羅の名を共に彼が神の前に人類の義とせらるる必須の條件とし信仰てふとの缺く可らざる所以を特に辨論せるを聯想せざる者は無けん借用す聖

保羅の『信仰』とは抑も如何なる者ぞや蓋し彼の所謂信仰とは、之を経験上よりするときは靈魂の最も單純なる動作たり、然ども若し之を分拆して言ふときは、新約聖書に於けるあらゆる宗教的觀念中の最も複雑なるもの一に屬す信と言ふ言語は第一に誠信と信頼との意義を兼ね有す

(註) 羅馬書三章三節に所謂『神の信』は神が其約束を成就するに誠信にてあり給ふことを言ふ、哥林多前書一章九節の『神は誠信なり』及び帖撒羅尼迦前書五章二十四節『爾曹を召く者は誠信なるものなり』の意皆同じ。又た信とは神に信頼するをいふ即ち羅馬書四章十九、二十節に於ける信仰の語是れなり、若し夫れ加拉太書二章七節提摩太前書一章等に於ては此原説は『託ぬ』即ち信託するの義に用ひらる

然れども宗教的の信頼は信念即ち未だ見ざる所のものを眞なりと感得するの念慮と離す可らざるの關係あり(羅馬書六章八節并に哥林多前書十一章十八節の『信』の字參照)然り而して此信仰は其目的者として『見ざる』所の者を有す故に聖保羅は之を『見る所』の者に對照して言へり(提摩多後書五章七節)されば信仰は我儕の何等有形的機能を以てするよりは更に一層高尚なる一直覺に由て養はる否其直覺及てこれ信仰とも言ふを得可し(哥林多前書十二章三節)信仰は人類が神の恩恵に由つて與へられたる靈的眞理に關し日々新なる感念を絶へず、丹鍊することとなりとするが故に信仰は實に靈的なる第二の視覺たりと雖も理性は尙ほ之に對して護衛的の任務を有す理性は信仰の爲に其智力的障害物を除去して以て虛魂の中に信仰の道を備ふる事もあり又た信仰を以て直覺する所のとを調排し練熟し稱明し組織して之を各地方若くは時



代の特殊必要に應じて言明することもある可し但し此く信仰の題目を斟酌商量して之を分解し論議し綜合し推演する所の智力的活動は基督教徒の虚魂の生命に取て必ずしも無かる可らざるものには非ず斯る技能は信者全識の中に於ける少部分の人々のみに屬する特別の天賦たり或能たるものなり斯る人の信仰は聖保羅が二種特別の意味に於て稱したる「智識」といふものに由て補足せらるなり（哥林多前書十二章八節、同十三章二節）夫れ虚魂が由て以て生くる所の信仰は其れ自らに於ては重もに變動のものなり、其中の智力的成合に關して特に然りとせず信する虚魂は其の信仰の念に受くる所の事柄を科學的の精確を以て悟得することは或は之れある可く或は之れ無かる可しされば聖保羅の所謂智識の言語即ち分解及び陳述の能力は是れ神學者の用ゆる所の特種の天分にして教會に取りては頗る緊要のものなりと雖も全基督教徒に取ては必ずしも不可缺のものに非ずとす然るに信仰は之と異なりて是れ無らんか神を悦ばすこと能はず而して信仰は其完成するに至ては宣傳の力に由て其目的者の無上命令を豫め想定肯諾す（羅馬書十章十四十七節帖撒羅尼迦前書十二章十三節）勿論時としては宣傳せられたる言語も之を聞く者の方に於て信仰を劑ざるが爲に益を爲さざることとはあれども（希伯來書四章二節）苟くも然らずして人の虚魂眞實に神の使命に對應するに至りては信仰の完全なる對應的活動は蓋し三重の作用を呈す蓋し即ち此活動は信する者の智慮心情及び意思よりして同時に發し來る詳く之を言へば彼の智慮ば不可視の目的者を事實なるものとして識認し彼の心情は斯くも其の理會力に現示せられたる目的者に纏綿して天大の靈光を受けんが爲めに之に向て投せらる（羅馬書十章九、十節）而して彼の意思も亦た其前に示されたる眞理に己を委し其眼を曳き其愛着を制す

る所の目的者の命のまにまに靈魂を服せしむ（羅馬書七章四節同十四節八、九節、哥林多後書五章十五節哥羅西書三章十七節）隨て信する者は自己の存在を自己の信仰の目的者に吸收せらる是に至りては、其人は尙ほ生くれども其生けるは其人自らにあらざして其人の哀に住ふ所の他の者なり（加拉太書二章二十八節腓立比書一章二十一節）其人は只管眞理惟れ眺め其れを愛し其れに己を委し又た其れの中に己を失ふなり則ち知る此の信仰は單に結果に於て而已ならず本性に於て深遠なる道的徳的特性を有するものなることを。信仰は獨り理會力の覺知のみにあらずして又た心情の炎燃よりなる意思の鎔解なり一言以て之を曰へば人の全靈魂が一個渾然たる運動を以て其前に示されたる眞理を見感じ且つ之に服従するの行爲にてあるなり。

然り而して聖保羅の教ゆる所に由れば、此の基督教信仰の主要の目的者は實にイエス、キリストたり、基督教徒の智性心情及び意思はキリストを接せんが爲に結合共同す該使徒が千變窮無きの言語を用て此のイエス、キリストを信じ悟ることを描けるや其順序過程は多面多角にして言緒百端曲折盡るなきが如くなるも而かも此の信仰といふに至ては其全方面に於ける正眞不易の目的者は即ちキリストに外ならずとするが故に聖保羅が信仰は一同の目的に向ふ虚魂の運動として語れるに方ては其目的はキリストなり（哥羅西二章五節腓立比書一章二十九節、羅馬書十章十四節、腓利門書五節并に提摩太前書一八節參照）又た信仰は人の靈魂の安全を保證する支持者の上に虚魂の安定することなりと語れるに方ては其の支持者は即ちキリストなり（提摩太前書一章十六節并に羅馬書四章五、二十四節）又た彼が信仰に由て基督教徒はわが靈的生活を圍繞し保護し育成する所の空氣中に入り來るなりと説けるが如き場合はキリストは即ち



其空氣たるものなり（加拉太書三章十六節、提摩後書三章十五節、同前書三章十三節）斯の如くにして、彼の『キリストの信仰』和譯キリストを信することといふ言語に於てはキリストと及びキリストを識知する信仰との間に最親最密の結合あることを示し（羅馬書三章二十二節、加拉太書二章十六節）而して此結合は人の方よりしては信仰に由て神の方よりしては聖餐禮の要具に由て人類の眞の稱義を安固にす（提摩書三章五節、哥林多前書十章十六節）されば信する者はキリストの完全なる服従と贖罪の苦患との功を已に傳與せられて、キリストと同一視せらるること由りて義とせらるなり聖保羅がキリストに於ける信仰を云々するに方りては基督教徒信條の中に包括せられたる信仰として之を語る（提摩太前書三章十六節）又曰く、キリストは自ら信仰の題目たる全眞理を保證することを信する者に確知せしめて以て信仰に由て冒す所の危険を安からしむと（提摩太後書一章十二節）是を以て之を見れば信仰は新生命の發起點にして亦た維持力たるものなり、而して此信仰は即ちキリストに於ける信仰なることは固より論を俟たず（加拉太書二章十六節、羅馬書一章十七節、同三章二十九節、加拉太書三章七節、六章十節）キリストの寶血は唯だ彼の意思の服従を表はするものとしてのみならず、亦た彼の高尊なり、洗禮せられたる基督教徒は此寶血に浴して其赦罪の洗淨の力に頼り住む然りキリストの血は實に此力にしてキリストは即ち基督教信仰の大目的者たり（羅馬書三章二十五節）蓋し基督教徒の虚魂が小心翼翼其の意惟に従ふの愛を以て我を忘れて仰ぐ可きの目的物として聖保羅の示せるものは單にキリストの教説而已にあらざる彼の救贖の事業而已にすらもあらざるして

實にこれキリストてふ神なる救贖者の身位其ものなればなり。

却説我儕の主若しも彼の使徒の信念に於て單に一個の被造物にてありつらんには、使徒が斯く我儕の主を人間靈魂の幼影愛及び勢力を悉く包括し盡す者として説き示したることは到底理會す可らず蓋し聖保羅は靈魂の希望と愛は其信仰と等しく悉くキリストに集中す可きものなることを或は公然に或は陰然に主張すればなり（提摩太前書一章一節、哥林多前書十五章十六節、哥羅西書一章二十七節、帖撒羅尼迦前書一章三節）彼は決して單にキリストの存在若くは行動を智力的に相念することが神の前に罪人を義するに足るとは言はず彼の言ふ所に由れば信念に由て靈魂は常にキリストに向て動きキリストに於て安んじ又た常にキリスト、に於て活く可きものなり、キリストは靈魂的生活の目的たる可く支持力たる可く又た氣圍氣たる可きものなり（提摩太後書三章十二節）然れどもキリスト若し神に非れば如何にしてか斯る關係を人の靈魂に及ぼすことを得んや疑も無く人の信仰心は其不可視の神を想念するが如くに亦た不可現の被造物の存在を想念するを爲す、即ち天使も信仰心に由て見られ惡魔も亦た信仰心の客位たるを得。語を替へて言へば虛魂の超自然的知覺力は福德若くは福害の各異なる無形界に於ける存在物を概念することを得。然れども天使及び惡魔は罪を死より人類を救ふ所の信仰の目的者にはあらず、天使たる虚物は決して人間の人情及び意思に向て基督教徒の虚魂がキリストを歓迎する如き誠忠心を命令することを爲さず人の虚魂は己れに仕事する者として天使を愛す然れども其の目的者としてにはあらず何等被造物と雖も人を義とする所の信仰といふが如き爾が複雑にして爾が玄妙強烈なる靈性的活動を眞正に満足せること能はず又た何等の被造物と雖も斯



くも大造物主の獨特の榮光に對して成聖せられたる靈魂の最奥底に於て仰がれ愛せられ賑はかること能はざるなり。然るにキリスト若し被造物にてありつらんには我儕は敢て斷言せんす聖保羅はキリストに於ける信仰に就て決して以上考究したる所の如き言語を爲す可きの理なく必ずや極めて趣を異にせる言語を發せずんばある可らざるなりと。又た聖保羅の信仰に於てキリスト若し單に被造物なりしならんには彼は其のキリストに於ける信仰の教説を以て人をして造物主に事ふるよりも寧ろ被造物に事へしめんとしたるものと言はざるを得ずキリスト若し神に非りせば聖保羅の靈的教訓に於てキリストは神の威光を蝕掩せるものならざるべからず何となれば則ち彼の謂ふ所人の由て以て義とせらる可きは信仰の目的物はキリストの訓誡と其事業なると共に亦た乃てキリストの身位のものなればなり否を當に爾かのみならず凡う人間の智性心情及び意思が神に對する靈的舉事の貢獻と雖も決して該使徒がキリストに對して呈せよと要むる所のものより更に大なること能はざる可ければなり

る更に又た聖保羅の所述に於て示されたる『更生』(Regeneration) といふ觀念の中には如何に多くキリストの身位に關係する者の含まれあるがよ、尤も聖保羅が明白に此の重生てふ言語を用ひたるは唯だ一度のみ(提多書二章五節。馬太傳十九章二十八章)に於ては此言語は更に大に廣き且つ甚だ異りたる要味を有するにあらざらん該觀念甚しきに至ては彼の所述を通じて現はるゝと當に再三而已ならずして其重要なる敢て信仰てふ觀念に譲らざるものあり此の重生の觀念は時としては衣を替ふるてふ形容語を以て言ひ表はさる(哥林西書三章九、十節、加拉太書三章二十七節)其意に謂へらく更生したる人は、其の古き人を不信放恣の行爲と共に脱き去り

て新しき理想の人たる完全の道德的存在者たるキリストを新たに衣たるものなりと又た時としては更生の觀念は狀を化るてふ形容語を以て一層適當に言ひ表さる(羅馬書十二章二節、同八章二十九節并に哥羅西書三章十參節照)是れ即ち更生したる人は一種の轉化を経たるものとの意にして斯るは人キリストの様に倣ふものとせられキリストの形に於て新にせられ其道德的存在は更革せられたるなり。又た彼が更生を人間の自然生出に譬へたる所に至ては其意更に劃切なるものあり即ち聖保羅は更生を以て第二の生れと爲し更生したる人は一個新規の被造物(加拉太書六章十五節)又た神の造り給へる者といひ(以弗所書二章十節)斯る人は神の標準に合せて造られたるものと稱す(以弗所書四章二十四節)若し夫れ更に進んで最重最要の意義に於ては、斯る人はキリスト、イエスの中に造られたる者とし(以弗所書二章十節キリストは新に造らるゝ者の在る可き所を稱す、哥林多後書五章十七節)然り而してキリストに於ける更生の要具は聖保羅の所説に隨へば洗禮の聖儀にして(提多書三章五節加拉太書三章二十七節)此聖儀は聖靈に由て有効の力を給はる可く而して成年の悔改者に在りては懺悔と信仰を以て之を靈魂に歡び受け可きものなりとす斯くして更生は二個の事程を有す、一は破壊的にして一は建設的なり而ち更生に由りて古き生命は殺され而して後新き生命は其存在を始む此二重の事程は洗禮せられたる者の聖儀秘密的ニキリスト聯合せしめらるゝことによりて其効を奏す即ち第一には十字架に懸けられて死し給ひしキリストに聯結し(羅馬書六章三、四節)第二は死より生命に甦り給ひしキリストと聯結す但だ該使徒の言語に於てはキリストの甦りたる生命を絶へず與り享くことは一に基督教徒たる者の意思克くキリストと協合するに依る



ことを明に示せども（羅馬書六章四、五節）然れども洗禮の恩恵が基督教徒をして始めて入らしむる所の基督の生命の道德的實境は一にキリストの死を復活に應和し且つ其効果を受くるのことに外ならざるなり若し單に歴史的に之を觀察せんか此等の事件は既に遠遠の過去に屬することたり然れども我儕基督教徒たる者に取りてやキリストの磔死と復活は決して單に過去の歴史的事件而已にはあらず是等は今古一徹同く新なるの事實にして年所の隔絶は我儕をして之と離れざるの力なく救贖の王國に於ける時の終るに至るまで綿々として繼續せる所の活事實たり斯くて基督教徒は時の終るに至るまで永へにキリストと共に磔せられたる者なり（羅馬書六章六節）加拉太書二章二十節）彼はキリストと共に死て（提摩太後書二章十六節羅馬書六章八節）キリストと共に埋られ羅馬書六章四節、哥羅西書二章十二節）キリストと共に甦され（以弗所二章五節、羅西書二章十三節、四節）キリスト共に揚り（以弗所書二章六節哥羅西書二章十二節、同三章一節）キリストと共に生くるなり（羅馬書六章八節、提摩太後書二章十一節）帖撒羅尼迦前書五章十節）斯る人は單にキリストに在る者としてキリストと共に天の處に坐せしめらる可き（以弗所書二章六節）のみならず亦たキリストの肉より出て骨より出でたる者として彼の身の肢たるなり（同章五章三十節）而して此森玄微妙の聯結の爲に洗禮は其始原的要點なりとす古への教會に於て其親交に入るの必要件として成年衆度に對し執行せられたる、此重生の聖奠の式其ものは乃て其れが奏する所の虚的効果に應和せるものなり即ち新入教者の身體の水に侵めらるゝは其古き性質がキリストと共に殺さる埋らるるとに應ず而して磔殺せられ埋葬せられたるキリストが最早彼を保持し能はざる所の墓より無敵の大能を以て起ち給ひし

が如く基督信徒たる者は、信仰の眼に取りては更生の浴水より新なる且つ超自然的なる生命に輝きて起たされたるなり、斯る者は爾後毎にかの死の中より甦りて復た死なざる所のキリストを仰ぐ可し但し基督信徒たる者は此高等の地位に自ら堪へざる可し或はあらん、此の自ら立てる光榮の位より墮落することも或はあらん、然れども必しも爾かせざる可らざるにあらず、却て主イエス、キリストにより罪に於ては自ら死ぬる者また神に於ては生る者と思はざる可ざるなり（羅馬書六章十、十一節）

此更生したる基督信徒の生命は聖保羅の書に於ては更に一步を進めて二個の現著なる言語を以て描出せらる、即ち該使徒は基督信徒を稱して時としてキリストに在る者と言ひ又た時としてはキリストは基督信徒の中に在る者といふ（羅馬書八章一節、十二章五節、十六章七節、十一節哥林多前書一章二節、三十節、同十五章二十二節、同後書二章十七節、五章十七節十二節十九節、加羅太書一章二十二節、三章二十六節二十八節、以弗所書一章、三節、十節、二章十節、三章六節）卍立比書一章一節、帖撒羅尼迦前二章十四節、四章十六節（約翰傳十五章四、五節參照）及び羅馬書八章十節、加哥太書二章二十節、以弗所書三章十七節、哥林多後書十三章五節、哥林多西書一章二十七節）然るに軌近の批評家輩が古へより、此等言語の文字上并に必然の意義上熱力を究め盡さんと努めたる無數先人の努勞を擧げて徒然に歸して了らんとせるは思はざるの甚しきものなりフツカーは論じて言へり『或る人々が此等の言語を解して、これ我儕をして彼の如き人ならしむるの所性質とは全然同一なるものなりてふとの外他に何の意義をも含めるに非ずと爲せるは、餘りに冷淡無味に過ぐるの解釋といふ可し何となれば天下一人



として斯の如き程度に於てキリストと共同の性を有せざる筈無ければなり」と且つ亦た此等の章句に於て「キリスト」とは單にキリストの道德的教訓を意味するものにして「基督教徒はキリストに在り」といへるは單に彼の山も無訓に對する智性的忠實に於てするの義なりといふとも以て其眞意を盡すに足らず、此等言語の勢力は斯の如き論を容るゝは餘りに強烈にして文字的解釋の外何ものをも許さざるなり、思ふに熱誠なるプラトニー派の者は強勢なる形容詞を用ひて「我はプラトニーに於て生くと言ひて以て彼の智力は悉く該哲學者の書冊上の思想に吸收せらる擒獲せられたりとの意を表することは或は得可んも彼は決して「我はプラトニーに在り」と言ひ能はざるべし何となれば斯くの如きの言は單に彼の全智性がプラトニーの精神と交通する意を含むのみならず亦たこれプラトニーの性質及び存在を容觀的に繼承すとの意を示せばなり、況んや更にプラトニーはプラトニーの徒弟の中に在りとの語を用ゆるが如きは全然不可能のことなりとす、されば聖保羅が以上の言語を用ひてキリストと基督信徒との關係を示せるは、彼は決して何等人間精神の主觀的感得を記せるにあらざりて實に受肉降世の神の國に限れる特質たる所の容觀的絶對的事實を指し示せるものなるは論を俟たず重生したる基督信徒の眞に「キリスト」に於て在る」ことは尙ほ人類の各員が其の始祖「アダム」に於て有るが如し（オルスハウセン羅馬書論に九章并五章十二—二十一節と緒論とに於けるキリストとアダムの比較論を見よ）勿論キリストの基督信徒に於けるはアダムの其後裔に於けるよりは更に大なるものたり、キリストは基督信徒が由て以て生息し呼吸する所の大氣たり然しながらキリストは尙ほ自らも享有し給ふ所の新天地の始祖たるものなり、キリストは自らも眞に其一員にてあり給ふ所の圓體の元首たり

り否を此圓體は其もの乃てキリストなるなり（哥林多前書十二章十二節）甦り昇天し榮光を得たるキリストは一個の無盡藏として言語に絶したる善徳の力の滾々として流れ出づる源泉なり（以弗所書四章七節）而して彼を信じて洗禮を受けたる者は此生命の流水に於て浸されて生活す可して之れ同時にキリストは亦た自ら基督信徒の中に住み給ふ基督信徒の靈魂及び肉體はキリストの體なり、基督教徒は自ら棄るに非るよりは必ずイエス、キリストは已か中に住み給ふことを保證せらる（哥林多後書十二章五節）

讀者請ふ試に思へ若しイエス、キリスト眞實に神に非らずとせば以上の言語は果して何等の意味を有するかを單に人間なる教師若くは被造的存在者に過ぎざるものと人類との關係は決して此等言語の重量を支ふるに足らざるを奈何せんや、此等の言語をして纔に粗笨無力無價值無意義の形容ならしめばいざ知らず苟くも然らざる以上は必ずこれ人の子供若くは天使の長よりは更に高尊なる所の一存在者と人類との關係を示せるものと決せざる可らず。勿論我儕基督信徒はキリストの人性と聯結することに由りて彼に於て在るなりといふは眞なり、然れども彼の人性をして斯の如く人間を革新し世界を包容するの力あらしむる所以の者は抑も何ぞや斯く何人に夫れキリストに於て在るときは其の道德性の新創造を蒙むるといはるゝは果して何が故ぞや（哥林多後書五章十七節）キリスト若し萬人の心臓を探り知る所のものと偕に在る者にあらずんば安んず斯く我儕の中に在り給ふことを得んや、而して人の靈魂の深底を測り其中に住し其力を新にし其性質を擴大することは唯だ其靈魂を造りし者のみの獨り能くし給ふ所なることは言を俟たず、キリスト若し神に非ざれば彼が人性を革新すといふは單に齊東野人の言なら



んのみ人靈を生せしむといふは單に癡人夢中の噁語ならんのみ  
 は以上予の論ずる所を以てせば聖保羅の書中に於ける我儕の主の神性の教義をば單に其の明言  
 せる所の章句のみの外に之を認めざるは誤謬と言はざるを得ず該使徒の此教義を確持せし間接  
 の證據は其區々の章句に於て明言せられたる直接の證據よりは更に廣く更に深きものあり蓋し  
 彼の思想及び教説の最大特色は悉く此教義にて彩られ此教義を基とし此教義を以て徹かれざる  
 は無ければなり今一々之を例證せんは殆ど際限無かる可きを以て茲には只だ左の如く言はば足  
 りなんか曰く我儕の主の神性の教義は聖保羅の全生涯に於ける最大なる論戰筆闘の動機を解く  
 る關鍵たりと是れなり蓋し該使徒がコリントに於てガラテヤに於て將た少しく其趣を異にして  
 コロサイにエペソに於て猶太主義の牧師輩と火花を散らして論争したる其の姿勢の慨然憤然  
 たるをは決して彼等牧師輩が猶太風の儀式を輸入せんとし或は教會の一統普遍なる本性を狹隘  
 なる一國家主義の犠牲に供せんとしたるが故なり必ずやといふのみにては充分に解す可からず  
 其上更に大なる故在て存せざんばあらざるなり按ずるに古の猶太教師輩は其教説の中に公然と  
 明言せし所より更に深重なる事柄を暗示したる者なり彼等はキリストの宗教の性質決して神聖  
 不可侵にして一點の増減變更を容れざる程に完全絶對のものに非ざること暗に教へたるも  
 のなり。彼等の意若しキリストを全人類の救主とは認めずして實際上彼の事業をば單に人類の  
 一部分に限り適要せらる可きものと爲すとも決して斯教の創立者に對し重大の無禮を加ふる所  
 以に非ざといふに在り。キリストの身位には何等絶高至尊の威嚴あらざるが故に縱令へ彼が成  
 就し若くは廢棄したりてふ古律法の死儀式と彼の救贖の十字架及び聖奠とを同等の地位に置て

之を並び行ふとても何の妨ぐる所無しといふに在りたるなり。聖保羅の炯眼奈ぞ斯く其主の尊  
 榮に對して間接乍ら而かも確かに加へられんとする傷害を洞破せざらんや、宜なる哉彼が決然  
 として該教師輩の勢か及び運動に對抗せる熱心の強烈なることは恰も彼がキリストを愛する情  
 の強烈なると其度を同ふせり。蓋し猶太教師輩にして若しもイエスの眞神性を信せしならん  
 は安が一旦彼の降臨の榮光の前に顔色を失ひて癡れ果てたる薄弱卑賤なる古律法の要素を顧慮  
 するに遑ある可けんや、彼等若し充分に且つ明瞭にイエスを神なりと信せしならば其信仰心は  
 乃て既癢の舊物を戀々回顧する情を斷乎として遮斷せしなる可し然るに彼等は事茲に出でず割  
 禮の舊式を再びガラテヤの教會に輸入せんと企てたるは取りも直さずキリストの完全充足なる  
 事業の榮光を蝕蝕せんとするものにして隨てキリストの身位の超絶至高の尊嚴を褻瀆する所以  
 なりしなり彼等は我ながらキリストの一王國即ち其中に在てや割禮を受るも受けざるも何の差  
 違あるに非ずして只管受肉降世の神なる救主の救贖的聖奠的恩恵に依て靈魂の再生せしめらる  
 ることを以て最大事と爲せし所の王國に自ら負たることを知らざりしなり

(註) 加拉太六章十六節に於ては更生のことは之を致さしむる所の神力の方面よりして外部よ  
 り觀察せられ同書五章六節に於ては之を愛に由て働く所の信仰に在て存するものとして靈魂  
 の内部より觀察せらる共にこれ割禮の法に對して論ぜるものと知るべし

彼等偽教師輩事は言語上に於ては固よりキリストを拒まざりき然れども其キリストは彼等に取  
 りては彼等の上に何の効果をも及ぼす者たらざりしなり是に於て乎聖保羅は愁然として宣へて  
 言く凡て律法に於て義とせらるる者は恩より墮ちたる者なりと(加拉太書五番四章)是を以て



之を見れば彼は即ちキリストの救贖的并に再造的機能の完全充足なる効力を實際に否定して

二百三十四

キリストはモーセよりは大きなりてふを暗黙の間に拒みたる者なりとす然り而して彼等偽教師輩の事業は一部にして世に喪せたるに非ず彼等の運動は小亞細亞の諸教會に速なる神爲上幾多の影響を以てし而して此影響は後年に至てアンテオケ學派の尙古心の中に感染し又た教會の以外に在ては彼のサモアタのパウラスの褻瀆的邪説を著はしらしめたる單人説の紛騒に於て長く久く反響せられたり然らば則ち古の猶太教師輩の運動は明に後年のアリス異端の爲に端を發ける者と言はざる可らず而して聖保羅が後年のアタナシアスの論辯并に事業の爲めに使徒的代表者たりしことは毫も聖約翰に譲す所なきなり。

却説以上予の考究し來りたる所は稍長繁にして或は讀者の倦怠を速きたるならんも爾かも疑問を明にする無量例證の一斑に過ぎざるなり即ち一斑に過ぎずと雖も尙ほ且つ以てイエス、キリストの神性に關する聖約翰の信仰并に教説は該使徒の智力的靈性的の一特色たりしに過ぎざるの疑念を聞くには優に足れりされば聖約翰の教説の外形即ち言語は縦し彼れにのみ特殊のものなしとするも抑も其實質に至てはイエス、キリストの全使徒等に悉く通有のものに外ならずりしを知る即ち第四福音書に於てイエス、キリストに歸せられたる尊福及び地位は、他の三福音書に於てキリストの操縦し給ふ所と爲せる權力キリストの要求し給ふ爲と所せる權理と其意義に於て符節を合するが如く亦た聖約翰の無始無終の言てふ教義は聖保羅が『父の像』といへる教義及び彼がキリストの救贖の事業并にキリスト庫に對する基督信徒靈魂の姿勢を描出せる所と實質に於て相吻合す聖約翰の比較的精密なる言語は會ま以て聖彼得の熱誠なる頌徳の辭并

に聖雅各の森を較著なる敬禮の詞を解するの關鍵を供する者に過ぎざるなり勿論聖彼得、聖雅各と聖約翰との智力的性向及び論式の異なることは聖保羅と聖約翰との異なる程には甚しがらず此兩者の間に於ては相互異點の對觀極めて著しきもの左に存す即ち聖保羅に於ては我儕は主として其思想の豐澤神聖なることに感被打たれ、聖約翰に於ては其單純直截なるに感被打たる、聖保羅の變轉無究議論縱横多く益辨するの概あるに反して、聖約翰は常に不斷なる天俠の惠福を寧靜に確守して動かざるを山の如きの觀を呈す。聖保羅は推理に由て人を教ゆる論理家の如し彼は辨駁し演繹し反同し歸納し而して多少詳細に眞理の註明を爲す彼は自ら公宣する所の大教義の前に恭敬跪拜し乍ら猛然として論鋒を進む、爾かも尙ほ終始辯難攻撃の境を脱せざるなり。聖約翰は之に異りて恰も彼の靈魂の至高の生活が一個絶大の默示の呆然たる學習なりしが如くに之を語る彼の人を教ゆるや眞理を論明することに由らず自己の觀想を説示することに由らず彼は只其の心に悟り是れ所の事を述べ而して其陳ぶる所を反覆す而して之を顛倒して其兩端を取て複た之を反覆す故に其の教ゆる所は終始殆ど一律敢て變化の妙餘韻の微あるに非ずと雖も尙ほ能く絢爛流麗の文を爲す所以のものは他なし凡う人間の到觀し得可きこと眞理にして彼の反覆する所より實に高尚なるものは天下復たあらざればなり、之を要するに聖保羅の教は人姓的を以て始まり聖約翰の教は神學を以て始まる前者は道徳の眞理を貫徹せしめんが爲に神學に訴へ後者は其人最も抽象的なる神學的思辨工夫の中に至高なる道徳の眞理を發見す、聖保羅は重にキリストの救贖者の思賜を指して義 Righteousness と稱し人類が其他存在の眞法則に回復せらるゝことを稱す、聖約翰は稍趣を異にし此事を更に自然に觀想して之を

二百三十五



一個の生命神の自存の體よりして受肉降世したる言の授生命的人性を通じて其被造者等に流れ出づる所の生命を稱す換言せば則ち聖保羅は斯教の倫理的要素を以て主とし聖約翰は其神聖的要素を以て主となす聖約翰は例へばナジアンゼンの聖グレゴリーの如き父祖等の靈的大祖にして聖保羅は聖オーガスチンの如き古聖哲の大祖なりたるが故に若し幾分意味の制限に附すべきは我儕は聖保羅を以て西方基督教國の模範使徒と稱し聖約翰を以て東方基督教國の模範使徒と稱するを得べし他語以て言へば基督教生活の思辨的方面は聖約翰に於て其型曲を見活動的(若くは實行的)方面の型曲は聖保羅に於て之を見る其れ斯の如く彼等の靈性の形體及び性質を異にせるにも拘らず其の我儕の主の身に關して教ゆる所に在ては兩者とも符節を合するが如きものあるは抑も何が故やネアンテル會て言へるあり『斯程までに出處性向教育を異にせる人々をしてキリストの身位即ち其神性なることに關し斯程までに觀念を一にせしむる所以のの奚ぞこれ偶然ならんや必ずこれ基督教の性質に於いてキリストの生涯が人々の生涯の上に及ぼしたる感激の力に於て將たキリストの外觀と彼の高尚なる自覺の泉底に於ける神の内部的啓示として現るゝ所の模範との相互關係に於て基せる所の可心至力の結果なりと言はざら可からず而して此書は一に只だキリストが神の本性己れと偕に住むとの自覺を發表し給ひし不謬證意の機能に於て其合一并に差異の點を發見せしに外ならざるなり』

〔註〕ネアンデル更に附言して曰く若しキリストの無始無終の神子たる教義は聖保羅の之を宣傳したるときに全く彼一家親意見に過ぎざるものなりしならんには、これ猶太人に普通なる唯一神教の信仰に衝突するものとして使徒等の中よりすら更に甚しき反動を聖保羅は速きた

るならん何となれば使徒等若しキリストより受けたる教訓并に自己等基督教の智識に於て其聯結の點を發見せざりけらんには斯の如き靈想的接神學の要素は生來會て耳にだもせざり所なる可ければなり然るに聖保羅は他の使徒等より斯の如き公然の反動を速きたるの痕跡毫も見る可き無きことを奈何んせんや

以上の如き現著なる事實を正當に解明して其所以を知るには彼のダマスコの途中主に感化せられたる當年の迫害者と晚餐卓上キリストの懐に倚りたる愛弟とは共に其主たり師たる者の神權に關して全然所觀の吻合する所ありしと斷ずるの外他に道ある可らずされば吾が讀者にして萬一にも聖約翰の懐きたる如き信條は惟だ彼の沈想瞑思神仙的なる生活にのみ適したるものにして止まり當今の如き時勢には通用せず我の如き状態の必要には關せざるものなり杯いふ考に苟くも誘はるゝことあらんには請ふ直に其眼を一轉し此の異邦の大使徒に向て之を注げ當今の外勢如何に多忙なるも聖保羅に匹敵するの大活動を爲すことは恐くは難からん彼の負ひたる如き辛勞及び憂慮の前には人情の弱點より恐懼戰慄せざる者蓋し一人も無かる可し思ひ見よ純然たる利他の目的の爲に何の盜賊の難同族の難異邦人の難城裏の難野中の難海中の難の僞の兄弟の中の難を忍んで彼が如き大旅行を爲すに勝る者當今の天下果して克く幾許人があるや(哥林多後書十一章二十四五節)况んや痛苦疲勞屢々寢らず飢渴きしばく食を絶ち凍寒裸體の慘狀を経て爾かも大丈夫の生涯を辱めざる者に至ては當今の世絶へて彼に及ぶ者ある無きなり(同章全章二十七節并に六章四一十節十一章五節參照)即ち及ぶ者無しと雖も抑亦た其の劣等なる道德程に於て尙ほ且つ我儕の爲す可き事少かならず隨て早晚ともに忍ばざる可らざる所の苦難も亦た



多しとす而して其爲す可きことを健げに爲し忍ぶ可き所を甲斐く忍ばしむるものは一に惟た此使徒の懐きたる大確信に依る可らず見よ聖保羅が凡てのものを裘るを甘じたるは遂にキリストを得んが爲なり彼が已を勵ましてする所の一大存在者に由りて凡ての事を爲すを得たる所而已嗚呼我儕此定め無き浮世の轉變に處して而し後終に死なんことを期する者は希くは基督教徒たる生を爲し又た死を爲さんことを欲す夫れ唯だ之を欲す故に我儕も亦た此等キリストの極初の從僕の方たり喜たりし所の信條の不朽真理を深く我が靈魂の奥底に學まざる可らず語を換て之を言へば我儕も亦た均しく彼の人性を有する所の最良友即ち其の言語は我儕の心を照らし其の血は我儕の罪を潔め其の聖奠は我儕を新にし且つ擁護する所の友たるキリストは實は其更に高尚なる本性に於て不謬全愛全能の神に外ならざることを信じ且つ口に表さずして奚可ならんや。

第七講 『父』『子』同一體の教義 THE HOMONION

多書第一章九節

人文在りてより以來數千歲天下歴史の趨勢を熟ら按ずるに凡て自ら以て人間の思想を規矩し其行爲を支配するの權ありと爲す所の大教説が毎に激烈なる艱難試練に遭ふて其力の強弱を驗せらるゝことは數の免れざる所なるが如しさればこそ人生の經驗より出づる通譯にも時代なるものゝ保藏的建設的の力よりは寧ろ其破壊的の力強きを嘆ずるを轉た痛切なるものあり古人即ち

曰く

嗚呼時なる哉時はこれをべてのものゝ仇にぞある。うが恐ろしき齒ぶじもて次第くは蝕はみつ殺さで止まぬ力には何ものか克く堪へぬべきや Ovid. Met XV 2224

「譯者曰く羅典古語の微妙なる予の得て寫し出す所に非ず讀み難く其意を傳ふるのみ豈敢て之を譯と言はんや」

然り而して斯く時代の破壊力なるものが人間の思想及び教説の上に勢を逞ふするの著しきとは敢て其物質的若くは社會的事實の上に於けるの著しきに譲らずして彼等が時代の爲に蒙むるを免れざる所の破壊作用は世の政治的の制度や文學枝藝上の製産を脅かし之を裏滅し之を解體せしむる所の作用に比して縦ひ幾分か迂曲巧回なるにもせよ其實際の力に至ては決して劣る所あるにあらざるなり

されば凡て教説若くは教義なるものは時代の經過に隨て必ず内外二様の難を蒙むるを免れざるが如し即ち内部よりしては敏辨解剖の論法によりて支離滅裂たらしめらるゝの危険あり一の教義にして一度人間智學の大海に掉すに當りては千種萬様の思想及び學派の士は飽くまでも之を驗考し之を細查し然る後にあらずんば肯して受容せざらんとす此の如きに至りては其教義を組織せる所の許多の成分其教義が畢竟の基礎となせる所の許多の原理は各々別々に検査闡明せられ而して時には教義を完全に代表するに缺く可からざる若干の成分が全然排斥せらるゝことあり其時には教義の組織的成分は其儘に保存せられ乍ら其諸成分を調合結成するの分量を根本より變易せらるゝことあり時には亦爾來沈靜なりし然し乍ら初めよりして該教義の組織中に潜伏し居たる若干の智力的溶解力を刺激して俗眼の評價に隨て其教義を破り了せんとすることもあ



り或は亦該教義と外來の或る危険なる哲學との間に相近きの點あることを發見して盛んに之を唱道し而して其哲學者は一種義侠の精神に於て半ば其教義の身方となり其半面を保護しつつも尙ほ他の半面を放擲するが如きことあり或は又た外部より一種の陰險なる智力的中毒の該教義に侵入するありて人々は單に其教義をば其時の精神若くは思想の一系統に應じて適用すと思惟しつつ知らず識らざる間に該教義の精華美點を没却し其生命たり中心たるものを腐蝕し了するが如きこともなきにあらず斯の如きに至りては其教義の肢屍遺骸は暫く思想界の道路溝壑に放棄せられ然る後孰れの時代に於てもなす所の彼の折衷學系の製造に餘念なき一種の古物探索家が其智力的の斷片を採掘して之に與ふるに自己私立の博物場たる折衷學の組織中に名譽の地位を得て之を其の會で全盛を極めたる時には根本より相反對せし所の他の死説の遺骸と兩々相並べて得色あるに至る

若しまた一個の教義にして縦ひ右陳ぶる所の如き内部よりせる破壊力には充分に抵抗する程に緻密強剛なりとするも尙ほ且つ常に外部よりせる反對説の震動力に克く抵抗する覺悟無くんばある可からず天下何等の教義にもせよ全然と外よりの侵襲を免るゝ者は一としてあるはなくして凡ての教義は早晚ともに必ずや反對せらるゝ者なり縦ひ如何に脆弱微小の教義たりとも其存在することが頼て他の反對を招く所以にして何等の教義と雖も他の教義が貪る所の世の注意をば幾分か已れに曳かざる者はなく縦ひ他の教義を妨礙し若くは正面より之に反對せざる迄も他の教義が自己の爲に愛惜せる人心の中に幾分の地位を占領せざるは無く斯くして其一説は他の怨恨を速き多少共に反對を速く而して此の反對は其反對説を保持する者と並に他より來つて反

對するものとの協力に由りて熾盛なるを致すなり而して人心奇を好むの癖は唯に使徒時代の警敏なる羅典人若くは現今の佛蘭西人のみの特色に非ず實にこれ天下人類の其揆を一にする所にして千差萬別の問題に關し悉く然らざるは無し新奇てふことが人心を曳くの力あるは美術若しくは詩文の製産否遊技若くは服裝の流行に於るも將た高尚なる學問思想若しくは研究に於る毫も異なるなきなりさればこの奇を好むの人心を以て直ちに輕燥浮薄と爲すが如きは其深義を觀造するの咎を免れず好奇心なるものは縦ひ其最劣等野卑なる姿に於ても尙ほこれ人の心が創作新造の高性能を有する活證にして一種希望の不休性唯だ「一箇の存在者」獨り能く之を充たし給ふ所のものなり而して此のことや會々吾儕をして左の事を覺らしむ曰く「一箇無限無極の存在者は彼自由の爲めに我儕を造り給へり而して凡て物品にせよ人物にせよ若くは教義教説にせよ苟くも單に有限にして世俗的なるものは決して吾儕の心情思想の中に於て神に代りて其地を占むること能はず隨て我儕をして永久安靜ならしむること能はざるなりと斯るが故に凡て人として白駒の足掻きいとも繁き生涯の旅路を過ぎ行くに方り若し青眼を盡くひ鏽くさること無き天の寶産に向て固定するに非ずんば則ち其人は頓と全く好奇心の奴隸たるを免れざるなり斯る人々の追ひ求むる所の奇事新物は一時或は其人の心を奪ふにもや足らん然れども其心は一事一物に安定すること能はず日夜營々として變遷定まりなき好奇心の爲めに輿畜の料たるを求めて休まざるなり譬へば徑傍の一草花の美麗なるに其魂を奪はれ遽々然として屈みて之を摘み而して後其稍々凋落するや忽ち之を風前に擲つが如き或は一時海濱に輝ける貝殻石片の皓々たるを見ては手の舞ひ足の蹈む所を知らず卒如として之を採て而して後忽ち之を海波に投じて復た顧ざるも



の如き然り何にてもあれ單に人爲なるものは決して更に新なるものに奔する人心を自己の爲に支ふること能はず何等の教義と雖も更に新進の説出づるに會しては決して世の爲めに陳腐朽死の宣告を蒙むることを避くる能はざるなり尤も人造の教義は之を短ふしては數年之を久ふしては數百年に存することあり其長短は一は其教義が含める不變真理の多少に由り一は來つて其れと輪贏を争ふ所の新説の強弱に由る然れども何等の説と雖も決して奇を好むの人心を永久に満足せしむること能はずして早晚共に廢滅に歸すると免れずこれ天下の定數と爲すなりされば宗教上の教説に於るも純ら人爲なるものは亦此定數を免る可くもあらず時代の徑過するに隨て必ずや變易せられ惡化せられ改造せられて而して後更に強力なる他説の爲に取つて代らるゝなり古語に曰く

『世の中のはかなきものには皆時あり彼等には時ありて而して滅ぶるなり』と

嗚呼これ神與のものに對する人間思念の眞聲にあらずや人類在りてより茲に幾千歳日夜無量の經驗よりして人爲物の頼む可からず完からざるを悟る者熱か亦此聲を發せざるを得んや唯うれたるを得給ふ然り歴史上の事實として百世に亘りて變らざるものは只獨り神の真理あるのみ謹で按ずるに我儕の主の神性の教義が一たび人間の思想界に入り來りてより以來今日に至る迄未だ曾て予が上述したる反抗的及び破壞的勢力の作用に暴露せられざりし事はあらず古の世使徒等の眼未だ瞑せざるに方りて該教義は早く既に當時の好奇心と戰はざるを得ざりしなり即ち哥羅西人は其時代に盛んなりし一種の世界觀の趣味の爲に或る放蕩なる宗教上空想を以て此教

義に結合せんと欲し加拉太の教會に於ては此教義をば猶太律法の廢儀式に復舊せんと欲したるもこの如し而して此の兩の場に於ては共に彼等の好奇的理論の我儕の主の身位的尊嚴に關する使徒の教旨に反對したるなり又其時代に至つて一種のバシリデス若くはヴワレンチナス流の粗硬なる想念が基督學に新形式を與へんとして人心を動かしたるの勢は更に一層繁盛なりしなり稍其後に至りてアレキサントリア折衷學派の論者等は該教義をして彼等の批評分解に従はしめんとし而して又他方に於ては新ブレト派の哲學が該教義に對するに一種強烈なる智力的の同情を以てし而して此智力的の同情は香滅的扭歪的の勢力としてや何等の人爲的定教をも呑み滅ぼさずんば止まざらんとするものなりしなり最後に該教義は長年間綿々として絶へざる單人論者等のために正面より反對せられ即ち上はエビオン派より下はアリウス派に至るまで些少の間退はあれども未だ曾て此種の反對を斷ちたることは無かりしなり抑も基督神性の教義史上に於てアリウス争論はこれ困難の絶頂にして隨て勝利の絶頂なりし物なり究むるに該争論は此教義に對して余が上に陳べたる所の三様の試練を一時に加へたるものとすアリウス論者は努めて其所説に獨創新見の觀を呈せしめんと欲し教父等を罵りて智力的貧窮者と爲し彼等が單に其受けたる所のものを傳ふるに汲々たるを以ての故に之を嘲りて愚蒙墨守を事とする者と言へり

アリウス派論者が其説を行ふの方式は蓋しアンテオクの說辨派に由來せるにしてアリウス主義は此論式を并に別に多少の哲學論 Philosophical Placita は敢て防ぐ所なしとの臆斷に由りて破壞的分解を恣まゝにし本教義を内部より殺滅せんと試みたりこれ固より更に古き異端者等が本



教義に對して呈したる所の直接反對を襲奪し且其勢を加へたるものなること言を待たず然かも尙ほ此主義は大アマナシウスの困難苦闘及び勝利の爲めに醜を干歳に流しつゝ世の記憶に不朽なるを得たり而して此争ひの直接原因は即ち此主義が我儕の主の窮竟神性に痛く反對せるに由りしなり

我儕の主の神性と云ふが如き大教義が斯の如く反對を蒙るは數の免れざる所復怪むに足る可きなし何となれば此教義自らが頼て爾かく驚く可く恐る可きものにして、誠必實意之を信するものには與ふるに基督教の眞價値の勝妙絶類なる觀念を以てするに引き換へて苟くも其虚偽ならんことを疑ふ念だにも存する者に取りては是れ全然忍容す可らざるものなればなり蓋し此教義は之を眞實と認むるものに對しては其者の全所有を獻げんことを要す其要求の巨大にして且つ假借なきを單に人間の理性及び想念を求むる而已に止まらず亦其全愛情全意志をも獻げしめずんば止まざらんとす斯るが故に此教義に對しては唯だ其れを以て中心實該と爲す所の基督教に對する一般的反對の外別に特殊なる私情的反對の起らんことを固より其所なるが如し實に斯る教義は一見決して地に平安を來らす者にあらず却て争ひ分れざるを得ざらしむ即ち家族を分れしめ都邑を分れしめ國民洲邦を分れしめ而して其熱烈なる敵對者の案出し鍛鍊する所のあらゆる武器の鋭鋒に自ら當らざるを得ず若し此教義にして『眞理の本源』より流れ下らず絶對不易の基礎の上に立てるものにあらざりせば由來其自ら速ける所の反對の烈火に遭ふて溶解燼滅するの外無かりけらん特にアリウス争論は智力的の大暴風雨をして其上に壓下し而して此暴風雨の破壊力は何等人爲的の理説をも四裂八散するに餘りありたるならん然るに熱か圖らん風雨一度

定まりて而して此教義が第四紀大會の決議中より灼然として現はれ出づるに方てば譬へば雨露散り消れて大月の天邊に再び新たなるなるが如く皓々輝々として鮮なると恰も聖徒保羅及び聖約翰の爲に公宣せられたる時の如くならんとは是に於てか知る由來抵抗なるものは會ま唯其打ち勝つ能はざる所の眞理を強ゆるに過ぎず該教義が滔々奇を好むの人心を制し反對的分折家の強力に勝ち私情的攻撃者の殺倒を鎮むるに至りしや茲に始めて此教義が淺薄なる觀察者の爲めに玉石同視せられたる世の哲學的想念の如きものは全く其撰を異にせるを明になせり斯くして該教義は些の變易を蒙らず依然として其の始めより含蓄せし所を含蓄し排斥せし所を排斥せり爾かのみならず爾來該教義は其異端説との境界を更に明晰に認められ且つ其認定線を防守するの必要に關し更に強硬なる感念を以て保持せらるゝに至りぬ是に於て乎教會は彼のアンテオケに於て始めて道破せらるゝに方り之を採用するに躊躇したりし所の『父』『子』同一體 Homousion なる語を以て從來未だ曾て教會の心中を須臾も距れたること無き眞理を言明するに最も適切なる標號と爲し且つ動もすれば其の大眞理を破滅せんとするの恐る智力的解體力抵抗するに屈強の武器と爲して之を採用したりきされば此語 Homousion は本教義を變更したるにあらず却て之を保護したるなり此語は此教義に被するに一種新たる智力的社會の悟り易かるべき言語の上衣を以てし爾かも其實體は依然として同一に保存せり此語は彼の『神の道』若くは『神の貌』てふ使徒の標號を更にプラトニ派哲學の趣に翻譯せしに外ならず而して今に至る迄此語はキリストが父なる神の本性と絶對的に同一なることを完全に確説せるものとして又其眞理に反對せる謬誤論者の最大努力及び最大敗北の紀念として且つ其誤謬を克服したる所の眞理が基



督教思想界を統御せる大帝國教會を萬代不易に維持するの保證として我儕の信經の中心に嚴然  
 として其位を占む豈亦熾んならずや  
 但し吾人は此『父』『子』同一體てふ定文に對し今日尙ほ存する所の一聯の批評系を熟知す其批評  
 論者等は教會の初代に於ける基督教徒の一般不定なる信仰と第四世紀に於る嚴格なる神學的氣  
 質との間には雲泥の相違ありとのを精確なる考證よりは寧ろ熱烈なる情念を以て喋々と主張  
 し即ち説を爲して曰はく教會の極初の信仰は不定單純廣漠にして其餘りに小供らしき驚聞異話  
 を以て充つるや之を分解するに堪へず其餘りに漠然不確なるや之を以て一定なる神學の要求に  
 應ずるに足らざるものなり然るに其後アレキサンドリヤに於て教會は其信經を精密嚴格にして  
 排他的なる模形に一定あることを學び斯くして其從來寛柔なりしものと結晶せしめ付て自由な  
 りしものを束縛するに至れり而して此極初教會の新鮮なる信仰を凝結して之を宗教會議の信經  
 とすに至りたる步履の間に於て安んず其根元信仰を變易し擴大せしことなきを知らんやと由  
 て更に彼等に問ふて曰く子等は如何にしてか基督は父と同一體なりと嚴説する所の信經が極初  
 の基督教徒等の奉じたる單純なる信仰を眞實に言ひ現はせるものなることを知るや或然り事  
 實は却て其然らざるを示すが如くなるを奈何せんや斯く初代不定の信仰を一定不變の標號を以  
 て言ひ現はさんと努力する同時に知らず識らず其言ひ現はす所の信仰其物を擴大したることな  
 きを得んや熱誠奉事の希望及び感情は發憤焦急の論法よりせる推論と相須つて焉其眞理の根  
 元的を補足追加するに與つて力ありしことを知らざらんや斯かればニケヤの信經は使徒時代の  
 信經よりは更に擴大せられたるものなるか然らずんば即ち別箇異趣のものならずんばあらじと

吾儕今日に於て耳にする所の許多の疑問若くは斷言大要斯の如し茲に於てか勢ひ予はニケヤ信  
 經と使徒時代の言説との間に存する形式の相違は果して實際に信仰の問題に關し外觀以上更に  
 深き相違を含めるものなりや否やを考窮するの止むを得ざるあり請ふ以下之を論ぜんを欲す  
 第一 之を考窮するに當りて茲に一事の思はざる可からざるあり他なし凡る人の抱ける信念は  
 或は之を言語を以て外部に表することあり或は其信念に應じたる行動を以て表すること  
 是れなり固より人は口に信經を唱し而して其素行之に副はざる者無きにあらず然れども又人は心  
 に信經を奉じて之を行爲に現はし而して精密なる言語を以て其信認を告白するの念若くは熱練  
 を有せざる者も亦是れあり詮するに之に稱ひたる行爲を以て發表さるゝことの間には實質上何  
 の相違だあること無し例へば予若し或る一個人に對して彼は金銭上の事を處するに方りては信  
 用す可からずと公言すると將た斯る信用を以て彼と共に事に従はんことを求めらるゝに際して  
 斷然之を謝絶することは實質上何の相違だあることなし斯る場合に方りて予は止むを得ざる  
 に非ざるよりは何り故らに其人の品性に關して予の意見を悉く發表するの要あらんや予は只其  
 人に關して時に應じたる注意を以て事を處す可き而已勿論予の此行爲は自ら他に明かにして實  
 際其事に關係ある人には一見にして其意味を知ると雖も尙予に於ては是が説明を求めらるゝか  
 若くは人の爲のに予が行爲の基たる斷定を否とせらるゝに非るよりは既に行爲と決心を以て現  
 はしたる所の我が意見を必ずしも更に言語のためには發表するを要せざるなり  
 然らば即ち問題は是なり曰くニケヤ以前の教會は其禮拜者たる會衆並に其教師神學者等の會議  
 共に全體として其貧賤なる弱冠なる衆庶並に其聖徒たり博士たる人々が果してイエス、キリス



トは實に神なりとの信仰を含有する所の行爲若くは言語を爲したるや否や、思ふに斯の如き問題は一見之に答ふるに甚だ難きが如し何となれば歴史は常に半面に偏するものにして収録する所多くは大人名士の言動即ち小數者の言動に止まればなり固より時としては法庭若くは戰場に於て起れり「些事小件を収録することも無きにあらず然れどもこれ吾人をして或る一定の時代に於て萬象の心を支配したる思想及び感情の潮勢を確かに卜知せしむる所以のものにあらざるなり」世俗歴史の原則概ね斯の如し然れども基督教會の真相は此種の觀察を以て止む可きにあらず教會の眼中に於てや多數者の利害風習行動及び不文者貧賤者の苦樂は君主若くは僧者の利害風習行動苦樂に比して其價值決して劣れるものにあらず何となれば教會の境域内に於ける神政治の標準は智力的にあらず社會的に非ずして道德的のものなり教會の創立者たるキリストは最高の名譽を世の治者名家の上に置かずして却て被治者及び無聞者の上に置き給へり隨て基督教會の歴史は此點を明かにすることを努む而して初代一般に行はれたるイエス禮拜の實事を證として彼の神なることに於ける基督教天下の信仰を證明す

史に用ひて徴するに初代基督の教會は單にイエス、キリストを稱讚するを以て足れりとせず實に彼れを拜禮したりき教會は彼の光榮ある身に對し祈禱跪拜歸命等凡て基督教徒たる否とに拘はらず苟くも眞面目に一神を認むる者が由て以て全能の造物主に對し自己の被造的關係の感を發表せる所の貢獻を盡して接近したり蓋し教會の初代に方りては世の只理論者の唱ふるが如き凡て無限無極の神に關する更に高尚眞正の智識を以て神を論ずる時は自然に人をして全然たる歸賴の感無量恩謝の情等凡て神に造られ神に治めらるる所の理性的生物の本色たる所の感

念をキリストに對して致すを止めしむといひ或はキリストに對する我儕の關係をば更に容易なる態度に變更して彼を以て單に神に等しきもの若くは神に等しと自ら認許して一個の睿智有力なる保存者を智性的に認め且其行動事業の頗る大なるや廣く人類思辨界の注意を已れに曳くに足る者なりと爲すを得んと云ふが如きをば未だ教會の思ひも寄らざる所なりしなり教會は只管に神を禮拜したり而して又神なりと信じてイエス、キリストを禮拜したり教會は未だ曾て禮拜と稱讚とは只程度に於て異なるのみとか或は眞面目なる稱讚は實際上禮拜に等し禮拜とは畢竟熱愛の念を最高度に進めたるもののみと云ふが如き念慮を以て其キリスト禮拜の意義を没却したることは未だ曾て一たびもあらざるなり』敢て問ふ禮拜は稱讚の高度に達したるものなりとの説明果して精確のものなりや否や暫く茲に之を論究するは現今思想界の事情に於て人以外必ずしも無用の業となさざるべし思ふに此兩者に斯の如き關係ありと云ふは不眞も亦甚だしきことにして仔細に檢し來れば禮拜と稱讚とは單一の目的者に對しては決して兩定す可からざる者なり成る程詩家歌人の空言としては無限に稱讚し盡くすを稱して禮拜とも言ふを得るならん然れども人間の常識及び分別力を以てしては吾人は決して稱讚は熱して禮拜となるを認むることを肯ざる能はず必ずや此兩者を以て本來に異なる精神作用と爲さざるを得ず禮拜は蓋し尊敬の至極なるものにも或はあらん然れども決して稱讚の至極なるものにはあらざるなり稱讚と禮拜との差別は各其目的物を異にすることに由て明かに知らる而して其差別たる宵壤も管をらず若し夫れ嚴密に之を言ふ時は稱讚は有限者に向つて之をなし而して禮拜は無限者に向つて之を爲す何を以て然るか他なし凡て人の他を賞讚すと云ふは即ち其稱讚する者と稱讚せらるる



者とは固と同業者なることを縦ひ實業上然らずとも觀念上に於て豫め意味す斯る稱讚は決して漠然不規則なる驚嘆には非ずこれ一箇の判斷を意味し一種の批評たるものなり夫れ唯だ批評を故に其稱讚する所の目的物と稱讚者自身の内省自制の標準とを兩立せしむ此標準は即ち我儕自身の理想たり而して我儕が其目的物と此理想とを比較するの行爲は取りも直さず我儕自身の行爲なり勿論我儕の此理想は他より借り來りたるものにあらず我儕は未だ曾て此理想を自ら完全に發表し得るとは思推せざらん否我儕の批評的稱讚を博する所の目的者に匹敵し得ること我儕自身に屬す我儕は自ら之を所有することを信じ又之を以て我儕の前に現はるる所の他物と比較し得ることを自ら疑はず否其他物と此理想とを比較するに方りては我儕は多少とも己れと理想とを同一物と爲すなり例へば人ありて一個の善書に對し其稱讚を現すとせんこれ決して其人自らが其善書を畫き得との意にはあらず然れども其人は己が心中に於て善書とは當さに斯くあるべきものとの理想を有すること並びに其理想を以て美術の特技に關する己が意見を造るに堪へたる者なりとの意を示すなり此の如く其人の繪畫稱讚には頓て其當否は兎も角も自ら重んじ兼て又他を稱譽すてふ二重の性質を含むなり然り而して斯く美術批評家として己が理想の美に思を凝らすに方りては若し己れをして其稱讚する所の美術家たらしめば自己の爲めに要求したらんよりも更に多くの功績を心竊かに要求することなきを期す可らず蓋し美術家なる者は必ずや、自己の失點を多少とも自覺せざるなく、常に製作に伴ふ所の苦心焦慮を以てして尙ほ且つ自己の理想を現實に表出するの難きを覺り戚々として安せざる者なるに批評家に於てはさること無ければなり。

さて此の如く稱讚てふことに伴ふて離る可らざる批評的自重若くは自負の念は、真正の禮拜てふものとは全然兩立す可からず。何となれば禮拜とは決して單に身體の俯伏のみに非ず亦た精神の俯伏なればなり。これ至高の程度に高めたる所の尊敬なればなり。これ一個の大尊者即ち凡ての人間の有限的標準を全然超越したる者の前に己れを無にすることなればなり。此大尊者の嚴前に於ては人の精神は自ら何の價値だも權利だも無きものなるを知り、其全然無に等しきものなるを感じて恐懼措く所を知らざるなり禮拜を爲す者は自己の思想心情意志を擧げて一個能造保護の大自然力者の足下に奉獻す神は自ら無からんことを欲す若し在らば只其思想及び言語に絶したる大自然力者の榮光を認めんが爲めのみ在らんことを欲す若し夫れ禮拜てふ事を組織せる精神的分子の中何等の一物最も重要なりとせば斯の如くに自負の念慮をば衷情より自ら制禁すること即ち其最重要の分るにざるなれ。勿論稱讚は進んで禮拜となることなしとは言はずさりながら若し其目的者を認めて稱讚よりは更に高く且趣を異にしたる尊敬に値するものと爲すに至りては實の稱讚は已に去つて跡無きなり稱讚は其目的者が人間善美の標準を全く超越せるものなることを覺るに至つて休むものなりかゝるが故に稱讚は禮拜に至るの階梯たることは或はあらんなれども既に禮拜の念至るに及んでは稱讚は全く無用若くは有害のものなるなり若くも智慮あり謙徳あるの士は其生涯に於て必ずや自が自由に誠實に稱讚す可きものに會すること少なからず而して自ら亦道徳的并に智力的に斯かる稱讚を博することをも得ざるにはあらず然れども人心の異なる其面の如く人の稱讚も亦各其目的者を異にするを奈何せんや。唯獨存



の神にして始めて正當に禮せらるゝことを得、神を稱讃すといふは不敬の意を含む而して其不敬は同儕人類を禮拜するの不敬に等し吾人日常の僥倖たる人類に對して神の如き禮拜を呈するの不條理なるは恰も至上の存在者たる神に歸す可き神聖不可侵の尊嚴に代ふるに吾人が人間の熱練若くは卓越を賀するが如き平心自負の愛顧を以てするの不條理なるに等し聖約翰は榮光に於けるイエスに就て曰へり「我これを見し時死者の如く其足下に仆れたり」と嗚呼豈之を以て單に熱心なる稱讃のみを爲すことを得んや、これ豈彼の自己が全く没したるの行爲にあらずや即ちこれ禮拜の行爲にあらずして何ぞやイエス、キリストをして單に道德的に完全なる人にあらしめば、但し予が前講既に論じたる如く彼れ若し實に人たるに過ぎざれば道德的に完全と認め得可きや否やは問題なりと雖も、或は彼は人の最上の稱讃に値するものにてありたらん然れども歴史上の事實は之に異なりて吾人に示すにキリスト教の初年以來イエス、キリストは神として禮拜せられたるを以てす然り而して此禮拜は決して人々が彼を神なる身位者と唱道したる神學者等に説論せられたる結果として彼に呈したるものに非ずこれ決して冊封の神に竝るの尊號を受けたる異教君主の玉座を圍める燒香の如き陋態輕薄なるものと日に同ふして語るべきにあらずこれ決して精神的の迷幻力即ち之に感染したる者に取りては玄妙強烈にして口以て得て解説す可らざれども後世よりは易々として説明さるゝが如き迷妄力の所産にもあらざるなり此禮拜や亦決して漸々徐々として發達したるの跡にあらず此禮拜が某々の時期に於ては單に一種の宗教的慣禮若くは過事と見なされ然る後其次の時期に至りて基督教徒の爲めに最重最要の本務となりたるが如き歴史的區域の存するにあらず且又イエス禮拜に對しては未

だ曾て教會の中に於て之を一種の新例神の尊嚴權利を犯すのこととして反抗論の起りたること有るを聞かず未だイエスの位は普通無極の神の位として之を伏拜することを學び知らざる者共が單にイエスを中立代願の聖人として呼び求めたる時もあること無しイエス禮拜のことを以てかの古代の教會に行れずして中世以降基督教會の一部分に行はるゝ所の聖人禮拜の如きものとなし之を同日に論じ去らんとするは勞して功無きの事なり何となればイエスを禮拜するの古きは乃ち基督教其物の古きが如く古ければなり然りイエスは其神なる身位の境に於て大古以來常に禮拜せられ給へり而して此禮拜は此身位を單に合宜的にのみならず亦必然的に認定することなりとす

(一) 謹で按ずるに我儕の主は曾て其地上生活の日に於て種々の敬禮を受け給へり而して其敬禮たるや之を呈したる者の心を以て之れを見るに下は東邦的禮儀の常式たるものより上は靈神拜禮の最も直接自覺的行爲に至るまで其趣旨たる管に二三に止まらず即ち一個の嬰兒としてや彼は東方博士等の爲めに拜せられ給へり其公宣教の間に於ては彼は彼より超自然の援助若くは惠福を求めて之を受けたる者共が彼の神聖身位に對する痛切なる敬事を發表せるの行爲若くは言語を屢々嘉納し給へり癩病者は彼に向て呼べり「主」よもし旨に適ふ時は我を潔くなし得べし」と(馬太傳八章二節)宰吏は彼を拜して曰へり「我女はいま既に死ねり來りて彼に手を授け給はゞ生くべし」(同傳九章十八節)ゼベダイの子等の母は彼に來りて拜し而して其子等に與ふるに彼の國に於て第一流の地位を以てせんことを請へり(同傳二十七章二十節)惡鬼の爲に痛く惱まされたるアンナの女の母來つて彼を拜し「主よ我を救へ」といへり(同傳十五章二十五節)



癩病に苦める者の父は變貌の山より今方に下向せるイエスに會し來て彼に問て跪き而して曰へり「主よ我子を憫み給へ」と(同傳十七章第五節)これらは皆豈彼に向つて特別の慈惠を求むる祈禱を伴へる禮拜の事例に非ずや、更に彼の頻死の盜賊が彼に向つて「爾その國に來らん時我を憶ひ給へ」(路加傳二十三章四十二節)と白せるに方りては是れ豈十字架なる不可視世界の治者に向つて誠心誠意禮拜を捧げたるものに非ずして何ぞや、又時としては斯く明かなる禮拜は我儕の救主より受けたる慈惠の認識若くは感謝の行爲として呈せられたるものなり即ち歡喜せるサマリヤの癩者は自ら其癒されたるを見るや返り來りて大聲に神を榮めイエスの足下に俯伏して拜謝せり(路加傳十七章五十六節)イエスの海上を歩みて風波を鎮め給ひし時に方りては船に在りし人々は來りて彼を拜し「誠に爾は神の子なり」といへりまた彼の奇跡的大漁の後に於て聖彼得は其不思議の大なるに驚きて恐惶禁する能はず坐るにイエスの足下に俯して「ア、主よ我を離れ給へ我は罪人なり」と申しぬ(馬太傳十四章二十二、三節)また彼の悔改したる一婦人はイエスのバリサイ人の家の食卓に就けるを見るや蠟石の盒に香膏を携へ來りイエスの後に立ち足下に哭き涙きて其足を濡し頭髮を以て之を拭ひ且其足の口接けてまた香膏を之に抹れり(路加傳七章三十七、八節)生來の一言者ありてイエスを神の子と信するの信を表せる時には彼は此信の告白と共に禮拜の行爲を施せり即ち曰く「主は我を信ず」と而して「彼を拜せり」(約翰傳九章三十五—三十八節)甦りたるイエスが聖婦人等に會して「爾曹安かれ」と詔り給ふや其婦人はすゝみて其足を抱きて拜しぬ(馬太傳二十八章九節)マグダラのマリヤが其深き奉事心を以て圓に於て彼の足を抱かんとせし時には主は之に向ひて「我に觸るゝ勿れ」と告

げ給へり(約翰傳二十章十七節)十一の弟子等は其指命せられたるガリラヤの山に登るの途すがら主と相見たる時に喜懼交々至れるものゝ如く俯して彼を拜せり(馬太傳二十八章十七節)聖トマスに在りては其外部には之を伴へる行爲を爲したることは記されざれども衆に先ちて禮拜の語を呈せり即ち再三其疑念を晴されて主の傷を檢せよと命ぜらるゝに至りて赤心最早禁ずること能はず「我が主よ我が神よ」と呼びにけり(約翰傳二十七章二十八節)最後昇天のイエスが雲に乗りて揚げられ給ふに方り弟子等は其榮光の偉大なるを彼に謝せるものゝ如く「彼を拜し」且大に喜びてエルサレムに歸りしといふ(路加傳二十四章五十一節)尤も以上引證したる所の事例の中或はイエスに呈せられたる禮拜は單に鄭重なる尊敬を表せるに過ぎざるもの多らん時としてイエスは一個超人的の身位者と超人的の力能を操縦せるものとして拜せられ時としては又彼の道徳の高大なるに其感を打たれ我知らず彼の膝下にひれ俯せる者の爲に拜せられ給ひしこともありさりながら若し彼にして單に善き人にてあらんには彼は斯の如きの禮拜を制止す可き筈にあらざるやイエスみずからはイスラエル宗教の根本法を更に確言し給へり曰く「主なる汝の神を拜し唯之にのみ事ふ可し」と(馬太傳四章十節)然るに彼は未だ曾て斯く己れ自身に向て全精全心を傾けて俯伏禮拜するは此根本法を犯すの恐ありと論し給ひしことあらざる却て彼は己れ自身を以て目的とせる此伏拜を默認嘉納し給へり彼は富める一青年に向つて己れを善師と呼ぶことを誡め給ひしと雖も此禁制は決して彼自らが善師と呼べるゝの實權なしとの意を示すにあらざるして斯る人の口よりして斯る尊稱を發することばを唯に無意義の會釋たるに過ぎすとの意を示すなり之を撰ぶを異にして彼がサマリヤの婦人に對して述べ給ひし言語



の如きは實に至高なる心靈上の惠福の爲に己れ自身に向て祈らんことを勧め給ふものゝ如し即ち宣はく爾も神の賜を我に飲ませよといふ者の誰なるを知らば爾われに求めん然ば活水を爾に與ふべし』と(約翰傳四章十節)彼は其弟子等が後に至りて完全に彼を知るの喜悅に於て其靈的渴望心を満足せらるゝの時あらんと預告し給ふことは即ち是なり未だ曾て彼自らが祈禱を受くるを休むるの時あらんと諭し給ひし事あらず却て彼は人の子等が其缺乏若くは満足に於て其喜悅若くは悲哀に於て當然無始無終の父に呈して利益を受く可き所の伏拜を同じく自己の爲めに要求し給へり即ち曰く「凡て爾曹は『父』を敬ふ如く亦『子』を敬ふ可きなり」と。

(二) キリストは曾て自ら其の死と榮光に於て地より擧げられ給ふや否や萬民を曳きて己れに來らしめんと宣へり(約翰傳十二章二十二節)此の曳きて來らしむといふの意は自ら明かになりて彼は單に人をして自己の教に肯服せしめ給ひしのみならず亦た自己の身位を拜せしめ給へり彼が天上の寶位に登り給ふや否や忽にして禮拜の潮は猛乎として教會の中心より湧起し年代の過ぐると共に益深きを致せり教會の初時に於てはキリストチヤンとはイエスキリストの名を呼ぶ者其の謂として世に知られたりイエスキリストに祈禱することは決して或る部分信心家輩の奇癖には非ずし實に基督教一般普通の行爲基督教徒の基督教徒たる所以の敬虔行爲たりしなり彼の聖マツテヤの撰任に方りて使徒等の集會が捧げたる禱は榮光を受けたるイエスに向つてせられたるものなると殆ど疑なく(使徒行傳一章二十四節)而して其後數月ならずしてステパノの名譽なる忠死あり彼の最後の號呼は我儕の主に向つて祈禱にして其模範は實に主が十字架上に言ひ給ひし七言中の二より出づ即ちイエスは其父に向つて己れを殺すものを赦さん

ことを祈り且父の御手に己の靈を托し給へり而して此イエスに由りて父に對して述べられたる言語は亦ステパノに由りてイエスに對して述べらる(使徒行傳七章六十節)ステパノが此苦難の極度に方りて心を歸嚮する所はイエスなり彼が己れを殺す者を赦さんことを祈る所はイエスなり我が靈の世界の王として己れの靈を托する所も亦たイエスなるなり然るに人或は曰くステパノの斯る言語は單に苦しみの餘り啞喑に言ひ出でたる念咒のみ故に斯の如きものを以て神學論の前提となすは不常も亦甚だしと然れども吾人が今論ずる所の問題は極初の使徒的教會に於て果してイエスキリストに向て祈禱したりや否やとのことにあり而して此のステパノの瀕死の祈禱は以て此問題に答ふるが要點なるを奈何せんや爾かのみならず凡て啞喑の間に發する祈念は何等一定式文の祈禱よりも常住不斷の信神的思想及び感情を發表することに於て更に凱切なるものなり蓋し斯る祈念は多年平生用ひ慣れたる祈禱に比して更に本能的に自然的に隨て人の實心を更に眞率に示すものなればなり。若し夫れ此殉教者がイエスに向つて發したる叫呼を以て輕卒無思慮の激語と爲すが如きは解す可らざるのこととす人の將さに死なんとするや其心や極めて確乎何ぞ徒に信神的の空想や虛實不定の所見に執着することあらん人の靈魂は其最後の煩惱に於て其最深最奥の實覺境に歸り來るを常とするものなり且夫れ凡て耻辱と苦難の中に將さに死なんとする人の啞喑の祈禱にはかの世間往々にしてあるが如き瀕死の境に臨みつゝ猶ほ且つ己が將さに往かんとする所の恐る可き神の現前を思ふよりは寧ろ俗歴史中身後の名譽を思ふことなく努めて死際の言行を壯大にする人の演劇的弄技の分子なりとは信ず可からず誠に思へ聖書中に於てステパノは新たなる入教者未だ全く使徒者の信仰及び精神に薰陶せ



られざりし者動もすれば使徒の教旨擴張を誇大するの恐れありたるが如き人なるを知るに足るものありや何ぞうれ然らん聖ステパノは「信仰と聖靈の満ちたる人」なりと明かに記さるるに傳者の一先輩として殆んど使徒等と比肩したる者を見ゆるに非ずや若し又聖ステパノの祈禱はキリストより慈恵を以て彼に象を與へられたるてふ一種特別の事情の下に捧げられたるものなれば通常の祈禱とは異なれりと主張する者あるが然るも尙其ことは必ず不可視の身位者に呈せざる可らずといへる祈禱及び禮拜の定義とは何の關係あると無し然り而して此ステパノが見たる所の神の右に立ちたるイエスの幼象は其明暗の程度に於ては兎も角も大體の要狀に於ては教會の初めより各個の基督信徒が將さに死なんとするに方りて見たりし所の現象に比して決して異なるものにあらずしなりされば聖ステパノにして若し平生曾てイエスに祈りしこと無かりせば彼は決して此時に於てもイエスに祈らざりしならん彼が見たりしイエスの現象も以て彼を誘ふて其生涯の信仰の根本法を犯さしむること能はざりしなる可し若し極初教會禮拜の目的只「父」のみにてありたらんにはステパノのイエスを見たるは唯彼をして其思を「父」に向つて揚げしむるに過ぎざりけん聖ステパノにして若し平生に於てイエスを禮拜するは神の最高特權に反するのとなりと教へられてありたらんには彼は此時と雖も決してイエスに向つて祈らざりしならん而て使徒等に於ては「其一神敎家として若しイエスを以て神なりと信じ「父」と共に拜み榮めらるべきものと信ぜしにあらざるよりは必ずステパノに向つて右の如く教へざる可らざりしなり

實に聖ステパノの此祈禱に就ての論點は彼のアナニヤがダマスコに於けるの祈禱と相對照して理會するを得傳に稱すイエスはアナニヤに幻象裡に現はれ立ちて「直」と名づくる町に至り新悔改者たるタルソのソウロに會せんことを命じ給ふ而して此アナニヤが答ふる所は凡て人の心が自ら神の嚴然たる臨在に關し至深なる感に支配せられつゝも尙ほ神に對して誠信の談話を爲し其極時に或は論諍談議にすら類するに至ることある祈禱の一例と爲すに足る彼乃ち對へて曰へり「主よ我此の人につきて多くの人の語ることを聞きしに彼がエルサレムにて爾の聖徒を苦めしこと如何ばかり乎且この處にては彼は凡て爾の名を呼ぶ者を捕へんとて祭司の長より受けたる權威を有てり」と（使徒行傳九章三十四章）而して此僕の異議は直ちに我儕の主の爲めに言ひ伏せられたりと云ふ然れ共誠に思へ凡て斯の如く難局に當り死地に入らんことを神より命ぜらるるに方りては誰か復た之を逃れんことを祈らざる者あらんや凡て神の旨なりと見ゆる所のことが痛く自己の利害若くは名譽に關して而して其神旨が果して爾があるや否やを疑ふの餘地存するに於て誰か克く之が爲に神に懇へざる者あらんやさればアナニヤの此談議は取りも直さず一個の祈禱なりこれ一個の靈的對談なりこれ其對應者と彼とが日夜刻々に親近することを知るに足るの祈禱なりこれ一個の人心が常住不斷にイエスを交通せる者の言語なりこれイエスが如何に全く其僕の心に於ける幻象を司れるかを明かに見るに足るものなりアナニヤの謂ふ所タルソのソウロがエルサレムに於て窘迫したる聖徒は神の聘徒と稱せられずしてイエスの聖徒と稱せらる且つ夫れソウロがダマスコに於て捕縛するの權利を有する人々が領べる所の名は即ちイエスの名なりアナニヤはイエスを以て神以下のものとなしたらんが如くにイエス以上



の存在者を仰ぐことは爲さず彼に取りてはイエスは即ち神たり禮拜の對應者たり爾かも且彼が一個善友として是に向つて己が心の奥底を懇に自由に打ち明かし得る所の者なりしなり爾かの巷に起て我儕の主の高尊なる身位に對し跪拜を致せることに至ては更に著しきものあり彼の悔改感化の瞬間に於てすら彼は其正當の主としてイエスキリストに對し祈りて指揮を乞へり乃ち呼んで曰く「主よ我は何をなすべきか」(使徒行傳二十三章十節)然り而して其後年聖保羅となり殿中に於て吾儕の主より「速にエルサレムを出でよ」と命せざるに方りては吾人は該使徒が恰もアナニヤの如くイエスに對して己が竊かなる思考恐怖恨憾懺悔を述べて其心中の最奥底に於てイエスよりの應答を待てるを見る其他聖保羅が用ふる所の言語にして由て彼が常任イエスを念じ人體を有せる神なる執權者として無限の明識と權力を以て然し乍ら亦人たる同情遠あらず此意味に於てやイエスは聖保羅の最も早き二書簡中に「父」なる神と對等の地に置かれたり曰く「願はくは神すなはち我儕の父みづから我儕の主イエスキリストと偕に我儕を導きて爾曹に至らしめ給はんことを」(帖撒羅尼迦前書三章十一節)又曰く「願はくは我儕の主イエスキリスト及び我儕の父の神すなはち我儕を愛し且思ひ由つて永遠の安慰と善望を予る者爾曹の心を慰め凡ての善行と善言に爾曹を堅くせん」と(同後書二章六十七節)夫れ斯の如くイエスは前者に於ては該使徒の生涯の外部的運動を指導せるものとして後者に於ては新たに基督教に感化せられたる者其の内部的生涯の健徳者として共に「父」なる神と對等に置かれたり若

し夫れ他の敬虔的言語に於てはイエスの名は直ちに神として單用せらる即ち該使徒は腓立比人に書き贈つて曰く「われ……速かにテモテと爾曹に遣さんことを主イエスに頼て望むと(腓立比書二章十九節)又提摩太に書き贈りて曰く「我に能力を賜へる我儕の主イエスキリストに謝す蓋し我を職に任じて忠信なるものとなし給へば也」(提摩太前書一章十二節)嗚呼これ豈イエスと常住不斷に頌榮或は祈禱を以て交通せる人の赤心より出づべき自然の言にあらざるや聖保羅に取りてやイエスは決して單に或る大業を爲して之を後世に遺して死し逝きたる教師若くは仁者の如きものにあらず彼は實に常住常生の神有形無形の惠恩を與ふる者内部外部の兩生活に於て人類の指導者祐助者にて在ますなり縱ひ我儕は聖保羅がイエスに捧げたる祈禱の明文を記録せるものを有せずと雖も彼が斯る祈禱を捧げたることは疑ふを得ず若し然らざりせば彼は當さに用ゆ可らざるの言語を其書簡中に用ひたるものと云はざる可からず但し事實上よりするときは該使徒は此點に關する彼の信仰及び實行に就て我儕を疑惑の中に迷はしめず彼は斷然として曰へり「若し爾口にて主イエスを認はし又なんぢ心にて神彼を死より甦らせしを信ぜば救はる可しわれ人は心に信じて義とせられ口に認はして救はるゝなり聖書に凡て彼を信する者は辱しめられじと云へりユダヤ人とギリシヤ人の別なし蓋すべての者の主は唯一なればなり凡う之を願求するものには恩を豐盛にして凡て主の名を願求する者は救はるべし」と(羅馬書十章九節—十三節)此最後の句たるや實に預言者ヨエルが主なるエホバに當て用ひたる所とす而して聖保羅は之をイエスに對する祈禱を云ふものとして適用せることは前後文意の關係上疑ふべくもあらず又該使徒が書を致せる所の教會の爲めにキリストの名を以てせる祝福の辭はこれキリス



トに對する間接の祈禱に外なる能はず曰く「なんぢら願くは我儕の父なる神及び主イエスキリストより恩寵と平康を受けよ」(哥林多前書一章二節)曰く「我儕の主イエスキリストの恩なんぢらと偕に在らんことを願ふ(羅馬書十六章二十節)と若し夫れ聖保羅が其身に於ける一個の秘密羞耻の弱所を取り除かんことを請へりしに至ては其祈禱なるを論ずるまでもなし彼言はずや我これが爲めに三たび主イエスキリストに請ひ而して我恵み爾に足れりとして拒絶せられたりと(哥林多後書十二章八節九節)我儕は此イエスに對する祈禱を以て聖保羅の靈的生活の中一個例外のことなりと想像せざる可からざるか斯かる宗教的行爲は果して熱誠にして克く終始ある人の靈生活の中に單だ一たびのみ有り得べきことなるが豈それ然らんや該使徒は信じけらく神の獨生る人界に遣さるゝに方ては天上の使たちは彼を拜せんとを命ぜられたりと(希伯來書一章六節)彼の遜卑及び苦惱の日既に終るに及び彼が尊榮を受け給ふの大なるや此地上に於て彼の帯び給ひし所彼の人性の記號たる所の名は今即ち彼の寶位下なる道徳世界よりして捧げらるゝ祈禱の潮の滿つる所となり神なる人として彼は天使人類及び地下に於ける死者の靈の爲めに拜せられ給ふと稱す(腓立比書二章九節十節)されば使徒等の實に行ひし所は即ち以て彼等の信仰せし所を見るに足る而して地に在りて彼の僕等がイエスに對して捧ぐる祈は天の教會に在りて彼に捧げらるゝ禮拜の反映に外ならずと信ぜられたりき此信仰は縦ひ聖彼得の簡短なる書簡に於て見ゆると明かならずとするも聖約翰の同じく簡短なる書翰は特に明晰に現はれてあり聖約翰が其第一書五章三十一―三十五節に於て「凡て我儕の神の旨に合へることを求めば彼ならず聽かんこれわれら彼に向て篤く信ずる所なり凡て我が求むる所を彼の聽くことを知らば

我が求むる所を彼に得ることをも亦知る也」とは「神の子」を指して云へるなり而して此地上の教會の請願は至上の天の寶位に於て我儕の主が傷きたる人性を受け給ふ所の禮拜と相契應する者とす經に曰はく「我寶座及び四の活物のあひだ長老等の間に羔の立ち居るを見たり此羔さきに殺されし事あるが如く彼の周圍を廻りては三重なる禮拜の群あり其最内のものは四の活物および二十四人の長老より成り而して此長老等がのゝ琴を執り又香を盛りたる金の香爐を執りて羔の前に俯伏したり此香は聖徒等の祈禱なりと(黙王錄五章六節―八節九節)此等は寶座に最近なる階梯に立てる所の侍臣にして更に遠く居れる無數の祈禱者等を代表す但し彼等亦寶座の前に俯伏して殺されたる而して崇められたる羔に對し恭しく新しき歌を唱ひて言ひけるは「なんぢ曾て殺され其血を以て諸族諸音諸民諸國の中より我儕を購ひて神に歸せしめかつ我儕の神の爲に我儕を王となし祭司と作し給へば也われら地に王たるべし」(同八章八節九節)此等の長老を周りて至聖所よりは更に一段距たりて無數禮拜者の群あり曰く「我また見しに寶座と活物および長老等の四圍に衆々の天の使の聲に曰けるは曩に殺されたりし羔は權威富智慧能力尊敬榮光讚美を受くべき者なり」と(同七章二十三節)而して此靈心天に朝したるの使徒は更に此等の禮拜者の外に第三の圍繞者ありて常住不斷の禮拜を保てるを見る即ち聖約翰の幻象は此天上の生物が捧げる禮拜の二重の内環の外部に於て全被造物の集團を認む曰く「我また天および地および地の下および海の上にある所の凡て造られたるもの又た其中に在るもの皆いへるを聞けり曰く願くは讚美尊敬榮光權力寶座に座するものと羔とに歸して世に窮りなからんことを」(同章十三章)これ即ち有形の全被造物が捧ぐる所の讚美なる此宇宙全生物



の壯嚴なる運動に對應する唱和の聲は内部禮拜者の環より起り「四の活物アーメンと曰へり」(同章十四節)然り而して此地上の贖はれたる教會は如何にして此天地合奏の唱和に與かるか曰く「願くは我儕を愛し其血を以て我儕の罪を洗濯め我をして王となし祭司となしてりの父の神に屬さしむる者に榮光と權力世々窮りなく有らんことをアーメン」と(同一章、五六節)此默示録に於ける羔の禮拜を精確にして誤解するに由るなし此描出は同録中に於ける教會の未來の運命を畫けるものと同日にして論ず可きものにあらざる教會の未來を畫ける所に在りては其寓意如何に關し種々解釋を容るゝの餘地ありて其表號に對して確定不動の意義を附せんとせば幾分か解釋者の智力的及び靈的極解を用ひざるを得ず其の獸の數や千福年の年代等に關する疑問を完全に解明せんことは望む可くして得可からざる所たり然るに之に反して此羔とは果して誰を意味せるにや且つ此の羔に對して爾かく嚴肅に呈せられたる禮拜の性質は如何といふに關して蓋し斯く使徒時代に於て吾人の發見する所イエスキリストに對する禮拜に就ては茲に三個の觀察の等閑る可らざる在て存す

(イ)第一此イエスに對する禮拜は決して諸天使若くは地祇を一般無差別に拜したる禮式の一に屬するものとして解き去る能はず斯の如き禮式は一つも新約の天地に於て發見せられず却て斯かの外に禮拜するを嚴禁せる所のシナイ律法を我儕の主イエスキリストの口づから更に確定し給ひしことを明記す(聖馬太傳四章十節出埃及記六章十三節參照)聖彼得は歡喜せるコルネリオ

の彼に對して俯れ伏すことを許さずこれ或はコルネリオが彼を以て人間以上の者となさんことを恐れたればなり(使徒行傳十章二十五節)リステラに於て感激極まれる衆が聖保羅及びバルナバを以て神たち人の形貌を以て降れる者となして彼等に犠牲を捧げんとしたる時には聖保羅は惶々として恐れて其衣を裂き我儕も亦爾曹と同じ情の人なりと云ひて之を禁め禮拜の行ひは唯だ獨一の生ける眞の神にのみ致す可きものなることを論ぜり(使徒行傳十四章四十五節)聖約翰は其幻象の中に見聞せる光景と響動の偉大崇高なるに其感撃を撃たれて轉た天使等の足下に俯れ伏して拜せんを爲したりしに彼は直ちに之を禁じられ天使等も亦之と同じく僕なること只神のみ獨り禮拜の目的者なることを告げられたり(使徒行傳二十二章八九節)使徒時代に在つて哥羅西教會の信仰を危くしたる神智的猶太風接神學派の一大特兆は天使禮拜のことにてありければ聖保羅は極力之を詰斥す之人をして教會の大主長たる神の不可侵權を思ふの念を寛からしむるに至る恐れありたればなり(哥羅西二章十八節)勿論新約聖書は吾人に教へて曰ふ吾人基督教徒は萬福なる天使及び聖成せられたる死者と共に一大團體を爲せるものにして其團體の各員として自然に親密なる交通を有すされば不可視の世界は唯に吾人の上にのみあるにあらず又吾人の周圍にあり吾人は既に其世界に入りたる者にして地と天とに於けるキリストの王國は共に一大超自然的の全體をなすと然りと雖もイエスの要求し給ひイエスに呈せられイエスの嘉納まします所の禮拜は新約聖書に於て斷乎として不可侵のものとなせられ何が次等なる禮拜を所造物に呈して以て此不可侵權を荷くも緩慢に付し若くは掩蔽するが如きの事例一としてあることなし既に稱して禮拜と云ふ其間に高等次等の區別を立て夫れに由つて此議論の勢力を



弱め得るものにあらず禮拜は唯だ神而已の要め給ふ所唯神のみに呈す可き所のものたり而してイエスにして若し禮拜せらるるとせば其所以は他なし唯だイエスは神なるが爲に然るなり

(る)使徒の時代に在りてイエスに呈せられたる禮拜は多くの場合に於ては一つに神の智性的所造物より至上神のみに歸す可きの禮拜なりしと疑を容れず而して神自らは眞正禮拜の唯一目的者たる可きと論を俟たず然れども神の無始無終の御子の其人と爲り給ひしときにも決して其の神たるを止め給ひしにはあらず彼が己れを信ぜしものより其の信仰に出づる所の唯一の禮拜を受け給ひしは神としてなりとす此事たるや縦へ今更に他の引證を爲さずとも前段既に論究したる黙示録中天上禮拜の描出に照らして明かなり黙示録中榮光の主の禮拜は決して單に彼の救贖事業の完成なるを稱揚信認するのみに非ず彼の受肉降世の時に於てすら既に禮拜はキリストの神なる無始無終なる身位に對して呈せられたるものなり勿論吾儕が福音書中に於て發見する所の『拜す』てふ言語は人心の許多の恣勢を代表す即ち上は至上者たる神に致す可き全然たる俯伏禮拜より下は人心の喜愛及び希望恐怖に由て以て其良友に打ち明くる所の信頼交親に至る而して此の低き意味なる禮拜は其高きものに導かれ且つ説明せらるるものなり然れども此低き禮拜はキリストの受肉降世の謙卑と目的とに克く應和するものにして神の受肉降世が人心より招き給ふ所の信頼交親は決して神の權利を犯す者とは言ふ可らず憚る所なく信頼してキリストに心を打ち明くることは彼の身位に對する禮拜と兩立せざるものにはあらず眞個基督の徒の信頼は克く晚餐卓上彼の懷に己が身を托す而して亦眞個基督信徒の信仰は克く彼の榮光を認め彼の足下に俯して死せるものゝ如くなりて最敬禮を呈す

(は)イエスキリストに對する使徒的禮拜はキリストの人たるを含まれること毫も其神たることを含めるに讓らず聖保羅の言ふ所に由ればイエスてふ彼の人性的名稱否を彼の人性其ものは地に於て天に於て將さに死したるものゝ中に於て禮拜せらる可き者たり黙示録の幻象中に寶座に居りて拜せらるるものは未降世の『道』Logosにはあらずしてイエスの傷つきたる人なりかるが故にキリストの神性を拜しつゝ努めて其人性を拜するを避けんとするは取も直さずこれ其禮拜の眞の目的者たる彼の神なる無始無終なる身位が彼の人性と永遠無窮に結合せることを忘れんとする所以なりキリストの人性は既に其神性の中に取り入れられて最早これ彼の神なる身位を長へに離す可らざるの屬性なるが故に萬人は須からく彼の人性の前に其膝を屈せざる可らず天使等が彼の寶座に周り侍して彼を未降世の神とせず殺されし事ある『羔』として禮拜を致せることは一に此理に由るなり

(三)斯の如く使徒等の教義及び實行に根底してイエスキリストの禮拜は教會の靈的生活の窮意原素として後世に傳へ下され太古の教父等は敢て論辨を要せざるの事として我儕の主の禮拜を言へり即ち使徒の時代を過ぎて未だ幾何ならざるに聖イグネシアスは書を羅馬の教會に致して己れをして殉教の榮を荷はしめんが爲めにキリストに祈願を捧げんことを要めたり(聖イグネシアス羅馬に贈れる書第四章)聖ポリカポの腓立比人に贈れる書の開卷第一には一個の祝辭を掲げ而して此祝辭は事實上キリストを以て全能なる父と共に在ませる平和と慈恵の與主となして彼に祈ることたり(聖ポリカポ腓立比に致せる書一章)ポリカポ即ち曰く『願くは神我儕の主イエスキリストの父神の子無窮の祭司たるイエスキリストは此書を讀む者の徳と信仰



と真理を凡ての柔和なるとに立て健て給はんことを………而して彼等をして聖徒の列に伍するを得せしめ給はんことを』と(同書十二章)而して其晩年殉教の死火刑の場に臨むに方り彼は叫んで曰はく『オー父よ我凡ての事に於て汝及び汝と偕に在る無窮在天のイエスキリスト即ち汝の愛子を讃め祝し尊め奉る願くは汝とキリストと聖靈とに今もいつまでも榮光あらんことをアーメン』と(聖ポリカブ殉教の記)而して彼の死する後ニセタスは其代官に請ふに式を以てし彼の遺骸を葬らしめざらんことを以てせりこれ彼は其基督教徒等が磔死の主を忘れて此新殉教者を拜せんことを恐れたるに由る然るに當時の猶太人等が此事に關して用ひたる言語は或は嘲刺に出でたるか或は眞の熱情に發したるか兎に角にスミルナの教會の廻章には曰へり『彼等は我々が全世界の者が救はれたる者の爲めに苦み給ひたるキリストを捨つることも亦他の者を拜するとも能はざることを知らざるなりキリストは神の子なるものとして我儕は禮拜す然れ共殉教者等に至りては主の弟子たり模倣者として其の王たり教師たる主に非常の獻身を爲したるものなれば須らく愛す可きの價値を有すると爲すに止る神は我儕をして又た彼等の同勞者たり同弟子たることを許し給ふなり』とされば此書簡の記者はキリストの殉教者を愛し敬ふことに於て敢て慊然たる所無かりしなり彼等は又其下の條りに於て曰く『我儕は寶玉よりも貴く黄金よりも貴きの骨を拾收して之を元の如くに組みたり』と然れども尙ほ彼等は此殉教者の愛重と救主の禮拜との間は確然たる區別を畫しイエスを拜するは神の子として拜したりき且夫れ古代の護教者等は基督教徒が神を無にするとの異教的非難に對して毎に父なる神并びにイエスキリストの禮拜を指して之に答へたり即ち聖チャスチンは時の皇帝に向つて基督教徒は唯

だ獨一の眞神のみを拜することを辯ず而して彼は更に斷言す御子と聖靈とは等しく御父に對して捧けらるゝ所の尊敬及び禮拜を與へり享くる者なりと且チャスチンはトリフォオとの論辯に於て特に主張して曰へり豫言者は豫め『メシア』の禮拜を語り置きたりと聖イレネアスは主張すらく當時の教會に於て爾が屢く奇跡的事件の起りたるは決して天使に祈願したる爲めにあらず魔術妖法の所爲にもあらずして只管これ基督教徒が萬物の造主なる神に祈り且其の子イエスキリストの名を頷びたるに由れるなりとアレキサンデリヤのクレメントが吾人に遺したる三個の論文は優に三個の傳道論を爲せるものなり其第一論に於ては彼は異教徒を基督の信仰に感化せんことに全力を盡し第二文に於ては基督教徒の初程的智識及び本分を以て新改宗者を教訓し而して其第三なる最大論文に於ては彼は基督教徒の特權たる高智識を與へて彼等を完全なる神智家ならしめんことを努む此三個の論文は各其實用上の目的頗る異なれりと雖も共にこれ教會がキリストを禮拜したるの證明と爲すに足るものなり其第一文たる『ホルタトリ』は希臘人に對する勸告書にして滔々江海の如き長論説を結了するに熱烈至誠の願望を以てして曰く『汝望むらくは人にして亦神なる彼を信ぜよ會て苦を受け而して禮拜せらるゝ所の生ける神なる彼を信ぜよ』と第二文たる『ペダゴガス』は頌詠にて終れる絶美の祈禱を以て結了す而して其祈禱に於ては御子は御父に等しきものとして禮拜せられ讚美せらる第三文『ストロマタ』に於てはイエスキリストに對する祈禱は無論の事として含蓄せられ而して彼は論ずらくキリスト教徒の生涯は當さに『道』に對する常住不斷の禮拜ならざる可らず而して此『道』に由りて『父』を拜せざる可らずと又テルタリアンは其護教論に於て『基督教徒は會て猶ほ方伯の爲めに罪せられた



「一個の人を禮拜す」との非難を痛論駁倒せりテラタリアンは敢て此非難を拒否もせず亦努めて言ひ宥めんとせず彼は正面より基督教徒の行ふ所を是證す而も曰く『縦ひキリストは異教者流の眼よりして如何なるものと見ゆるものにもせよ基督教徒に取りて彼は父なる神と一體なることを知れり』と是を以て之を見ればキリストの禮拜は決して當年信神家の癖習にはあらずして該教徒の爲めに絶對的の本務なりしなり或る一節に於てテラタリアンは異教徒との離婚に反對して論じて曰はく若し斯くせんには夫妻協同に救生を拜すること能はざるべしと又他の一節に於て彼は暗示して曰イエスの禮拜は基督教の信仰と其廣さを同ふするものなりとオリヂンの智力卓落不羈なるや此問題に關して用ふる所の言語時としては正規を逸し彼の他の諸教旨に照して自ら撞着せるが如きもの無きにあらずと雖も之を解するには宜しく彼の教旨一般の傾向よりして推さざる可からずオリヂンは基督教徒の本務としてキリストの禮拜を主張すること當に一再のみならず特に其説教の中に於て彼は自ら實踐して以て此本務を教ゆ彼の教論の基礎たる大真理は斯る實踐躬行を是證し且つ要求する所の真理たりオリヂンが嬰兒なる我儕の主たる東方博士等の來りて乳香を捧げたることを解してこれ彼の神なることを承認する所以と爲し斯る行爲は明かに唯神にのみ歸す可き禮拜の意味を含むものなればなりと云ひたるは即ち彼が此大真理を心に守りたるに由らざらんや若し彼にして自らイエスを拜したるに非んば焉んが斯の如き解釋を下すを得んや若し夫れのツエーリヤンの所作を言はるる三位一體論に於て將た聖シプリヤンの論文及び書簡に於て將た又アルノピアス及びラクタンシヤスの護教論に於ては此問題に關し引據す可きの明證枚擧に遑あらず況んや第三世紀の中葉及び末期に進むるに及んで雲

の如くに集れる所の本論の材料を逐一に舉示せんは日も復た足らざるの業にして本講制限の許さざる所なるが故に予は茲に其繁を避け唯だ太古が用ひ以て教主の寶座に近づきたる禮拜の若干形式を一瞥せんと欲す必ずしも無用の言に非ざる可し、古を討ぬるに基督教徒の頌歌が教會に於て尊重せられ而して異教徒の爲めに憎惡せられたる所以は其のイエスキリストに對する禮拜を廣布するの力ありたるに由る夫れ頌歌は人の禮拜的性質を満足せしむると同時に亦此性質を教育す頌歌は祈禱に比すれば稍寛慢なる禮拜の行爲なり然れ共其際せらるる間は又此實に意義至深なる禮拜の行爲を含めるものあらざらんばあらず唯だ其祈禱に比して稍畧式的なるが故に且つ人心をして單純なる同情の有様より知らず識らず或は故らに進んで禮拜の感起すに至らしめ更に反りて受動的にはあれども敬虔なる同情を感ぜしむるの効あるが故に頌歌は古來常に宗教的感情の發表に缺く可からざるものとして基督教極初の時代より教主を榮むる爲めに特に撰まれ聖とせられたるものゝ如し予は曩に聖保羅の書翰を論ずるに方り其中斯る使徒的頌歌の痕跡あることを一言したりしが當に然るのみならず若干の古代軍人説の教師輩すらも頌歌を以て基督教主義の明證となし廣く教義を教ふに好個の方法となして大に之を尊重し知らず識らず教會の爲めに益する所ありたり斯くしてアルテモンの追隨者がキリストを神なりといふ教義は僅かにセノイリナスの監督職の間に教會に入りたるものゝみと主張せし時に方り一個正統派の記者は——ユーセピアスの引證に由れば——之に答へて論ずらく『基督教の極初よりして信仰高き人々の撰したる頌詩及び頌歌は悉くキリストを神の道として榮め奉り其神性を公示せるに非ずや』とオリヂンも亦曰へり頌歌は神及び神の獨生れたる道にして亦同じく神た



るものに對してのみ咏じられたりと然り而して此等の頌歌がキリストの神なることを教ふるに於て實際如何なる効力を有したるやは彼のサモサタのハウラスの所爲に由て明かに知らる史に曰はずや彼は凡う我儕の主イエスキリストに對して咏せらるゝ所の聖詩歌類を悉く自己及び其附邊の諸教命より除き去り且之を其近時の僞俗なりとして輕蔑の言を吐けりと此所爲たる神の御子天より降り給へりとのことを教會と共に告白するを欲せざりしハウラスの如き教師のなす所としては固より自然にして敢て怪むを要せざれども而も亦彼の此所爲は會々以て初代教會の頌歌が如何に其懐く所教ゆる所の眞理を防護し公宣するに力ありしかを證するに足れり基督教會の太古頌歌の中には今日尙ほ我儕の中に殘存してキリスト神性の信仰の證言たり發表たる者無きにあらず天使三聖の頌及び榮光の頌 *Gloria in Excelsis* の如きこれなり此兩者は共に第二世紀の創作に屬し何時の程よりか聖餐の式文中に挿入せられ共に我萬福の主を榮め奉るものたり舊記を按ずるに初代の基督信徒等は毎曉天に此榮光の頌を復稱せりと云ふ即ちこれキリストに對する祈願と讚美とを兼ねるの歌なり請ふ此歌に於て我儕の主の神なる特權を告白しつゝ亦た彼の人性的同情に向つて祈願する所如何に痛切なるかを見よ曰く「……神の羔父の聖子主なる神よ我らを憐み給へ世の罪を除き給ふ主よ我らを憐み給へ」と而して其嘆訴に承で最後に至り至高の天の寶位に榮光を以て座し給ふイエスキリストを讚する調の何ぞ夫れ一に爾か揚々たるや即ち曰く「キリストよ主のみ聖をり主のみ王なり主のみ聖靈と俱に父の榮光の中に在りて最も高し〔日本聖公會新譯〕」而して夕景至る毎に古代の信者等は更に他の一讚歌を捧げたりこれ前二者に比すれば今日世に知らるゝこと稀なりと雖も其美妙なるに於て敢て讓る

ものに非ず而して同じくこれ尊榮に於けるキリストに向て呈せられたるなり即ち其歌に曰く

- 一、 いともたふとき                    そこしへの、
- 二、 あめのきみなる                   ちよかみの、
- 三、 きよきみひかり                   うらぎでし、
- 四、 せいのみなる                       キリストは、
- 五、 われらの主に                       ましませる。
- 六、 夕陽はにしに                       かたむきて、
- 七、 息ひの時の                       きにければ、
- 八、 星のひかりは                       ひらめくが、
- 九、 われらはきよき                   舌をもて、
- 十、 ちよよろづよに                   いやたかき、
- 十一、 父子みたまに                      歌ふなり。
- 十二、 神の御子なる                    エスキミよ、
- 十三、 主のみいのちの                   あたへぬし、
- 十四、 あめつちなべて                   みさかへは、
- 十五、 きみのみくらに                   かやけり、

但しこれよりも更に古への時に於てアレキサンドリヤのクレメントが其書『ペダゴガス』の結尾に置ける短詩は亦た以てキリストに對する頌歌の一斑を窺ふに足る尤も此詩の言語は第二世



紀に至て所謂『完全神智派』の全く襲用する所とは爲りたれども然れども其初めは正しく之れ教會會衆の爲に作られたるものゝ如し此短詩に於ては我儕の主を崇めて智慧の與主困苦の保護者長への主衆生教主萬能の御子平和の神と稱し斯くして彼に捧ぐる所の頌讚の至誠なることを三たび明言して其句を結ぶ

我儕は又た茲に神の恵によりて我儕の初時より重んじ來れる一頌歌あるを忘るべからず吾か早禱式中の頌美の頌即ち是なり此頌歌たるや縦へ普通の傳説の如く聖アウガスチンの時代に屬して彼の受洗禮に伴ひて起りしものなるにせよ將た又た——更に實に近きが如く——其後の世の所作なるにせよ兎に角現今の姿に於ては西方教會的なること一見にして明なり然れども又た我等はりの幾部分の必ず東方より出でたるものにして殆んど續使徒時代に淵源することを疑ふ能はず此の讚美の頌は一以て讚歌と信經と祈願とを兼ねるものにして各皆我等の主に對して獻伸せらる嗚呼此頌に於てイエスを以て至聖三位の一となし特に榮光の王父の無窺の子として呈せる尊敬の何ぞりれ深玄なるや處女の胎をも厭はず死の苦に勝ちて凡ての信徒の爲に天國の門を開き給ひぬと頌することの何ぞりれ悲壯なるや而して其實血を以て贖ひ給ひし僕等を祐け主の聖徒に列ねてかぎりなき榮光の得させ給へと祈ることの何ぞそれ痛切なるや其言語文章の優美は雅なる大初教會の香氣轉々馥郁たるものあり而して我儕基督教徒が日々の禮拜觀行に之を用ゆるに方て此頌歌の言語其物が座ろに我儕をして靈に於て初代三百年の教會と結合せしむるものあるを覺ふ。

使徒憲法に於てはイエスキリストを以てイスラヘルの讚美の中に在ますものと爲して文袖榮頌

の風に從て父と相並ぶる所の古代の頌榮を戴す又た『キリー、エリーシオン』Kyrie Eleisonは嘆願文の素形にして近世教會嘆願文の多數は皆其中より開達したるものなるが其續使徒時代の作なること疑を容れず此の頌文は天使三聖の頌及び榮光の頌と共に聖餐式文の中に現存してイエスキリストに對する祈禱の慣例が如何に古く又た如何に深く基督教徒の中に根底したるかを證す蓋し聖餐はもと二重の意義を有すこれ天より地の賜物なり然れども之れ地より天への捧獻なり聖餐式に於て基督の教會は御子イエスキリストの功績及び死を無窮の父に獻す『我を記憶せん爲に之をなせよ』とはキリスト親しく宜まひたる所なればなり。さればカルセージの宗規には教會の更に古き條例及び性質を發表して曰く『凡そ人聖禱に向て立つときは祈禱は必ず「父」に向て申さざるべからず』と然れども由來キリストに禱を捧ぐる動念爾かく熾盛なるや敢て只た一個の禮拜式が此宗規の規定したる個條を嚴守して他の若干の禮拜式は之を犯すといふが如きは以て此事を知るに至る其祈禱の文は西班牙に於ける教令が危險なるアリアス宗と長年月の抗争の後遂に之を克服したることを證す此禮拜式は一見したる所にてはカルセージに於て制定せられたる宗規の主義に代ふるに聖餐は聖三位一體に向て捧ぐるものなりといふ一種特別なる併し乍ら全く相兩立せざるものにあらざる所の主義を以てするが如くに見ゆ(三個の聖身位相互の關係の不可なることを惟みれば聖餐をキリストは捧ぐるといふも將た三位一體の神に捧ぐるといふも決して其間に徑庭あることなし)而して此事はまた東方教會の精神なるが如し若し夫れ英國の教會に於ては古より今に至るまで一般西部基督教會の慣例と同じく聖餐式并に其他の禮拜式に於てイエスキリストに祈禱を捧ぐる事は宗祭上の窮竟形式たりとの主義を守れ



ること言を俟たず。

〔註〕古代西班牙の禮拜法が確守したる所聖餐は全三位一體の神に捧ぐるものつ隨てこれ御子にも捧ぐるものなりとの主義は東方教會の常禮拜法に於ても同じく確守せらる。且つ夫れ古代の基督教徒が行ひたるイエスキリストに對する禮拜は決して一種宗教上の機密にして獨り教會の中に在り教會の信條を懷きて其勤行に與ふる者にのみ明かなりし行爲にはあらずこれ決して一種抽象的の教義にはあらずして實に基督教徒の爲めに日常に重ぜられたる所の公然著明の事實なりしなり基督教徒が抑も其初期よりして異教徒の耳目を聳動せしめたる所は實に此事實にあり彼の聖ポリカールの殉難の時に方りて猶太の人等が異教の方伯等を煽動して基督教徒を輕侮し憎惡せしめんが爲めに彼等がイエスキリストを禮拜することのことに注意を引きたるは實に爾かある可きことたり斯の如きの禮拜は縱へ未だ彼等方伯等が其國家教禮式の一般尊重時に時の帝王を以て神となすの承認と衝突することを發見せざりし前と雖も業に既にこれ該帝國の公認教の外更に無免許の宗教を奉ずるものとして羅馬方伯等の專制心を刺撃するを免れざりしなり若しプリニーが斯教のことに關し其皇帝トレンジヤンに呈せる報告は凡て下民等の迷信を學者的の興味を以て遙かに瞰下せる異教政治家に應ずべき冷淡無頓着を以て記したるものなるが中に云へるあり曰く基督教會より數名の棄教者等を代官の前に曳き來りて小亞細亞に於ける信徒等が日常行爲を吟味せしに彼等信徒等は或る一定の日毎に未明に起き出でて集會しキリストを神として代るく之に讚美歌を唱ふるとの事明かになれり」然り而して茲に注意せざる可からざるはプリニーの報告たる決して曖昧のものに非ず嚴重に數人を審問して得

たる確乎たる陳述にして且つ其審問を蒙りたる人々は羅馬方伯に對しては成る可く申曰する所を少なふせんと欲したる如き事實なることは是なり更に又皇帝アドリアンはサルヴィアンに書を贈りてアレキサンドリヤの住民はキリストを禮拜する者と『セラピス』を禮拜する者に分れたりと云へり夫れ法律の罪人として死に處せられたる者が神として尊敬を受くとは羅馬の政治家に取てりは頗る驚く可きことなりしならん然れども其哲學者に取りては更に怪訝に堪へざりしなる可し彼の病的犬儒たり基督教の背信者たり圓戲堂に於て己れを神に封冊するの式（紀元後一百六十四年）を身自ら同擊したる所のヘレグリナスブレテユスの傳紀に於て其著者ルシアンは教會の禮拜に對して自己の心中に起れる輕侮嘲刺を飽くまでも吐き盡せり彼は曰く「基督教徒は今も尙ほパレストインに於て屠られたる彼の大人を禮拜せり」と又曰く「基督教徒は彼等が今様の風習を離れて希臘の神々を否認して彼の罪せられたる詭辯者を禮拜するに至るや否や直に相互兄弟の關係に入ると教ゆこれ如何なることぞや」とヘルサスは前既に陳べたる如く毎に基督教徒反對者の中に發見せらるる一派の學者を代表するものなり彼は元來道德上惡心なく森玄なる證索を事とせず唯だ機智に富み兼て亦嘲刺に巧なり彼は唯だ皮相を以て事物を觀頻りに難問を呈するを以て快となせり我儕の主の禮拜焉んが此種の人物の冷厲心を促さざらん果せる哉セルサスは此慣行を種々の論據より攻撃してオリチンの辯明を煩はずに至れりセルサスの一般論據に曰はく「基督教徒は異教の多神を攻撃するの權利無し何となれば彼等自らがキリストを拜することは到底多神主義なればなり基督教徒が異教の神々を偶像なりとして指摘するは沙汰の限りなり彼等自身は偶像よりも更に果敢なきものを拜するにあらずや彼は偶像にすらもあらず



單だの死體なりしなり基督教徒は何の神をも拜せず否悪鬼すらをも拜せず只死人を拜するのみ基督教徒若し宗教的革新を願ひ而して若し「ヘルカレス」「エスカラヒヤス」其他古より傳はれたる所の神々が彼等の好みに投ぜずとならば何ぞオルファイス若くはアナキサルカス、エビクテタス若くはシビーの如き古名人に對して禮拜を致さざるや若し夫れをしも欲せずとなさば寧ろヨナの如きダニエルの如き彼等自身の豫言者を拜するは曾て卑賤なる生活を爲し隣れなる最後を遂げたる一人を拜するに勝れると萬々ならざや斯く縛られて死に處せられたる一猶太人を拜するからは基督教徒は彼のザモキスを拜せりケテ一人モプサスを祭りしシ、ロー人アマムフヒロカスに祈りしアカニア人アマフイアロウスを祭りしヒーベ人トロフオニアスに爾かく奉事せしレバデア人に比して撰む所あらんや基督教徒自らが噴慕の犠牲たりしものを崇め乍らジュビターの墓を祭りて奉事せる異教人を嘲笑するは以ての外にあらずや之を要するにキリストの禮拜は神は唯一なりと云ふ彼等自らの教義を頓て破壊するものにあらずや基督教徒若し唯だ一神の外決して拜する無かりしならば異教に對する彼等の理論には力ありしなるべし然れども極めて晩近此世に現はれし一人に斯くも非常に祭事し神の僕たる者に神の尊敬を與へ乍ら何すれが彼等は能く神に對して自ら罪を犯し居らずと思ひ居るにや」と

然り而してオリジンは之に答ふる言が此く嘲刺を縱にして論評せる所の事實を毫も否認せず彼はキリストに對する祈禱が天下一般教會の慣例なることを單に承諾するのみならず亦た力を盡して之を辯護せりオリジンは其師の名譽に對する異教の反對者と論鋒を交ゆるに方ては一個のアレキサンデリヤ哲學者とせず寧ろ基督教の信者として筆を執る彼はセルサスの言語を

ば見耐以て詳細に論表し而して曰く異教禮拜の目的物は禮拜するの價值あるものにあらず猶太の豫言者等も又た之を受くるの權利なし之に反してキリストは神の子神自らとして禮拜せられたり若しセルサスにしてキリストの宣ひし「我と父とは一つなり」との言及び彼の祈禱に於て「我と爾との一なるが如く彼等をも一つに成し給へ」との意義をよく了解したらんには恐らくは我儕が萬物の主たる神の外何の何者をも拜すとは想像せざりしならんキリストは言ひ給はずや「父は我に在りし我は父に在り」と而してオリジンは更に進んでキリストの此言語をサベリヤン主義に對して辯護せり（但し其類推論は聊か如何はしき所なきにあらずれども曰くキリストに呈する禮拜は彼を以て「父とは身位的に別なるものとして呈せらるゝなり」とオリジンは又た他の個所に於て我儕の主の禮拜を辯護して之を準用的意味に於ける祈禱と稱す其意蓋し真正の祈禱は只た父のみに捧げらるゝものといふに在り後の神學者は之を解してこれ我儕の主の祭司長として其人性の仲保的態度に關して言へる者と爲せり監督ブルの如きは更に一步を進めてオリジンは「父」とを神性の本源として凡ての禮拜の窮竟目的者たりと論したりと解す斯の如くオリジンの用ひたる若干の語氣に就ては已れの議論無きに拜らずと雖も爾かも彼はイエスが神たるの尊敬を受け給ひたりとの公然たる事實を全く承認し且つイエスに對する斯る禮拜を辯護して教會の生命に欠く可らざる要素なりと稱したることに至ては何人も異議なき所なり」

オリジンの明快なる辯明を経たるにも拘らず異教的批評の鋒先は爾來依然として我儕の主の禮拜に向て擬せられたり稍其後年に於て或る異教論者は得々として説て曰く我儕の神々は汝等基督教徒が全能の神を誣給するが爲に怒り給はず然れども汝等は人をして十字架世に最も惡虐な



る罪人のために備へられたる耻辱の記標たるもの。「刑罰を以て死に處せられたる一人を神なりと主張し而して其一人を今尚ほ生たる者と爲し日夕の祈禱を以て禮拜するを奈如せん」とラクトンシフス茲に於て乎謂て曰く異教者流は我儕をして座ろにキリストの苦死の思あらしむ彼等爲せりと此ラクトレンカス及びアルノリアスは異教者の攻撃に對して答ふること全く其趣を同ふせり此二人は各キリストの謙虚の眞理及び苦死の耻辱を承諾す然れどもイエスは讀で字の如く絶對的に神なりと熱心に主張せり彼等は曰へり縦へ異教人は如何に嘲辱の言を恣にするにもせよキリストの神なることはこれ最大の眞實事にして彼の教會の眠睛は永久此事實の上に定る所教會が常に彼を禮拜するの止むを得ざる所以の眞理なりと

按ずるに基督福音若し單に哲學的なる唯一神論を智力的に受容せんことを求むるに止りたらんには世の冷淡抽象無血なる宗教が容易に得る所の寛容を福音も亦た其廣布の爲に得たりしならん若し然らんにこれは決してラシアン或はセルサスの如き者の熱罵を速かにせしならん彼等は縦へ福音を愛顧せざるまでも之を無顧着看過したるならん。然れども如何ともするなし教會が常住不斷にイエスを禮拜せることは斯る人物をして局外に超然たらんと欲するも能はざらしめたり彼等は此禮拜の趣意を知れり即ち磔殺せられたる人を拜することなるを知れりこれ餘りに顯著にして精神を刺激するの甚しきや彼等をして之を等閑にし若くは忍容するに由なからしめたるなり

加之イエスの禮拜に反對せし者は唯た當年の哲學者流に限らず下層社會の人民も亦た久しく之

に反對したるなり請ふ彼の晩近に至りてバラタイン宮殿の遺蹟より發見せられたる所の我儕の主の禮拜に對する著名の戯畫を見よこれ恐らくは第三世記の上期に於て異教の奴隸等の手に成りたる粗笨なる繪畫にして十字架上に人身驢首なる形像を表はし其傍には粗服を着したる一人物ありて十字架上の怪物に對して申す所あるものゝ如く異教禮拜の表號たりし身振を爲す而して下に相慥なる銘刻ありて曰くアレキサメノス彼の神を拜するの圖と鳥呼これ吾人をして轉たセヴェラス若くはカラカラの時に於ける羅馬教會の境遇を想見せしむるものに非ずや勿論子ロ帝の朝に於ても然りし如く其後二百五十年を経たる此時代に於ても亦た羅馬皇帝の宮室中にキリストを拜したる者無きにしもあらず然れども後の異教が教會に對する抗敵の顯者酷烈なるは曇日使徒等の血を流したる時に比して更に甚だしかりしなり神智論者が猶太人を以て驢馬を拜する者と爲したるの非難をば異教徒は信徒の勢を以て猶太人並に基督教徒に向て蒙らせりタシタスは此事を説明してこれ往昔曠野に於て驢馬がイスラエル人を拜したりとの古傳より來れるものと言ひ隨てタルタリアンは吾人基督教徒の猶太宗教を重するが爲に遂に異教徒をして吾人は斯る形像を拜する者との妄想を起さしむるに至れりと云ふ而して斯る虚説の一たび生ずるや異教の嘲笑者流は得たり賢しくも採て以て其用に供し或は基督教禮拜を知らざりしがために或は更に異教の公衆を教唆して己が滑稽的嘲笑を弘めんが爲に該畫工は斯る異教的禮拜の者の身振を以てアレキサメノスに歸したりしなりそは兎も角も此粗造なる戯畫の題目は問はずして自ら明かなり即ちイエスキリストに對してアナキサメノスと共に跪きたる所の信仰者禮拜者が皇帝の宮殿へ在りたること疑可くもあらず然り而して駁々たる教會の道德的勢力が異教社會の全



階級中に波及するに及んで反對者は益嘲笑を以て議論に代ふるに至り而して基督教の眞信奉者の周圍に集りたる社會的迫害は會々以て十字架上の主に對する忠誠心を練達せしめ此忠誠心は堅忍確信の力を以て異教の讒言に堪へ義烈持久の勇を以異教の暴戾に抗したりしなり豈壯ならずとすや。

且つや當年に於ける許多の殉教者の死に臨んで叫へる所は異教徒をして基督教徒が基督教徒に呈す尊教の如何なるものかと思ひ知らしめずんばあらじ其の洞穴の裡に竊かに行れたる禮拜及び社代の教會が由て以て其に苦める人民を獎勵し誘導し其の向上の希望心を薰陶したる所の嚴肅にして而かも温和なる訓練の如きは異教徒の與へる智能ばざりし所に屬すは雖も彼のキリストの勇將猛卒等が國家官司の面前に鞠問せられ或は圓戯物裡苦惱耻辱を極むるの死に臨むに當て絶叫したる所は公衆の耳目に隠れ無きことなり聖マテバノの最期の祈禱は後人の横傲心を曳起したるよりも寧ろ後年殉教者に通有なりし精神を發揮したるものなりリオン・プランデイヤセは異教迫害者の爲に先づ大綱の綱中に其四肢をからまれ然る後激怒せる野の銳角に其身を暴されつゝも泰然として心を失はず其亂刺の痛苦を以て彼女の威を動かす足らざりしは豈彼女の心魂深くキリストとの交通に於て我を忘れたるの致す所に拜ずやパレストアインの僕童プロフィリは體皮を寸断せられ之を温火に當て炙らるゝとも尙ほ彼の眼之が爲にまどろかず其死苦の中より彌々懇ろにイエスを呼べりしのみ亞弗利加の一監督フェリクスは久しき迫害の後其聖經を羅馬方伯に交付するを肯せざるの故を以てヴェヌシウムに於て斬首す可きの宣告を受けたるに方り其眼を高く天上に注ぎ最も麗かなる聲をもて曰ひけるは「オ、天と地との主

なる神イエスキリストよ我は今犠牲として我か首を爾に捧げ奉るオ、爾は永より永へに在ますものなり榮光と尊嚴は今も無窮の世までも爾に歸せんかなアーメン」とアンシラ、セオドタスは皆信者ホリタクロニアスの爲に賣られ臨死の禱に於て教會の悲禱に和して曰へり「主なるイエスキリストよ爾は望無き者に望を與へ給ふ願くは我をして此痛苦を終ることを得せしめ灌祭を爲し犠牲と爲しても我が血を流し以て爾の爲に苦める者共を助けしめ給へ願くは彼等の重荷を軽くして凡て爾を信する者をして安易と靜平を樂ましめん爲に此迫害の暴風を鎮め給はんことを」と而して後其の苦惱の極に達しては彼祈りして曰へり「オ、主なるイエスキリスト爾は望無き時の望にて在まし給ふ願くは此苦しみを和らげ給へそは我れ爾の爲に苦めばなり」と而して苦痛は彼の決心を狂ぐるに足らず遂に最後の宣告が暴怒せる判官の口より出るに至りては該殉教者は更に叫んで曰はく「オ、主なるイエスキリストよ爾は天と地との造主爾に倚り頼む者を捨て給はざるなり我は今爾が我をして爾の天の都城の一公民となし爾の御國に與かる者とならしめ給ふを多謝す我は又た爾に謝す爾我に力を與へて大蛇に勝つことを得其頭を砕くことを得せしめ給ひしことを願くは爾の僕等に休安を與へ我れの身に於て敵の暴戾を止め給はんことを願くは爾の教會に平安を與へ之を惡魔の殘虐より逃れしめ給はんことを」と

殉教者の祈禱して死せる有様や概ね斯の如し彼等の叫びの聲は千百の歳革流水を隔て、尙吾人の耳朵に新なり時間の遠隔は以て其鴻德偉蹟を薄らかしむるに足らず彼等の強烈純素なる確信宣言の聲は依然として夫れ熾也といふべし此最強至烈の痛苦と超自然の信仰とを以て糾はれて聞く者の心魂に通徹する所の言語は各殉教者の前後相繼で發したる所に屬す彼等は其苦しみの



中より叫び曰へり「オーキリスト爾神の御子よ爾の僕等を助け給へ」「オー主なるイエスキリス  
よ我儕は爾を信ずる者の望にて在まじ給ふ」「オー至聖至高全能の神よオーキリストよ我儕を  
して心を裏はしむる勿れ祈らくは我を祐け憐み給へ我が魂を保ち我が靈を護り我をして耻無ら  
しめ給へ」「我は爾に祈るオ、キリストよ我に忍耐の力を與へ我が請ふ祈に御耳を傾け給へ」  
「我が神よ爾我が斬首を命じ給ひしことを謝す」「オーキリスト神の子よ我を憐み我を祐け給  
へオーキリストよ我儕は皆爾に祈り爾を讃め願くは我を祐け給へ我は爾御名の爲に苦しめば  
なり」「我は暫くの間苦めりオーキリスト我儕の主よ願くは我儕して心を裏はしめ給ふ勿れ」  
と

請ふ更に大古の記録中より抜萃する所左の一節を見よ「カルツイセイナスはユーブリアスの言  
を巡り叱して曰けるはヤヨ此の皇帝陛下の論旨に戻り聖書を捨てず却て之を人民に讀み聞かせ  
よユーブリアスを窘しめよ」をかくてユーブリアスは暫時責め具もて苦しめられけるがやがて  
口を開きて「キリストよ我は爾に謝す願くは爾の爲に苦しむ所の我を守り給へ」と知事カルウ  
イセイナト赫々として怒り言ひけるはユーブリアス爾愚を言ふを休めば何ぞ神々を拜み崇られ  
ざるや然らば直に刑を赦さるべきにユーブリアス自若として答へけるは「否とよ我はキリスト  
を拜するものなり我は斷然として謗詞を惠むものなりいざ御身の思ふ儘を我にせられよ我は一  
個の基督教徒なり命の苦みは我が久しき以前より覺悟して待ち望みたる所なりされば御身の心  
任せに我にせられよ更に他の苦痛を我に加へられずや我は荷くもキリストの信徒にて候ず」と  
ユーブリアスは良久しく責め惱まされて更に屈す色の見へざりければカルツイセイナスは獄卒

共を暫しと制してユーブリアスに向ひ稍言を和けて惘然たる人物かな爾何とて神々を崇めざる  
やしかほどに苦まんより「エウスー」「アナク」と「エスカラピアス」を拜せずや」と言ひけ  
れどもユーブリアスは斷然して答ふらく其詮議無用にて候我は唯た父と子と聖靈を拜す即ち聖  
なる三位一體の神を拜する者にて候に此神の外には別に神なるもの候はず天と地其中の凡ゆる  
ものを造りしことなき神々を取り除かれよ我は基督教徒に候」とカルツイシアナスの曰く然か頑  
固ならんよりは犠性を捧げて赦さるゝ方優らざるや」とユーブリアスの曰く「我は唯だ我が神キリ  
ストに而已我身を捧げて犠牲とこゝ致し候へ其餘の犠性を爲さんことは思も寄らず候御邊の  
御骨折到底無益にて候我は基督の信徒に候へは」と玆に於てアルヴィシアナスは再び獄卒を促  
して前に倍してゴコーブリアスを責めさいなみけれどもユーブリアスは少しも之に屬せず靜に  
「オ、キリストよ我爾に謝す爾願くば我を祐け給へ我爾の爲に斯く苦めばなりと繰り返く祈  
りて更に止む事なく來りて今は只だ辱のみにて祈りけれども追々うれすらも叶はずなりもてゆ  
きて聲の根も終に枯れ果てにけり」と

嗚呼何ぞ其の光景の慘憺悲愴にして其魂魄の義烈勇士なるや斯の如きの祈禱安が以て失心狂熱  
吶嗟鬼神を顧ぶ亂禱の願として排け去ることを得んや試に思へ荷しも思慮あるの士目己れの死  
を知るに方て焉が亂禱をこととせんや平生に奉神と篤敬の素養なき者一朝其死期に臨んで如何  
んぞ俄に精神の變革を來さんや平昔未だ曾て不可視界に心を注ぎたるもなく神及びキリストと  
虚的交通を爲すの當然可能心事たるを認めざりし者誰か其終焉の期に臨んで俄然として思を靈  
界に走せ遞余として靈的交通を爲すとを能くせんや其然らざるを更に論無きのみ荷くもキリス



トの僕等の最後を目撃したる者は斯る設問に答ふるに躊躇せし夫れ人の死の門に近くに隨て未來永劫界の壯嚴は座ろに其人の思想及び心情を照らし隨て其人の全力は擧げて至深誠至確至重の觀念に占領せらる此怖る可く而かも喜ぶ可きの瞬間に方ては人の心魂は曾て以て最確の眞理と爲し最重の言語を爲して憤然熱したる所のとに執着す是に於て乎彼の巧智なる想念や無思慮なり狂熱や惰ては放漫なる想像若くは意思上の隱惑や品性上の事は悉く枯れ失するが然らざるも放擲せらるるものにして只管に純素無裝の眞理に眼睛を定め萬古不易の磐石上に立脚せんとするところ實に此怖る可くして隠す可らざる果敢なき瞬間に於ける唯一の必要又た至大の欲念にこりあるなり且つ夫れ人は末期に臨みて妙に回想翻善の奇力を現はし曾ては全く死し了りたる所の思想及び記憶をば恰も墓中より再生せるが如くに恢復すると稀なりとせず斯る時に至ては其童蒙以來殆んど全く忘却し居りたる所の眞理や慈母の膝下に在りて學びたる所の祈禱は不可抗の勢力を以て心魂の上に回復し來り成年積蓄の思想性癖は却て消失して跡を收むるものあり殉教者等が苦惱に於てイエスに禱りたるは即ちこれに由るに外ならず彼等は平昔常にイエスに祈り殊に其多くは童蒙の外よりして此の祈の有福なることを經驗あることを知りたるに由るなり彼等は曾よりイエスに祈ることを習ひ人と共に此の所に加はりたるものなり彼等はイエスに祈るが爲に譏られ嘲られて屈せざりしものなり而して終に大誠鍊大榮譽の外に來るに達ふては彼等宿昔力を得るの秘決と熟知せし所の祈禱に依頼せり而して此の祈禱は實に彼等をして克く苦惱に堪へて榮譽の冠を獲せしめたる所以のものなりとす

とを何人と雖も思はしむるならん此拜禮は徹頭徹尾信賴倚托謙虛服従を以てなれるものなり苟くもイエスの絶對的に神なることを信するに非るよりは安んず斯る拜禮を穩當と爲すを得んや此拜禮を是證するの道は唯た『父子同一體』Homousionの信仰あるのみ但し人或は曰はんアリス宗人は『父子の同一體』を拒絶しなから尙ほ我儕の主を禮拜したるに非づやと然り其所以は他なし聖經の所在の爾か明瞭に基督敎國の相傳の爾か強太普及なるやアリス宗人は自家の本領に反する所の此慣例に抗敵するの力無かりしなり蓋しアリス宗人は聖アタシウス指摘せし如く事實上自家が至上の神よりは異なる存在者なりと信したる所の者を拜したりしなり詮する所彼等は被造者禮拜黨なること異教人と敢て撰む所無かりしなり其の稍後年に及んでアリス宗人は一統敎會が我儕の主の人性を崇拜することを指摘して自家が曾てより被造者禮拜との非難を蒙りたる復拜をなさんと試みたり然れども聖アタシウスが明快に辯したる如く我儕の主の人性は決して無始無終の「道」は一個別異なる存在者として拜せらるるなり聖アタシウスは曰へりキリストの人性を拜することを拒むは取も直さず彼の受肉降世の後には其の人性はキリストの無始無終の身位とは別なるものなりともしと言ふに當るとされば此キリストの人性を禮拜するとアリス宗人が自ら以て神の本性と何の關係する所無しと爲す者も禮拜したるとは日と同ふして語る可きにあらずアリス主義は畢竟二神宗なるか然らずんば即ち偶像敎而已彼等若しキリストを以て一の被造者と爲して之を拜したる事即ち偶像禮拜に外ならず若し亦たキリストを以て眞に神なりと爲し乍ら尙ほ文神の本性とは別異の者なりと觀じたるがこれ即ち二神宗に外ならざるなり



此異端の主義は一統教會の勢力に壓され一時其影を潜めし後爾來一千三百年を経てソシナス宗の時に再顯せられたり最も早きソシナス宗人は教へけらく神のには單に人なる而已但其の聖靈に由りて孕きたるが故に神の子と呼ばれたり然れども彼等は亦た曰へり神の子は其の順服なりしとことに由りて故賻の業を大成したる後に神の尊嚴富貴に榮進せられたり故に基督教徒は彼を恰も神の如くに處遇せざる可らず一向に彼に信任せざる可らずとフオースタス、ソシナスは熱心にイエスキリストを崇拜するの本務なることを主張せり而してテコピアン問答書に於ては顯然と記載して曰へり凡そキリストを頷び求め且つ之を崇拜せざる者はキリスト教徒と稱するに足らざる者なりと然れども斯の如きは單にソシナス宗の死文のみ善くとも唯だ其務飾的感情のみ斯る感情は豈早晩ともに強烈なる破壊主義の打倒する所となるを免れんやさればブランドラがフオースタスソシナスの所教に訴へしてトランシルヴァニアのソシナス宗人をしてイエスキリストを禮拜せしめんとして空を力を盡せしも亦た宜なりといふべしトランシルヴァニア人豈甘んじて何等の被造者の禮拜を亭とせんやソシナス宗の間答書には禮拜を上下二等に區別し上禮拜は之を『父』の爲めに保存し而して下禮拜はキリストに呈す可きものとせられたるも何の甲斐だにあること無し斯る區別は結局諸宗の根本主義を侵害し至上存在者の不可侵權を掩蔽せずんば止まず隨てソシナス宗の神學者等が其のキリスト禮拜の憑據を聖書明文に取りたるに拘らず此禮拜は久しからずして踪を該實の中に收むるに至りぬ爾後ソシナス宗人の實地に行ふ所は會を以て該禮拜の教義的勢力及び意義を例證するに足れり此禮拜なるや固よりソシナス宗の拒否する所正統教會の古往今來イエスに向て捧ぐる所にして彼を神の子の人と爲り

たる者として拜するなり而して此禮拜を實に是證するに足るものとは唯だキリストを父なる神と本性上に一なる者と信すること即ち『父子同一體』Homoousionの語に由て言ひ現らはされたる眞理に關する充分の信仰を以てするの一途あるのみ

## 第二

以上の如く論じ來ると雖も元來『父子同一體』てふ語は單にイエスキリストに對する教會の教事的姿勢を是證して説明せんが爲に立てたるのみにあらざりて亦た是れ實は教會の古來相傳の綱要に契合するものなりとす

抑も初代殉教者のイエスに對して爲したる祈禱は前既に引據せし所にして彼等は今キリストを禮拜するの行爲を以て彼の神性の信仰を示せしと同時に亦た明晰なる言語を以て之を表白せり此事たるや世に殉教者等の信仰を與り有せざる者共が殉教の行爲に現はるゝ道徳的光景を説明せんを欲して屢々唱道する所の意見と趣旨を異にする者なるが故に殊に看過す可らざるなり斯る人々は動もすれば曰く殉教者等は何等確的の眞理若くは定教を唱道せし者にあらざり所謂殉教心なるものは二個の要素よりして成れり即ち不可見の主長者に對する一種の軍事的熱心及び肉體の痛苦に勇ましく堪ゆるてふ一種奇態の好意心是れなり殉教者の發したる祈禱は此合成的感情より生じたるものなり然れども斯る祈禱は決して之を呈せらるゝ所の者の位階及び力能に關する何等確信的の概念を含む者にあらざるなりと偕て予に殉教者等が痛苦を輕んずてふ一種の不自然心に由て支へられたりといふを及び我儕の主に對する彼等の敬事は至強なる個人的愛着にして些少と雖も輕視若くは不忠に類することを忍ぶ能はざるの心より出でたりといふこと



將た亦た彼等は己が奉ずる所の眞理をニケヤ時代の神學者等の如く智性的分解得せし者にあらずとのをも否定せし然るも尙ほ斷じて曰はんとす殉教者等は以て自己の生命よりも更に尊しと爲す所の一教義の爲に苦を忍びたる者なりと夫れ彼等が爾かく親密熱誠の交通を有し且つ其の尊榮の爲に彼等が血を流したる所のキリストは彼等に取りては決して空漠朦朧として雲を捉へ風追ふが如き觀念にはあらざりしなり其位階及び力能の如何をば彼等自ら以て知らずと爲せし如き者にはあらざりしなり若し夫れ殉教者等が特に死生を賭して尊重服膺したる信仰の一教義ありたりとせば我儕の主の神性の教義こり即ち其のものなれ然り而して此眞理を服膺公唱せし者は唯に當年の監督及び長老等に止らず亦た哲學者なるシヤステンShydenの如き者あり軍人なるアリウス、タラカス、セオドラスの如きものあり將たランブサカスのビーターの如き紅顔の美少年ありエビスボデアス及びアレキサンデルの如き學殖豊富なる文士ありシンフォセサの如き寡婦ドムニナの如き貧者あり奴隸にはウイタリスの如き童蒙にはマルチアリスの如き諸て斯の如き智愚文野老幼尊卑に亘りし共に此信仰を公唱したるなり此信仰は時としては嚴密なる審問を受けたる殉教者の爲に止む無くも申白せられし時としてはこれ基督教徒の心中に充溢して口語らざるを能はざるの眞理として公宣せられたり又た時としてはキリストの神性てふことは基督教徒をして大に其周圍の異教多神主義と異ならしむる所以として唱道せられし時としては異教徒より蒙れる二神主義なりとの攻撃に對してキリストと父神とは一體なりとの意を含む者として説明せられし時としては基督の教徒がキリストに呈したる禮拜を是證するものとして論辯せられたり夫れ殉教者等は當時の異教と當面相對したる者なり而して主張して言へり曰く

キリストは磔殺せられ給ひつれど尙ほ神なり曰くキリストの名は惡鬼の如くに捨てらるゝと雖も實は彼れ羅馬國運の主宰にして歴史の諸事件の統督者たり曰く異教の帝國は知らず識らず彼の經論に事へ彼の全勝に備ふる者に過ぎず曰く天地の造主なる彼は侍望する者の望を滿たし將來の福祉を保證し給ふなりと然り基督教と異教との何等交讓調停をも不可能ならしめし所以は實に此信仰に在て存す昔者ピオニアスを審理せる判官等は彼に答へて曰へり汝は何の理を拜するやとピオニアス答へて曰く我は天を造りて諸々の星辰を以て之を飾り又た綠樹紅花を以て地を裝ひ給ひし「彼」を拜するなりと判官の曰く「彼」とはかの十字架上に磔せられたる者の謂なるかピオニアスの曰く言ふにや及ぶ父神が世の救の爲に遣はし給ひし所の「彼」なりと

〔記者曰く以上殉教者等の祈禱其他の引證はまじし〕 *Huntford Acta* より出す原文各事例毎に其書名及び頁數を記すれども見る所ありて之を略しぬ謹焉

上來掲ぐる所の要點は實に顯著なる例證を供するものにして其示す所の意義や之を誤解するに由なし縱令某々殉死者の臨死の言語には幾分平後年の記録家の誤報皇張潤飾ありとするも其現象の概觀に至ては議論を容れざるの事實として認めざる可らず即ち初代教會の殉教者等はキリスト神性の教義の爲に其命を致せしこと數ふるに遑あらず殉教者の口に告白する所は頗て其祈る所を是れ證し説明するものなり而して彼等の此告白を談合し結約し定義するものは即ち『父子同一體』の語に及らず彼等は實に神としてキリストに祈りしなり神としてキリストを信ずること將た信せしに及らず彼等は實に神としてキリストの爲に命を獻じたるなり語を換へて言へば彼等はキリストを告白したるなり神としてキリストの爲に命を獻じたるなり語を換へて言へば彼等はキリスト



を以て父神とは別個の身位者にはあれども爾かも父神と同一なる者として語り且つ祈りしなり  
嗚呼基督教徒の此單純なる信仰は以てニケヤ教父等の更に明確に定義したる信仰の全幅員を掩  
ふに足らずとせんや抑も亦此信仰を最も明白に最も劃切に結約するものは『父子同一體』(一三  
moonian)の標號を措て豈他あらんや

斯く辨じ來れば論者尙ほ或は曰はんとす「然りニケヤの決定は初代基督教徒の普通の信條を甚  
だ巧に結縛して之に一定の標號的形態を與へたるものなり然れども此事即ち吾人をして異議を  
生ぜしむる所以なり奈何せんや子は此會議が權力を以て准認したるものは普通の信條なりしと  
言ふにあらざるや成る程殉教の死は之を論理的の問題として頗る興味あるものにやあらん然れど  
も頗て此殉教者をして痛苦を忍ばしめたる所の道德的的勢力其ものが其の信條の價値及び意義  
に關する嚴密なる智性的觀想とは相容れざる一種狂熱より生じたるの恐れあるを奈何せんや  
うは既に言へり殉教者は普通信條を代表すと此言甚だ可なり然れども斯くいふは取りも直さず  
其所謂普通の信條と當年思想家の觀念とを區別するものに非ずや敢て回ふるの所謂人民普通の  
信條とは抑も何ぞやこれ豈人間の果敢無き希望心の所生兒唯だ熱したる情念を以て養はれ多少  
の深淺こりあれ要するに無智と稱する襍糞者中に育てられたる者に非ずして何ぞや斯る普通の  
信條は之を抱きたる人民の智力的狀態を看破するに足る者としては或は幾分の興味もあらんか  
なれども絶對的眞理の指遵物としては其價値索然なることを奈何せんや吾人の問はんとする所  
は初代教會の通俗輩が何を信じたりやといふにあらざるして初代教會の有識なる教師等が何を教  
へたりしやといふ事あり敢て問ふ人民普通の此信條は果して克く初代基督教界の學者大家の嚴

肅冷靜分別に富みに心算々用意周到なる語の中に入りたることあらんや如何」と

偕て讀者諸君よ予は是に於て爭論者の所謂俗人の信條と識者の條との區別を容易に除却して斯  
る區別は初代基督教の實狀に於て適用する所無きの事實を示さんとす思ふに斯の如き區別を立  
つることは近世の政治若くは宗教社會の觀想より出で來りたるものなり史家曾て言へり昔者一  
個の邦國ありて其中の各個人の精神及び行動は直に其國の社會及び政治の精神行動と全く同一  
にして隨て個人は實に各々の政治家なりと初代教會に於ても亦た殆んど斯の如く個々の基督教  
徒は強盛明白なる普通信仰の力に由りて各皆健確なる神職者たりしなり凡う人々は單に文辭上  
の造語の爲に徒に其命を棄つるものにあらざること古へも尙ほ今に異なることなし而して古へ  
の殉教者は縦へ概ね通常の人なりしとすも中には亦た高德なる監督介聞ある神學者等の決し  
て少からざりしことを記憶せざる可らずされば予は今論者の異議を正當に辨せんが爲に最初三  
世紀間教會大教師輩がイエス、キリストの高尊無窮の本性に關し教へたる所を聊か討査せんと  
欲す

第一に余の明かにせんとする所は上は績使徒時代より下は「ニケヤ」時代に至るまで一聯の鎖  
を爲して相連れる教會の代表的著述家等が各イエス、キリストは神なりとの教會の信仰を極め  
て強力朋断の言語を以て確説せしこと是れなり

即ちアンテオケの聖イグリナシアスは論じて言へり、我儕の主の神性てふことは全教會及び各  
個信者の寶産なりと彼は我が神イエス、キリスト我儕の神イエス、キリストを呼び、又た我儕  
の神イエス、キリストはマリヤの胎に致され給ひぬと言ひ(エペソに贈る書十八章)イエスの血



は即ち神の血なりと言へり(同上)壹書彼は亦た彼の神の苦に倣はんと欲すと云ひ(羅馬に贈れる書六章)其のダイオゲダキタスに贈れる書には教へて曰く父神が人間の爲に遣し給ひしは一個の人若くは天使の如き彼の撲にあらで實に萬物の創造者造出者なり萬物は彼に由て濶配没置され彼に賴て立てり神は彼を神なるものとして人に遣はし給へり、而して彼は神なるか故に彼の降臨は取りも直さず神の顯現なり神は已れ自らを人に啓示し而して人は信仰に依りて已れの神を見且つ知ること得たりと(ダイオゲダキタスに贈る書七章八章)聖ポリカールはイエスを神の無始無窮の子と稱す(スミルナに贈れる書十二節)且つ曰く天地の萬物萬靈は皆彼に服す彼は我儕を義とし給ふ者我儕の望の目的に在ませしと(ピリポに贈る書二六、八章)ジャスタンマターは主張して曰へり「道」は神の長子なり故に亦た神なり彼は舊約の中にアブラハム、イサク、ヤコブの神として現はれ給へり彼は亦た時としては「主の祭」と呼ばれ時としては「子」と呼ばれ時としては「天使」と呼ばれ時としては「智慧」時としては「神」と呼ばれ給ふと(護教論者)ジャスタン又たトリフォンと論じては曰へり若し夫れ猶太人にして豫言者の記せる所のことを能く考へたらんには彼等はキリストの神なること自在の神の獨主なることを拒まざりしならん又た曰く「道」は自らこれ父の神より生れたることを證す彼の實に神の子なることは即ち亦た自ら眞に神なることの充分の證據なりと(對トリフォン護教論)タチアンは希臘人等が教會の信仰を以て全然たる思想と視做せしとを熟知せり然るども尙ほ斷乎として神は人の形體を以て地上に現はれ給へりといふを憚らず(希臘人に贈れる觀誘書二十一章)カナタゴラスは「道」は萬有の創造者主治者として父神と同一體なりとのことを特に力を

用ひて明言し、サルズスのメリトールは主イエスを神にして人なるものと言ひ且つ曰く基督教徒は異教人の爲すが如くに無感覺の木石を拜せず神及び神のキリスト即ち神たり「道」たる者を拜するなりと(メリトール獲教論)若し夫れ聖イレニアスに至ては恐くは聖約翰より聖ポリカールを経て西方教會に流れ入りたる最清最深の使徒的教義を代表する者たり聖クレニアスはキリストを指して獨一眞神の御名を與り有する者といひ又たウフレンチナスの徒に反對しては神の名は其最も嚴密なる意味に於ては何等の天使にも與へられたるを無し而して聖書中若しくは此名を神自らに拜するものに與ふるときには必ずや其語の十全眞味を以てするに非るを示さんが爲に之を説明するに足る若干の句を挿むを以て常とす萬物の父なる神及び其子イエス、キリストを除きては何物も雖も直接に神とせらるること無し新舊兩約書に於てはキリストは神及び主として無窮の王として獨生子として受肉降世の道として説かるキリスト若し拜せらるるとせばキリスト若し罪を赦するとせばキリスト若し神と人間の仲保なりとせば其所以は他なし彼は眞實に神の身に在りますが故なり」と

若し夫れゴールよりしてアフリカに移り第二世紀より第三世紀に移るに至ては我儕の主の神性に關する證言力と教とは頗に甚だ多きを加ふるありて逐一之を引擧するに遑あらざらんとす唯だ其中に就て若干の顯著なるものを一瞥せんにアレキサントリアに於てはタレクレメントは生ける神即ち會て苦を受けて禮拜せらるる神「道即ち神にして人たり萬福の施主たるもの」教主たる神即ち我儕を救ふ者萬有の造主たり元型たる者」てふ言語を屢々用ゆるを見る又た論じて云へり我儕の重主の神性てふことは即ち彼と父神との等一彼の人間生活の間彼に於て父神の現前



又た彼に由りて父神の人に對する啓示を解説するに足るとオリジンはセルサスの不敬なる批評に對して固くキリストの眞神性を主張せりオリジンは一爾ならず神なるイエエスとてふ語を用ひ且つ教へて曰く「道」神の貌は即ち神なり曰く「子」は「父」と等しく全能なり、曰くキリストは「眞の道」絶対無上の智慮「絶対無上の眞理」絶対無上の正善のものなりと。オリジンの見る所によればキリストは神の全屬性を有す神を觀することは即ちキリストを觀することにて於てキリストの降世は恰も彼の譬論的言語を以て全能の神を人間の如くに説くの理と同じ、キリストの神性の眞實なるや彼が人間の性を取り給ひしことは恰も彼が我儕の有限なる智性に眞理を悟らしめんが爲に旨て譬論的教話を用ひ給ひし趣意を同一なりと見ざる可らず。キリストに優れる至神は在ることなし。キリストは眞實に神なる者として全宇宙に臨在す而して亦た各人と偕に臨在し給ふなりとオリジンは毎に其の説教を結ぶに我儕の主に對する頌咏の辭を以てし且つ曰へり世にキリストの神性を信することを拒む者は唯だ一種の癡狂者といふの外なしとテラタリアンの信説は敏辯學派の銳氣を以て滿つ然れどもキリストの神性を語るに方ては其反對者に對して極めて痛切の言を用ひたりきテラタリアン自ら「父子同一體」の語を豫期したり即ち曰くキリストと神と其體の一なるが故に神と呼ばる、キリスト唯だ獨り神の生み給ふ所にして全人類の上に神たり又た主たるものなりと、テラタリアンは亦た神の降世の可能事たることを論ずるに詭々數千言を費せり彼が此事の結果を論ぜる言語は不信心家若くは半信心家に取りては或は奇怪の逆説と見へんも苟くも誠心實意其事を信するものに取りては極めて當然なるものなり彼は「磔殺せられたる神」又た「我儕の救贖のしたる神の血」てふ言語を用ひ且つ曰く基督教徒

は一旦死したれども尙ほ且つ萬世不窮に御世知らしめす所の神を信するなりと。聖シンプリアンは論じて曰へり、苟くも人間の靈魂を一個の宮殿と爲して之に住み給ふキリストの力を信する者は必ずや亦た彼の神性を信せざる可からず、此眞理を受納するを肯せざる者は全然たる愚者又た不敬漢といふの外ある可らずと聖ビツボリタスは猶太人及びサベリアスは終始丁寧反覆以て此眞理を異教徒の頭腦に注入せんと欲しアレキサンデリヤのセオナスは皇室侍講の候補者たる人々を教訓して漸次此眞理を彼等の異教主公に教ゆる所以の法を授くるありアレキサンデリヤのダイオニシアスは己れが此眞理を拒みたりとの報告を以て殘酷なる譏謗を爲して辯駁しアレキサンデリヤの聖ペテロはキリストの奇跡より推して此眞理を證明せんとせり  
 其他タイル(ツロ)の聖メリデアスは以て西方亞細亞に於ける此信仰を代表するものと云ふ可く殉教者フェリクスは羅馬方面の代表者と爲すに足る縱令へ自余無數の例證は累して茲に掲げざるも彼のサモサタのパウラスニ對して發したる宗教會議の書簡は優に以て第二世紀の後半に於ける東西基督教國の信仰を概括せるものと謂ふ可し  
 以上列擧せし如くニケヤ會議前諸先輩の言語は其趣旨に於て明かにニケヤの決定を豫示せるものあり該會議の時代に至りキリスト神性の問題一たび形而上的の學語を以て提起せらるゝに方ては當年の教宗等は其の諸先輩の最も顯著なる教宗を斥けざらんと欲せば唯だ「父子同一體」の一語を以て之に答ふるの外あらざりしなり反對批評家の動もすれば唱ふる説即ち初代聖記者等の言語は單に文學的の者に過ぎざれば之に重きを措くに足らずと云ふがごときはニケヤ教宗の思も寄らざりし所なり敢て問ふ斯くも漫に初代記者輩に對して用ひらるゝ文學的飾字てふ非



難は果して何を意味するにや他なし此等諸先輩有識にして誠心なる人々なりしに拘らず自己の衷心に最も近き問題を記述するに方りては執情の餘り全然として自制の力を喪ひ用語の精確に注意を缺きて其の最も根本的な確念を誤表するに至りしなりと言ふに在り請ふ暫く此億測の當否如何を判せん固より彼等諸教父は強き感念を有したること疑なし而して彼等は眞而自の人々なるが故に其感ずるが儘を記したることも亦疑なし然れども彼等は決して終始勸勵高談快説をのみ事としたるにはあらず時としては冷靜なる理論家として異教徒若しくは異教派の敵手に對し尺寸の論地争へることありテラリアンは終始一貫の熱烈家にあらず聖クリソストムは徹頭徹尾雄辯のみを事とせるに非ずオリジンは何の場合に於ても類推論のみに恥りたるに非ず聖アンブローズは聖書を神秘的に解釋すると同時に亦克く字義的道德的に解釋せり此れ等諸教宗豈一齋に詩文家若しくは超絶論者ならんや彼等の多くは主として實際家若しくは理義家たり而して毎に強烈なる感念に従ふと同時に亦た其敵手批評の中府に立ちて筆を振へしなりさればジャスタン、オリジン若しくはシプリアン等のの人々に取りてや我儕の主の神性は如何と云ふが如き問題は實に切要に且つ實際的利害を感ずるものたりしとて敢て現今の英國に於て政治商業若しくは科學の先導者を動かすに足れる何等の問題にも譲らざる程の者ならざる可らざるなり且夫れ苟くも人として自覺的に或る事を記し而して其自ら記する所の精否如何は大に同儕人類の無窮福祉に關係すと信ずるに於て何ぞ恕に文學的の虚辭を列ねて漫に他を算ずるが如き擧に出ることを得て爲さんや。

然るに又た一方に於て教父等の文字的失點を捉へて熾に之を喋々するの論者は、如何なる場合

と雖も之を以て故らに且つ主義の上に立て記したるものと爲して之れを怒することを肯せざるなり例へば茲に一教父の言句の上に教會の一般教育と齟齬する如く見ゆるものあらんか、其言句の如何に疎意若しくは有條件的なるも顧る所にあらず只其言句が教會の一般教旨に齟齬するを以ての故に彼等は之を誠實の記者として歡迎し特に注意の價値ある者として高く擲標するに躊躇せざるなり斯る場合に於ては彼の教父等が無主義の虚語を列ねたりとの非難に重きを措ける批評家輩も忽ちに翻りて、其の教父を庇護して過失の言にあらざると爲し曾ては己が排くる所の議論を以て却て自家を利するの用に供せんとすること決して稀ならず豈又た猶ならずや彼等乃ち曰くニケヤ時代の教父若し單に文學的の虚辭家に非ずとせばニケヤ前の教父等も亦た然らずとせざる可らず若しアタナシウス、パウロ及びグレゴリーの所謂文字通りに取る可きものならばジャスタン、マター、クレメント、オリジン及び其同時の諸教父等の所説も亦た然かせざる可らず、若し甲の時代に於ける正統的言語が虚辭に非じとせば乙の時代の教父等の疑はしき若しくは不正統的なる言語をも亦た然らずとせざる可らず、一方に於て許す所の主義は他方に於ても亦た之を許さざる可らず即ち第四世紀の教父に適用するの主義第二世紀の教父にも又た爾かさせざる可らず、アタナシウスを助けたる人々の主張したる言語に適用するの主義はアリウスを助くるの傾きありと言はるゝ人々の言語にも亦た適用せざる可らざるに非ずやと。

而して之を前提と爲して論者は問て曰はんと見よニケヤ以前の教父の中時として縦合ニケヤ會議の教義と撞着せざるまでも之に及ばざる遠きが如き説を爲せし者あるに非るか例へば聖ジャスタン、アターの如きは「御子」を稱し「父」の意思に牽る者否な父の意思によりて「父」より生ま



れたる者とすら言ひ、甚しきはキリストを指して「造物主の下に位する別他の神」と稱せるに非ずや。又アセナゴアセラス、タチアン、テオヒラス及び聖ヒッポリタスの如きに至ては「道」の生出に關する聖書の言語をば世界の創造に於ける彼の發現てふことに適用して之を神よりは別在のものとするに非ずや、斯く彼等が「内在の道」と「發現の道」との間に區別を立つるの嚴なるや「道」は天地創造に至て始めて實神體を備へしめられたりとの意を示すに非ずや又ア見よアレキサンデリヤのクレメトンは暗に「道」を以て萬有の第二厚力と云ひ「御子」の性質は獨一全能者に最も接近したる者なりと斷言するを憚らずに非ずや。オリジンの如きも初めには「救主」は無し始め生出者なりと云ふと雖も抑も亦た「子」を以て世界の直接創造者と爲し父を以て其の根源的創造者と爲して、對照の間極めて如何はしき見解を認むるに非ずや其他アレキサンドリヤのダイオニシアスは自家の言語の爲に辯解の責に任じ且つパシルの爲に駁倒せられたるありアンテオケのルシアンは其言説の爲に破門せられ其身殉教の死を遂ぐると雖も尙ほ且つ一異教派の鼻祖と稱へらるゝに非ずや。テルタリアンがフキシスに對抗せるの議論は會を以てアリウスを助くるに足るとの非難を免れず彼は三位の身に關してモナキ派的の混雜を避せんを欲して「御子」の身位をば父の全身位の分出たり部分たりと稱し且つ「御子」は曾て無かりし時ありとすら言へるに非ずや、且つ夫れ世間何人の不統記者が克くラクタンシアスの言句を辯護し得るもののみや。更に見よ近世の批評家は監督ゾルに對して寧ろベタヴィアスの合名を揚ぐるに非らずや否やゾルの大著述自らは乃て上乘の説を確證するものに非ずや何となれば即と

該著述は豫めニケヤ前後の教父の間には極めて顯著なる齟齬あることを認め、其全編を通じて只管に辯解方疏惟れ努めたるものにあらずやゾルの折角に列舉せる古聖記者の長目錄も奈如せん殆んど其半數は彼をして辯疏の勞を採らざるを得ざらしむるものなるを」と

併て此種の議論に關しては曾て名聲籍甚なる一先輩が本講壇に於て詳細評説したる所なるを以て茲には唯だ此議論の効か如何並に其適用の範圍如何を概論せんと欲す蓋し此二のものを攻在するは本議論の爲に缺く可らざるることなるに拘らず屢世の論者省みざる所とはなれり

(い) 勿論ニケヤ以前の聖記者等が用ひたる言語には時として之をニケヤの標準を以て判すれば不足を表せざる可らざるものあるを宜しく伏藏なく思ふべき所にして其れに就ては論者は上來列舉せるものゝ外更に幾多の例證を示すに難らず而してりれ等は「縦ひ正統的解釋を容れざるものに非るも抑も亦た必ずしも之を觀迎するものにあらず、蓋しニケヤ以前の教父等は己が充分に有する所の信仰の實質に對し説を行ひたるにはあらずして寧ろ其信仰と或る外來の思想系との關係に就て將た(信仰其ものを單に有することは全く別途の賜なる)信仰各條の調和及び組織に就ての智力的成敗に向て論歩を進めたるものなり彼等は基督教徒としてや信仰其ものを有したり使徒等によつて完全に唯だ一たび教會に與られたる信仰を有したり然れども其の信仰を智力的に研究し論述し盡すのことはこれ一個附加的の所能に屬す、これ反對批評家と衝突の結果とし又た「真理の靈」の提導の下に熟したる思案工夫の結果として得らるゝものたり某々哲學系の趣旨及び範域を知り某新熟語の實力實價を知ることは一人に取りても社會に取りても共に經驗に由て教育せられ一時一局の失版に由て訓練せられたる後に得らるゝものなりとす



此點に於ては異論は教會の智心を形成するに間接の與力をなせり即ち眞理をば傷害し拒否することに由りて却て教會一般を以て眞理其もの一睦令を敏活ならしめたり異論は好奇的哲學及び誤表的言辭の傾向恐る可きものあることを自ら例證したり異論は教會の教義に種々と巧慮なる反對を爲すことに由りて却て教會を促して其教義の解明を祐けたるものなり但し異論が未だ此人意以外の功を講せざる以前に於ても亦た教會の個々の教師が完全なる善信仰を以て難問を説明し或は尙ほ未だ眞理に危険を加ふと世に知られざりし所の某々の思想系に向て敏辯考慮を費して反對者を説き伏せんと欲したるをもやあらん然れども天下一統の教會は未だ曾て其團體的資格を以てニケヤ以前に爲する不完全の教義説に信託したることはあらざるなり教會の中の某教父若くは某學派の人々は後日教會が排けたるが如き言辭若くは説明法を用ひたることは或はあらん、然れども其時に方ては彼等は未だ天下有信者の團體に與へられたる如き不謬無誤の天祐を有せざりしなり彼等は多難にして不熟の境遇に有りたる者なり、彼等は不知案内の思想界に經驗を積みつゝありしなり彼等の言語は試験的若くは設備的のものなりしなり之を第四世記及び第五世記の大教父等即ち普遍一團の基督教界が一統的會議を以て其所思を發表したる時代に於て説を爲し隨て教會の公認機關として其所思を代表せし人口に比較してはニケヤ以前の教父等は縦ひ其の愛に於て將た名譽に於ては劣らざるも其勢力(受信力)の重量に於ては次第に位する者と言はざる可らず今之を例證するは決して禮を古大人に失する所以にあらざ抑も第二世紀及び第三世紀に於けるアレキサンドリヤ教師等は其後年會議時代教父等に比すれば寧ろ若き不經驗の地位をしむ彼等は克く我が言語を以て意味する所のことを知れり況んや其意味

せざる所のことは更に明に知れり然れども彼等は未だ術語的繩墨を以て已が思想を測量せざりしなり未だ詳細に意を悉さざるに方り多少の誤解を速くを避けんが爲に思想發表の具たる言語を精査することを爲さざりしなり例へばジャスタンワーター及びテラタリアンが「御子」の可視性と「父」の不可視性とを比較對照せるに當りて彼等の謂はんを欲する所は「御子」は無始よりして己れを可視たらしむるの一性員(人性)を取り給ふことに定まり居れると云ふに過ぎざるが如し、又は聖ジャスタンが「御子」を指して「父の仕事者」と稱しつゝ此言語をば何の説明も無しに亦た舊約時代天使にも適用せり然れども仔細に察し來れば此言語は只だ「御子」の肉體を以て此土に在り給ふ間の謙異に關して用ゆるものに過ぎずとす、斯る解釋は亦たオリジン及びテラタリアンが二派の異論的一主説を論ずるに方りて用ひたる極端順服説てふ言語にも將た亞聖ダイオニシアスがサベリヤン主義に抵抗して用ひたる形成不全の言語にも難なく適用することを得べきなり此人々の用ひたる言語は或は誤解を免れざるものあり然れども若し斯る人々をして後の時代に出でしめば必ずや之を用ひざりしなる可し、宜なる哉聖ジェロームはニケヤ以前の或る教父等に關して曰へり「彼等は只た言語の過失に陥りたるのみ彼等は其用語の外面に現るをよりは別なる意味を以て記したるなり兎に角に彼等は未だアリウス主義の病毒アレキサンドリヤに爆發せざるの時に記したるなり彼等は其言語を何の害にも無き積りにて用ひたるなり彼等は言語の使用に於て今日の人々程には十心ならざりしなりこれ即ち動もすれば世の悪評家の爲に不利益なる曲解を蒙る所以なり」と

實に然り古代未だ宗教上の危険なる淺洲が異端の船の難破に由て測量せられざりし時に於て教



父等が用ひたる所の假設的準備的の基督學語は必しも世の論者が時として憶断するが如くアリウス主義の方向にのみ走るものにあらざることは能く々々心得ざるべからず、之を例せんに聖ジヤスチンの用ひたる數言がアリウス論者の爲に喜んで引據せらるゝありとするも一方に於ては亦た同聖の言語にしてアリウス派の正反對なるサベリアス主義の爲に引據せらるゝものあり勿々にも「道」の身位的存在の始めを啓示若くは創造にありと爲し、隨て「道」は神の意思に由て起原せられし如くに説けること無きにあらず然れどもジヤスチンは決して「御子」を以て被造者の列に伍せしめたることなく亦た嚴密なる順服説を有したることも無しさればこそ彼は斷乎として教へて曰へり「道」は神の本性よりせるものなり「御子」は神自身より無始無終に生れたる「力」なりと。斯の如く聖ジヤスチンの言語は卒然之を一見するや恰も二個反對の思想にして然かも當時未だ排斥せらざりし所の二異端を含めるものゝ如く双方の異論者は共に正當に否を寧ろ共に自家の必要に應じ彼の言語に訴ふることを得るなり

且つ夫れ教義なるものは之を堅確に保持しつゝも尙ほ其の説示の方法に至ては時代の異なるに從て自ら趣を異にせるの要あることを察せざる可らずキリスト性の教義に關しても亦たニケヤ會議の前後其時代を異にするに從て必要ありしなり、福音が尙ほ未だ羅馬帝國の到る處に異教に對し苦戦しつゝありし時代には教會は全力を盡くして至上存在者の獨一を主張したるや必せり何となればこれ實に教會が異教の多神主義に對して最も高く標榜せざる可らざる所の根本

眞理なりければなり而して此眞理を明にせんが爲には勢ひ由て以て聖三位の歸一なることを確守し且つ説明するに足る所の關係を持に勢言するを要したりき夫れ神の生存の無窮の秘義に於て「父」は神性の淵原にして「子」と「聖靈」は各其の無始の出生と發出とに由りて身位的存在を得るとは新約聖書の神學説が明かに示す所に屬す、さればオリジンが「父」を指して「第一の神」と曰へるときにも畢竟は之れ使徒が「唯一の神」「萬物の父」「萬物の上にある者」と謂へると其義を一にせり、オリジンの語意を察するに「御子」の生命は時間及び優劣の關係なしに御父より出でたるものにして、而して此意味に於て「御父」の生命に服従すと云ふにあり、蓋し斯の如き問題に就て、毫も時間の先後本性の優劣などの如き誤謬の思想を現はさずして發生若くは順服てふ觀念を説き示すことは彼に取りて甚だ難きことなりしならん何となれば當時未だ教會の定教的術語は比較的に不定にして多くは個々教師の撰決に任せればなり、彼等は其所思を發表するの記號として有形上の言語を用ひたり、此等記號たるや素とこれ被造物の界より取りたるものなれば非被造的のものを例示するに不充分なりしことは論を俟たず隨て不完全の觀念を輸入するの媒介となりたること是非なけれ

〔註〕批評家の爲に非難せらるゝニケヤ前教文等の言語にして、御子の生出とは御父の無始の存在と全然同じく無始なりとの觀念を現し之を廣く讀者の心中に入らしめんが爲に有形界より其の存在の最も直接の結果たるものを例に取りて説けるを一見して明かなるものあり、アレキサンドリアのクレメントは曰く「御子」は「御父」より發出せしこと光線が太陽より發出するよりも速かなり」と其目的甚だ可し然れども此類別は批評家の爲に仍て其言ひ現はさんとする父



子同存てふことに技抵するものとして論ぜらる、即ち批評家は此「よりも速」(速)としてふ語に特に人意を呼びて、恰も記者が速かきの程度のみを心中に有したるが如く附會し來り而して曰へり然り「御子」が本源より生出せしは光が其本源より發出するの速なるよりも速かなるものにはあれども決して其本源と全然同一に無始なるにはあらざるなりと酷解も亦た甚しからずや

借て以上の如き言語を用ひたる教父等は當年に行はれたる若干の發出説を眼中に置きて反覆丁寧に主張して曰へり「御子」は意思及び力能てふ神的屬性に應じて「御父」より生出したるものなりと今之を吾儕人間の經驗上より觀察するときには吾儕に於ては意思とは己れが實在に呼び出す所のものに先ちて存するものと悟る、然れども神に於ては、無始無終の實働と同じくあるなりされは聖ジャستنガ「道」(道)の存在成立は神の意思に歸すと言ひたるを人の誤解する所以は只だ此言説を擬人的の意味を以て解せんとするが故にこりあれ、これと同じくして「内在の道」と「發現の道」とのアレキサンデリヤの派の區別は自然にこれニケヤ以前の教會の順服説の教育と相會したりき、固より或る意味に於ては「御子」は出で天地の創造に従事したるときに「御父」の懷を離れたりと言ふを得可く斯くして創造の實働は稱して「御子」の第二の生出なりといふを得可し、然れども斯くいふは決して世の論者が解したるが如くに「御子」の無始無終の生出及び神の中に於ける無生出無窮極の存在てふことを否定する所以にあらずこれ之を記したる教文の説く所によりて頓て明なり

概して之を言ふときは大古の教父等は御子の順從てとは以てふ神を唯一とするの教義を保護し解説するに足るものと爲して主張せしなり、縦ひ若干の教父等は之を言現はずに不注意にして大膽に過ぐるの語を用ひたりとするも此一般真理其のものは決して當時の教會に於て疑はれたること無し實に御子の順服といふことは後年異教の衰落によりて故らに主張するなきに至り、又た教會がアリウス主義の運動の爲めに迫られてイエス、キリストを思念するに無始生出の存在てふ意味に於て彼と父との順服の關係に於てよりは寧ろ絶對的に父なる神と同等の身位を有し給ふことに於てするの必要生ずるに至りて、稍々掩蔽せられたるの感無きにあらず、然るも尙ほ此教がニケヤ時代に於て如何に懇ろに教へられたるかには既に監督ブルの論明したる所の如し然り而して此第二三世紀に於て重きを措かれ反對論者の爲には屢稱して疑はしき正統説といはるる所の「御子の順服」てふ言語并に之に關する説明は實際上一方に於て教會の教語が最初よりしてイエス、キリストの神なる真理と一般に公宣したる實事と決して矛盾するものに非ざるなり。

は按ずるにキリスト神性の真理たるや古ヘニケヤ以前の時代に於て教會の教師等が未だ其中に含まれたるを悉く認知するに至らず未だりれと其の周圍の諸真理より關係尤嚴密なる言説を以て榜表するに至らざりし時よりして業に已に教會の中心的教育たりしこと疑ふ可らざる所に於て較々不熱慮なる言語を反對論者の爲めに利用せらるるを免れざる教父等の教論たる所も決して此の真理に支光するものにあらざるなり、例せば前既に予の論じたるが如く聖ジャستنの言語は縦しやアリウス主義の論者の爲めに引據せらるるとするも一方に於てはキリストの神性を餘りに深く論じ進みて遂に父と彼との身位的區別を否定するが如き論者の爲にも亦た等し



く引據せらるゝなり、これを同じく世の反對論者の爲に利用せらるゝこと尙かく甚しきオリジン及びテルタリアンの如きも明にニケヤ信經の言語を豫期せるものあることは彼のベタウイアスも認めざるを得ざりし且つや右二人の言語を仔細に之を點檢し來れば尙くも「内在道」その哲學的範疇を基督教の神學中に輸入したる程の記者にしてその「道」の無始無終の生出を全心に信じたること如何でか否定するを得んや蓋し我儕の主の神性問題が一たび現れ來るに方りてはニケヤ以前の教會が之れに對する答辨決して曖昧若くは躊躇の色を帯びぶるものにあらずりしことは時に注意せざる可らず尙くも此眞理に對して攻撃を試むる者あらば未だ曾て教會の中心之が爲に激昂して有力の抗議を生ぜざるは無かりき、見よ羅馬のヱイクトルがクオルトドンマン派を禁交せし時に方ては彼の譴責はゴール及び東方を通じて或は公然たる諒諍を以て或は陰然たる輕蔑を以て酬ひられたる彼がセオタスを教會の親文より禁止せし時に方ては其行爲は天下一般の承認を博したるに非ずや、蓋し當時教會の心臓は此ビザンチンの柔皮工の棄神棄教に對し義憤を以て激動したればなり、又た見よアレキサンデリヤのダイオニシアスガサベリヤン主義に反對して熱中の餘言語の過失あり、我儕の主の本性问题に關じ異端なりとの非難を受くるに方り忽ち書を裁して羅馬のダイオニシアスに致し之を辯明せる所は遙に後年アタナシウスの言語を豫期せるも、更にサモサタのバツラスが基督教界の第一教區に頭角を出せるに方り彼が屢開きたる一般の激昂強剛の抗論痛切周到嚴格なる排撃の聲は以てキリスト、イエスの神性てふことが第三世紀教會の中心に如何に深く根ざしてありしやを見るに足れり、嘗に爾かのみならず若しキリストの絶對的神性斯の如くに一統信仰の一主題

たりしに非るよりはサベリヤン主義の如き異端は到底起り來るの由無かりつらん抑もサベリヤン主義はアリアン主義の否定したる所を餘りに強く主張し過ぎたるものなりサベリヤン主義は固よりキリストの神性を認諾す而して之を皇張するに過ぎて遂に彼の身位を「父」の身位との區別を否定するに至りしなり。若し夫れニケヤ以前教會の信仰果してアリウスの所説と趣を同ふしたらんにはノエタスは該時代の信仰に訴へてこれ神性中の實體的一區別を否定するものなりてふ曲解を施すに由なかりしつらん而してアリウス自らも敢て教會の不易不變信仰の中心眞理に反對して其歴史的相傳を破壊するの詭辯者として責問せらるゝこと無く唯だオリジン風の順服論者若くはアンテオテ派の用語家の代表者として無事に通過することを得たりしならん。

實に我儕の主の神性てふとは使徒等の死後の時代に於て教會の信仰及び言語の内に入り來りしなりとの思想は早き頃の單人論者が大膽無慮に提出せしものなり予が曩に第七講中他の問題に關して第三世紀の初めの頃に榮へたる一無名記者の言をユーセヤヒアスに由りて引證したる所は亦た以て此問題に關しても引證するに足る、此一記者の言語は座ろに我儕をして凡そ此の種類の憶説がニケヤ以前の時代に如何様の待遇を蒙りたりしかを見るを得せしむるものなり。當年の單人論者アルテモンは堪能なる哲學者兼て亦た數學家たりしものゝ如し、彼は主張して曰ひけるはキリストの神性てふことはヱイクトルに繼ぎて羅馬の法座を占めたるセフィリナス督職の間に始めて教會に輸入せられたりと。若し夫れ此談をして眞實ならしめば必ずや我儕は教會を以て由來未だ完成せざる天啓の機關たりしものと思像する可然らずんば即ち該教義を以



て古來の簡單なる信經にして漫りに人爲の附加を施したるものと想像せざる可らず然れども予が前講引證したる一記者の言は乃ち此アルモン説の急所を抑ふるものなり該記者は好諱を弄して曰くアルテモン等の唱ふる所は若し聖書に反對せざりしならば或は信ず可きものにもあらん唯だ其の聖書と相容れざるを奈何せんや爾か而已ならずウィクトルよりは更に古き時代に於て當時流行の異端を防ぎ眞理を擁護する爲に記したる兄弟等の述作あるを如何んせんや、見よジャスチンの如きミルトアデスの如きタチアンの如きクレメントの如き其他キリストの神性を確説せるもの何ぞうれ一二にして止らん天下何人かイレニアス、メリト其他の著作に於てキリストを神且つ人なる者として明記しあるを知らざる者やと、是れ即ち當年の教會が新條に添加すとの非難を蒙るに當りて自然に頼り用ひたる所の論據なりとす。成る程時としては古への記者は該眞理を稍々輕んじたることもあらん、或は説明を待て始めて其眞意を明にするが如き言語を敢て用ひたることもあらん、或は自家特別の思想系に隨て事を記し爲めに同一の素養無き人々の爲に曲解せられたることもあらん然れども彼等が常に其周圍に運動し彼等の常に觀念及び言語の背地に懐きたる所の信仰の趣旨意義如何に至ては設解す可き様もなし况んや教會及び新約聖書頼て彼等記者等の教へたる所と毫も異ならざるに於て焉が彼等が後日新教義を發明したりとの非難を容るゝの余地あらざる可けんや。

## 第三

『父子同一體』の教義が現今に於て蒙る所の許多の非議の中其の二個のものは特に我儕の注目を要す、

A) 近者議ある者あり曰く『父子同一體』Homousion てふことは一種進化したる思想にしてこれニケヤに於て採用せられたるに先づこの六十年アンテオケの會議に於ては拒否せられたるものなり乃ち知る定教的信仰の潮が由來年と共に高まり來リニケヤに至りては其前年付て凝さざりし所の地を終に履ひ了したるを若し果して然らば若し教會信條の不斷發達てふ原理を容るすならば、何故に其以來該發達の結果をも許す可らざるか若し我儕ニケヤの決定を以て神の眞理を確説したるものと信するならば何故に十二年以前基督教會を擾動し爾來教會の最大團體の公信條に加へられたる所の「聖處女無罪妊身の宣言」處女マリヤの身は純無罪にして生れたりとの宣言に關しても同様の信仰を採用するに躊躇す可きかと。

さて此議論に對ふるに方り第一に出て來るは言語の問題なり請ひ問ふ論者の所謂教義の進化とは果して何を意味するか、これに在來の思想若くは信仰に與ふるに自己若くは他人の思想に於ける更に精確緻密なる解説を以てし、而かも其信仰の實質には何の新事物をも加ふる所無きの謂なるか、抑も又たこれは樞實の成長して喬木と爲るが如く内部よりの擴大に由り、或は幼稚なる殖民の増加繁榮して遂に大國家を成すが如くに、外部よりして新智識を添加することに由りて該體質其物の發達を意味するものなるか右兩様の中孰れか眞に進化若くは發達てふ言語の意味なりやいはば予は普通の意味に於ては進化發達とは其物を長大せしむるの作用なりと答へんとす。夫れ此教義の使徒等の教育に於けるや決して樞實の樞樹に於けるが如き關係にあらず此等兩者の眞關係は只だ一の時代の言語を他の時代の言語に精密に翻譯したるものに過ぎざる



なり。知らずや新約聖書は致へて曰くイエス、キリストは萬物、人類、天、及び靈界の主なり  
 (約翰傳五〇十七、馬太傳八〇三、十三。九〇六、廿二、廿五、廿九、約翰傳四〇五十。五〇  
 八。馬太傳十〇一、八馬可傳十六〇十七。路化傳十〇十七。約翰傳十四〇十二使徒行傳三〇六、  
 十二、十六。九〇三四。十六〇十八。〇馬太傳廿八〇十八。二十。約翰傳五〇廿一、廿二、十七  
 〇二馬太傳七〇廿一、廿三、十八〇十八、廿六〇四六。約翰一〇五一、二十〇十二)世界の立  
 法者たり王たり審判者たり(馬太傳五章七章、九章廿九。三十。十五章十八。十八章十九、  
 廿五章三十四、四十約翰傳八章三六。十四章二十一。章十五章一二。二十章二十三)人の心の  
 奥底を知る者(約翰傳一七章四十七五十。二章廿四、廿五、四章十七、十八。六章十五、七十。  
 十六章十九、三十二。默示錄二章廿三。罪)の救主馬太傳九章二、六。路加五章二十、二十四、七  
 章四十八。二十四章四十七。約翰傳二十章二十三。生命の活泉なり(約翰傳四章十三、十四、  
 五章廿一、廿六、四十六章四十七、五十一。五十八。十七章二十八)なり曰く彼は眞正の天福  
 及び救拯の與主(馬太傳七章廿一以下。約翰傳六章三十九、四十、十章二十八、使徒行傳四章  
 十二。希伯來二章十九。十七章十八)死者の同生者なりと(約翰傳五章二十一、二十五。十一  
 章二十五、並に同傳二章十九、十章十八)。

又た新約聖書に於てはイエス、キリストを以て明かに普在遍滿、全知、無窮にして「父」と絶  
 對的に同じきものなり「父」と絶對的に一つなるもの人類の信賴信仰及び愛を「父」と等しく  
 享くべきものとせられたり(約翰傳三章十三。馬太傳十八章二十。同二十八章十八。腓立弗三  
 章二十一、希伯來一章三節、馬太傳十一章二十七。約翰傳三章十一。十三。六章四十六十章十

五、哥羅西二章三。約翰傳八章二十八。十七章五。默示錄一章八。二章八、二十二章十二、十三。約翰  
 傳五章十七、十九、二十一、二十六。十章二十八、廿九。十四章七。同十章二十八、三十、十  
 四章十。十四章一。十六章三十三、哥羅西二章二十七。馬太傳十二章二十一。約翰傳六章廿七、同  
 第一書三章二十三。使徒行傳十六章三十一。二十章二十一。哥林前書十六章二十二。約翰傳十  
 四章二十三)又た彼を以て創造者へ約翰傳一章二。哥羅西書一章十六。希伯來一章二十)保持  
 者(哥羅西一章十七。希伯來一章二)萬物の王、萬物の王(使徒行傳十章三十六。猶太四節。默  
 示錄十七章十四、十九章十六)萬惠の由て出づる所(約翰傳一章十二節十四、十六十七章廿撒  
 羅尼迦後二章十六)「父の榮光輝」基督主の像(希伯來書一章三哥羅西一章十五。哥林多後二  
 章十六)神の貌(腓立比二章六)神の充ち足れる徳を己れに有する者(哥羅西二章九。約翰傳  
 一章十四、十六)神なるものとして示されたり(羅馬九章五。約翰傳一章一。使徒行傳二十章二  
 十八、提多書二章十三。約翰第一、五章二十)并に羅馬八章九。十一。同十四章十一。十二を對  
 比せよ)新約聖書中此教義に關せるもの右の外殆んど枚擧に遑あらざらんとす斯るが故に苟く  
 もイエス、キリストは「父」と同一體なるや否やとの問題湧起せし時に方ては之に對するは只だ  
 二途其一あるのみなること明かなり然りとの言を以てするか、左なくんば必ず使徒自身の教旨  
 を他に辨じ開くの道を擧らざる可らざりしなり。

事の眞相を言へばニケヤ教父等は唯だ我儕の主及び使徒等に由りて第一世記の通常語を以て教  
 へられたる所と第四世紀の折に學的言語再說確定せしに外ならざりし、さればニケヤの會議若  
 し第一世記より進化發達しありたりとせばそは只だ解説法の進化發達のみ、これ教會の擁護供



奉に托せられたる萬世不易の定教をば第四世記當時の基督教徒の周圍に發達したる新智力界との關係に於て説き現はしたるに外ならざるなり。縱(如何なる思想の不定なる經驗が此所彼所學者の口より出でたるものありとす)し基督教の根原教旨の意義若くは教會の傳說的信仰の本領如何に至ては毫末の疑を挟むとを許さずニケヤ神學者等は唯た其先輩諸教父の信仰を新言に翻譯したるに過ぎず彼等は決して此信仰を張大せしにはあらず彼等は其受けたる所の教を保維し遞傳するに止まるること熱心に明言したり、彼等がアリウス主義を排斥せし所以は實に其れが新奇のものなりてふにありし彼等に取りてや該主義は誤なりし何とをればこれ近か頃にも起りたるものなりければなり、彼等神學者は已が信條に言はれてある所の事を言はざるを得ずして而して彼等は之を云へり彼等の解説教權的言語に加ふる所ありしことは則ち之れあらん然れども基督教信仰の條件に數を加へたることは決してあること無し況んや信仰の領域が彼等の爲に推し擴められしこと無きは言を俟たざる所なり語を換へて之を言へばニケヤ會議はキリストニ對して其の會て有し給はざりし所の新尊榮を呈したるものにはあらず却てキリストが使徒の時より以來人間の思想及び心情の中に基督教界の有形無形の活動の中に於て有し給ひたる至上の地位の概元不易なる基礎を一層明かに劃定せしに外ならざるなり。

第三世紀間に於ける「父子同一體」の標語の歴史は卒然之を一見するときは是がニケヤの採用を以て増長發達と爲すの見を助くるものゝ如し、固より此標語は曾てダイオニシアス其他の人々恐らくはオリジンまでも教會の信仰を發表する爲に用ひたる所なり然れども此標語がなまな

かにツソレンチナス及びマニキの徒の愛顧を受けたるが爲めに却て其清義を汚濁せられたりと謂ふ可し蓋し正統主義の神學者に取りてや此語は御子神の絶對獨存唯一の性を充分に享け有するてふ意義を表はせり加之此語は其直接目的者(御子)に別個一の身位性あることをも含示せり、若し然らずんば此れ一の重語(同一義を再語するもの)たらんのみ、普通の意義を以ていふときは此語は只だ相互に一樣なるの二物只だ我儕の心の抽象に由て一と考へらるる所のものに適用す但し斯の如きの抽象は神を思考するに方ては不可能事に屬す神の體質とは即ち神自身神に限るものにして徹底唯だ一つなり、かゝるが故に其神と同一體なりといふときは取も直さず被造の萬物と全然隔絶したる彼の獨存自在の本性中に内在するものならざる可らず、是れ正統主義の意味なり。然るに是と趣を異にしてツソレンチナスの徒は此語をば彼等の所謂ニオンと神の此明圓滿境 *Pleroma* との關係を示すものとして用ひマニキの徒に至ては更らに甚たしくして「人の靈魂は物質的意味に於て神と同一體なりと稱したりき夫れ斯くの如く一たび發出論者 *Emanuel* の濫用に至ては此語は唯だ過ぐる一の類同若くは一輕の結帶といふの外何も示さざるものとはなれり此語を斯の如くに使用するとは所謂「同一體」の體りれ自身は恰も神の外なるものゝ如く且つマニキ一流の論者が示せし一個の形而下のものに見ゆるに至れり宜なる哉サモサタのパウラスは取て之を利用して之を形而下の意味に曲解し以て一統主義の用法を攻撃したりき彼は乃ち論じて曰く若し「父」と「子」とが同一體なれば必ずや神の此の二身位其ものとは別れ更に高くして彼等が共に有する所の或る「體」無かる可からずと。後ニイルミリアン及びグレゴリーは此の濫用と曲解を慨し哲學的目的を以て



せず寧ろ宗教的本務よりして此語を「父」と「子」との眞關係を示す所の本來の意義に回復せんと欲して其の當時の人々に解し易きの言語を以て種々と辨明する所ありたりき。然るにニケヤ教父等に於ては全く時の事情を異にして何等發出論者の染色を受くる事無く純ら正統的の意義を以て此説を以て此語を辨護する事を得たり隨て此語は六十年前アンテオケ會議の時代に在りては稍もすれば爲に且玄么與さるゝの虞ありたる眞理を今やニケヤ教父等の手に在て保護する事とはなれり聖アタネシウスの我儕に告る所以は之を證するに足る彼曰く「サモサタ流の謬見と争ひたる左教父とは此『同一體』にて語を有形的の意味に於て取りたりき蓋しパウラスは詭辯を以て「キリスト若し父と同一體ならば必ずや茲に三個體のなかる可からず乃ち其一は先天的に存在し他の二は夫れより發出するものならざる可らず」と言ひたればなり、茲に於て神の教父等此パウラスの詭辯を避けんが爲に「キリストは父と同一體なるものにはあらず他語を以て言へばキリストと父との關係はパウラスが心に思ふ如きものにあらず」と言ひたるは固より其所なりとす。然るにこれと趣を異にしてアリウスの異端を排撃したる人々は既にパウラスの狡辯を觀破してあり且つ此語を無形（形而上）の意味に取り殊に神に於ては「同一體」とは決してパウラスの想像したる如き有形のものにあらずと觀じたりければ「御子」は父の體より生まれ給へりと知る以上、彼を以て父と「同一體」なりと稱したるは亦た是れ道理あることなりとす（以上聖アタネシウスの言）按するにパウラスは機敏にして而かも固陋なる論辯家として、努めて此國語に附するに一種特別の意味を以てし以て御子を劣等のものとせず然らずんば即ち神の惟一てふことを破壞せんと試たりしなり。聖ヒラリは云へり、パウラスが此「同

一體」の語を採用したりし害毒はアリウスが之を排斥したるの害毒に譲らず、隨てアンテオケの教父等が之を退けたるは恰もニケヤ教父等を馳て之を採用せしめたるを等しく正統眞理に忠義なる動念に出づるなりと實に然り、凡う言語の價值なるものは畢竟之れを用ゆる人々の意義如何に在て存ず、彼の「中保」なる語の如きも亦た斯の如しオリジンの之を排斥したるに反しテルトリアンは之を辯護したりと雖も彼等の神學上の動念は則ち一なりとすさればアンテオケとニケヤの會議に於ける此「同一體」の語に對する處置は前後相反するが如くなりと雖も仔細に其事情を察し來れば主イエス、キリストの高本性に關し各異の信仰を證するものにては決してあらずして、却て是れ一個の相異なる智力的事情に遭遇したる信條及び趣意の全然同一なることを表はすに足るなり。夫れ教會の信仰及び目的（標的）は終始一にして會て變ずること無し然れども某々の標識語は果して能く實際上精密に教會の精神を代表するや否やとの間に至てはアンテオケとニケヤとの時代を異にするに隨て自ら異りたる答を受けたりき、アンテオケに於ては教會は「同一體」なる語に對して困難を感じたりこれ此語が當時異端者の爲に普通の意義を扭曲せられたるを以てなり、故に教會は危險を避けんが爲に之を退けたり。是と事情を異にしてニケヤに於ては教會は更に深く此語の眞意義を穿つを得たり而して爾來今に至るまで、此語は撰まれて教會の神主長の實に神になることの不變信仰を標識するの徽號とこりはなりたるなれ。

斯の如く見以て來れば此「同一體」てふ語を教會に採納したることと彼の近時の定義に係る聖處女の純無罪妊身（處女マリヤ）には原罪實罪共に絶無なりとの説てふことは目を同ふして論



す可きにあらず後者の如きは單だ基督教會一部分の受納する所たるのみならず之を宣傳公布するの權威其ものが僅に近世の主唱に係り、若しニケヤの教父等をして聞かしめば必ず驚愕したらんが如き權威なればなり、且つや此前後二者は更に根本より趣を異にして、二者の實質乃て其數を同ふせずニケヤの教文等に於ては唯だ從來既に根元的の該真理と認められ初めより其仰の死生に關するの要義たりし所のものを確説したるに止まり彼等は該真理をば唯だ當年の智識界に適するの言語を以て確めたるに過ぎず彼等は古真理を解説したるなり、決して從來人々の爲に見て以て疑はしとせられたる所のことを真理なりとして提出したるにあらずとす、然るに之に反して彼のマリヤ純無罪に關する近時の定義に至ては往昔福音宣傳の始めより十數世紀の間未だ曾て聞かざりし所の一臆斷を前提として主唱せらるゝものなり、而して之を以て凡う救拯主の眞信仰を受けんと欲する者は必ず神の啓示として受納せざる可らずとすることを熱心に主張する人々と此主張に對して等しく熱心に抗議する人々は共に正統派と稱するの權ある神學者なりとす、最も以て之を見れば一の場合に於ては古來相傳の眞理が解釋的復説に由て辯護せらるゝ而已なるに反し他の場合に於ては一の事實の確説が新古に信條に加へらるゝものなり、ニケヤ教父等は單にイエス、キリストは神なりとの根元眞理を其當時の言語を以て主張したるに止れどもマリヤの純無罪の如何のことはこれ一個の別問題にして神の受肉降世の經論に於ける彼女の任務とは何の必然なる關係も無く隨て夫れに關する根元啓示の眞理を解説し辯護するの上面に何の利害をも感ぜざるの問題にてあるなり他語にて曰へばイエスは神に在しますとの天啓眞理を確説することはマリヤに對して一の新尊榮を附するとの公告とは根本より何の關

係だも無きのとなりとすニケヤの決定はこれ教會教會只だ一たびにして危く天より授けられたる眞理の全體を護衛するの義務ある者として教會全體行動なり、然るに之に反して彼の近代の定義は天下中の一教會が自ら以て古來の信仰を主護するよりは更に多くをなし能ふものとなし天啓確證の數に新條件を追加するの權あるものとなし一個の連續的天啓を受領するよりは更に以上の能力ある機關たりと恣に豫斷するもの如し、僭越も亦た甚しからずや。更に今一應之を比較せんに茲に言語は其時代に應じて價値を變じたり、而して或る一の言語の付ては人を誤るの虞ありと認められたるものも今は却て既定の眞理を辯護するの効ありたりと言ふと茲に何等靈性的若くは根元的の直接證據に基くことも無くアノイナスの權威と其の時代の記者等の爲に抗争せられたる危険にして議論喧しき一意見をば恰も確乎不拔の説なるが如くに粉飾して、漫に神の權能に等しき要求を爲して基督教會の信仰を服従せしめんと強ゆるとは何の似たる所もあること無きなり、是を以て之を見れば、苟くも今日に在て聖處女の純無罪妊身を排斥する者は亦た古に在ては必「父子の同一體」を拒絶したらずんばあらじ杯唱ふるの極めて無理なること明かなり彼等の言ふ所はニケヤの決定に全然服従する者は必ずや亦た自家撞着せざらんが爲には基督敎界の羅典部分（羅馬教會）の中に近代發生したる一教義に同一の尊重を措かざる可らずとなり天下豈斯の如きの理あらんや

(1) されども論者又た或は難じて曰はん何故にニケヤに於ては一個嶄新の定義を採用せざるを得ざりしか何故にニケヤ時代の教會は更に古るき時代の教會の如くに單にイエス、キリストは神なりと言ふのみにて満足せざりしか何故に我儕の主の神性に於ける教會の初めの信仰の單簡な



るを縦ひ破らざるまでも少くとも夫れに超越せる所の哲學的標識語を以て基督教界の思想を概束せざるを得ざりしかと

(一)之に答ふるは唯だ左の如きのみ曰くアリウス時代に至ては單にイエス、キリストは神なりといふのみにては充分に謬見を防ぐに足らざりしなり其故は他なしアリウス黨人は努めて「神語を適用するに足れり蓋しキリストは神なりや否や」との甚しきに至ては一個の受造物にすら此聖事柄なりしならんには彼の眞神性を主張するは或は策の得たるものにてあらざりけらん、而してアリウス派の似而非なる言説は成立せしめらるゝことを得たりしならん。且つ夫れ基督の教會若し天啓眞理の教校とし人の靈魂の糧たり愛の獎勵たる智識を學ぶの所にはあらずして唯だ天下に廣く流行する計論クラブとして日々眞理の智識を求めて未だ曾て之に達したることなきが如きものなりしならんには或はキリストの神性其他凡ての根本問題を公開して人の自由に論評するを許したる方善かりしならん。果して然らんには或る者のニケヤの決定を指して曾て基督教界に起りたる中の最不幸なる事件と稱するを或は實に適したるならん、然れども奈何せん教會は斯の如きものにてはあらず教會は自ら人類靈魂の無窮の休戚に關する神よりの天啓を所有すと信じ且つイエス、キリストの眞神性てふことは天啓の至大至要の明信理にして之を離れては基督教の信條則ち死するものと信じたりしなり是を以て此眞理をば苟くも誤解を容れざる精確の言語を以て明に言ひ定むることは教會の本務なりしなり、而して「同一體」の語は即ち此本務の目的を達したるものなりとす。此言語一たび採用せられては以來は、我儕の主

の神なること眞に信ずるの標準となれり此言語は「神」てふ語の中よりアリウス流の意味を全く驅除したり故を以て正統派の採用する所とはなれり。此言語の意味如何に強きかは當時之が爲に速きたる所の反抗の強きこと及び爾後之を打却し若くは忌避せんとして悉されたる反對勢力の強きことと由りて頗て明に知られたり。彼のアリウス派の標識たる「類同體」 Homoiouion とを分つ所以の一字に就てギボンの恣にしたる冷笑が世にニケヤの諍議を以て單に最空漠なる抽象論の外何の實際上利害の懸る所無かりしものと爲し第四世紀を指して無意義なる言葉争ひの時代なりしと稱し能ふ人々の爲に繰返さるゝとは亦た是非もなし、然れども苟くも想を言語の上に止めずして重きを其言語が藏有する所の眞理に措き眼を只だ一個大紛争の歴史的决定のみに注がずして其紛争を湧起せし所以の活問題に注ぐ者に取れば此のニケヤ標語の全要義を明に見ることを得可し。「類同體」と「同一體」 and Homoiouion の差異が當時の天下を擧げて人心を動搖せしめたる所以は他なし此差異は我儕の主の眞神性の眞偽如何の全問題の由て分るゝ所なりければなり彼にして若し其本性に於て唯だ「神の如き」のみならば彼は尙ほ神とは別なるの存在者にして、隨て若し(有り得とせば)第二の神ならざる可らず今之を物に譬へんに大戰の場裏兵馬狼籍劍銳交も接し報國の勇士旗幟を衛りて前後屍を横ふ此時に當り若し軍の作法を辯ぜざる者ありて之を傍觀すれば其者に取れてや僅に某々の染色ある布絹一片の爲に爾かく夥しき人命を犠牲に供することとは或は愚の至りとも見へん、而して其者は此死生に出入せる戰士に向て或は種々と潮謹の言を放つを得ん然るに安んず知らん、其戰士よりして之を言へば其旗幟や實に其國の名譽と威光との標識にして彼等が死を致たして尙ほ悔ひざる所



以のものは決して數尺の染布其のもの爲めにあらずして實に其布片が代表する所の道徳的愛國的思想の爲なりとす。されば古往今來若し世に言語の奴隸たらず、思想眞理事實の上に其眼を注ぎこれらのもの爲に能く言語を使用したる士ありとせば聖アタチシウスころは眞に其人なるべけれ、彼がニケヤに於て「同一體」の語の爲に辨論を辭せざりしは彼が此語以て能く教會に寄托せられたる眞理の寶庫の爲に必要の標識とし守衛と爲すに足ると信じたるが故なり而して其後年に至りて彼等が半アリウス派に對して敢て此語を強ひざりし所以は他なし、彼は能く該派の人々が心にては此語を以て護れる所の眞理に忠なる事を知りたるに由るなり彼は確に思へらく、若し彼等に假するに時日を以てせば必ずや終に此語を受容するに足らんと然り而して爾來一千五百年の間經聯は未だ曾つて我儕の故主の神なることを實に信する人々の大數がニケヤの論諍を非議しれることを示すなく之に反してアリウスの誤謬に陥るを防ぐに足れる此語の効力は優に以てイエスの正當の尊榮爲に熱心に充ち兼て亦古人の靈魂の爲に慈愛に充ちて永く此誠に聊結するに基督教會が有する所キリストの神聖に於ける信仰の最も權威ある告白を以てしたる此聖徒の千古の遠眼を證するに足れり豈又偉大ならずや

(二)論者あり時に或は曰く信經の爲に束縛せられざるべきは是れ基督教會の理想たる最上境界なり信仰の口頭に唱ふることは冷淡淺薄の人心に於ては一種儀式的機械的の拜禮を生ずる虞あり最も神聖なる眞理を僅々の言語中に結晶して、其本義に通ぜざる人々の疑惑に一任することは遂に之をして陋語輕辱の料たらしむることを免かれざるべしと。是れ或は然らん。然れども此の如き危険の大なるは堅確なる言語を以て明晰なる形式の定反を要すの大なるには及ばず

蓋し虛禮家は信經なしと雖も矢張り虛禮家にしてたり懷疑家は信經なしと雖も矢張り不虔なる可ければなり、察するに凡う今日にありて信經を厭忌する人々は、決して第一世紀に於ての如く眞理をば密かに教會の内心を以てせるにあらず、彼等の眼中には遂に異りたる目的在て存す彼のルーソー Rousseau が文弱なる巴理の都人士に對して員扑なる古代蠻人の生活の遙に優れることを描きたるは則ち可し然れども若し前世記未の巴里にして之が爲に、若し歐洲の大森林中に彷徨したる彼等祖先の野蠻生活に再び歸らんと試みたるならばこれ憂あるの擧にはあらずらざる可し教會をして一統信經を等閉せしめんことを勘むる所謂自由家 三三三 は取りも直さず教會をして再び其幼稚時代の無守備の状態に歸らしめんと欲するものなり然れども如何んせん彼等は吾人に對して其擧の無罪無害を保險能はざるを千數百年來の思想に背反し異論者の開きたる同題を閉却し、天下一統の會議決定を無現せんとは吾人の爲ると欲するも爲し能ふ所にあらず。彼の歴史の行經中に豫め信仰の爲めに試鍊を備へ以て吾人の或は陥るの恐ある誤謬を免るゝ道を信經に於て開き給ひし神々の仁政を嫌妄するは吾人未だ其可なるを知らざるなり

若し夫れ勸勉を勞若とはうれを以て獲得し若くは保存なる目的物の價值大小に應ずるものなりとせば、若し邦國は其國民の鮮血を以て賣れ得たる名譽を享樂すとせば、然らば則ち我儕基督教刊世の繼嗣たる者は我儕の主の神性に就てニケヤの大告白を特に忠勇愛教を以て奉持せずんばある可らず蓋しニケヤの定義は古へは尙ほ今の如く教會の生命を養ふ所の眞理を他の爲に否定せられて、之を憤懣義怒したる放念の衰心より發したるものなりとす。アリウスの異論に於て福



音の舊敵は、其破壊を逞ふせんが爲に最後の全力を悉して打撃を試みたり、邪知粗拙皮相の猶太氣質は、アンテオケ流の似而非なる言語中に立て籠もり、アレキサンデリア。敏辯家等は信仰の眞理に代ふるに哲學的議論を以てせり。唯々爾が而已ならず、異教は殷盛堂々たる攻城野戰の上に敗恤したるを憾として今や竊かに刺客を放て其征服者の命を絶たんと欲したり、アリウス宗に於て再現したる諸勢力概ね斯の如し。されば或る人のアリウスを以てボルノイリに比し、コンスタンチアスを以てディオクレチアンに比したるは、決して單に修辭上の激語にあらず、若しニケヤ會議後のアタシウスをしてミランの詔勅前に生存せしめば、必ず同一の悲劇を演じたるならん。アリウス主義は一個政治上の勢力なりし、其勢官廷を左右したりき、彼れ等は哲學的の論客なりき、諸々の學校に觀迎せられたりき、彼等は教宗者なりき、公象の爲に俗謡時風の歌に造りて其教を弘めたりき、ニッサのグレゴリ曾て其古雅なる書の一節に於て、此歌謡の下等人民の成効驚くべきものありし様を描きて其光景の非常なりしを示す、凡そ古來何業の異論と雖ども、これよりも更に強く更に辯舌に富み、更に善し論戰の武器を備へ、更に確に前途の成果を期すべきが如くに見へたるものは未だ曾てあらざるなり。キリストの根元信仰が能く此の猛烈強硬の論敵を克服したるは僅かに曠目瀾久心力を盡せる争闘の後でありたりき。さればこりニケヤの信仰は今日に至るまで教會の勝利の証據たり、吾人此經を唱する毎に座に吾靈的祖先の烈々たる熱火に感じ、縦ひ古への世と雖ども、彼等を助け給ひたる神の大救出の恩澤に對し月々益新たなる感謝の情を催ふさずして可ならんや。此の信經に對する不信は或は單に教念の試練にもやあらん、或は一時正直なる宗教思想を沈停せしむる睡魔の類に

もやあらん。然れども信仰の子女にとりては此告白は毎に其最も愛重し抱懐する所の確信を發表する爲めに最も穩當の言語を供するものなり、吾人爰テ教會の命する最嚴肅の時に於て、毎に彌や新たに毎に彌深き恩謝觀喜の情を以て之を反復せずして可ならんや。吾人は此榮光赫々たる經を以て、單に論戰勝利の紀念若くは乾燥なる抽象眞理を哲學的語言の中に籠めたるが如きものと爲して心中及び頭に歡迎するのみにては足るべきにあらず、須らく之を以て我儕が靈魂の最奥所に於ける信迎の聖殿を誤謬の汚穢より防護するの智力的戒嚴線として、主の受肉降世以來我儕は神殿の後庭に運動する者なるを告げ誠むるの良天使として、凡ての誠實なる基督教徒が宜しく我儕の救主たり神たるイエス、キリストに致す可き所の衷心の愛と禮拜の貢獻を我儕に促す慈母の聲として此信經を修唱す可きなり、



## 第八講 本教義の効益

『己の子を惜ずして我儕衆の爲に之をせる者は豈かれに併へて萬物をも我儕に賜はざらんや』  
羅馬書八章三十二節

近來の學者其の誘りて以て『引證神學』と稱する所のものに對し、種々の警戒及び抗議を爲せるとあるは、我儕の毎に見聞する所なり。是れ或は可ならん。首を回らせば古來歴代の教會に於て、毎に輕燥不精誤謬なる引證推理の論法が熾に神學の境裏に行はれて、或は虛偽の論を眞正の前提より引き出し或は不確實の前提が屢憶斷以て眞正視せられ、由て推論の基礎たりしことも稀なりとせず。且つや篤實なる信仰の輩すら、基督教會界の信經問題を論するに方りしは、己れは明に眞理以下の者にして決して眞理以上の者に非ることを忘れたるとあるが如し。語を換て之を言へば、斯る人々は、現世に於ては我儕は唯だ絶大なる神の經論の一斑を窺ひ見るを得るに止まり、其全體に至ては遙かに我儕の視聽を距れ雲霧濛々無限無窮の境裡に没するものなることを忘れたる者無きにしも非ざりし。思ふに幾多の交錯複雑なる眞理は、之を通曉し能わざるが爲に其の眞理たるを失ふものにあらざれば、強て確難獨定の論理を以て必ずしも前提より其の結論に達せんと努むるが如きは寧ろ之を戒めずんばある可からず、然れども此戒愼は必しも人の守る所とは爲らざりしこと懶けれ。夫れ人の宗教思想にして一たび信仰的の熱情若くは想像力の爲に左右せらるゝとあらん乎、或は一個人にあれ或は一學派にもあれ、輒ち明晰質不實なる信仰の定軌を逸して、神學的荒野の中に徨よひ入り、漫りに空中樓閣を畫くを



是れ事とし、随つて精神の混亂不整を致し、最も粗野なる空會は最も高尚なる真理と交り入り亂れ互に結び纏ひて復た解く可からず千緒萬端遂に理するに由無きに至るなり。但し我儕は縦ひ此等の弊害を認むとするも、尙ほ夫れが爲に神學は決して「引證推理的」のものに非ずとは謂ふ可からず、或る範圍の中に於て適當の主義の下に於ては、「推理」はこれ神學の活動、其生命たる所以のものなりとす、請ふ見よ我儕が聖書に發見する天啓の根本記録其もとは乃て推理的のものにして、而して此等天啓の推理を觀取し調整し證引して其意義を明にするとは即ち神學本務に非ずして何ぞや、累世の教會に於て、天の照耀を受けたる諸賢哲の業は實に此基督教天啓の根元資質を學修するに外ならざりしなり、斯くして彼等の爲したる所は、神學てふ學問を創作したるにはあらず、寧ろ此學を形成したるなり、されば神學とは何ぞやといはざればこれ神の性質と神の人類を處遇し給ふとに關し、神の權威を以て立つ所の前提より引き出したる推理を研究し組織したる一聯の智識に外ならざるなり、故に若し人ありて、引證推理は何等の場合に於ても不當なり、神學に於ける一の真理に決して他の真理を含むものにあらず、基督教徒たるものは聖書より引擧せられ能ふ各命題をば嚴然個々別々に置かざる可からずといひ、又た基督教信經の數個真理を以て毫も相互に關係を有せず、支離滅裂乾燥無味の獨斷なりと想像し、各天啓の真理は唯た其言語の表面に現れたる皮相の意味より外に何の含蓄する所も無しと自得せば、他語以て云へば、教義會の諸教義は今日に於ては要するに唯だ神のことに關する歷代人間の思辯工夫が形成し組織したる多くの無趣味の抽象論のみ視做すの人ありとせば、其人に取りては斯る抽象論の價值及び効果を吟味するは極めて厭はしきことならずん

ばあらじ、斯る人が神學の研究を以て道徑上及び實際上の興味を害するものと爲し、推理的神學を以て他の迷忘若くは有害の學説と取て撰ぶ所無しと爲さんことは蓋し自然の數なりとす。若し人右の如きの意見を心中私かに抱くとせば、餘は其の人の不信を取て怪まず却て其の不信は克く其思想と相調和せるものなることを許さんとす。然し乍ら若し斯の如きに至りては、其人の主たる前提と基督の教會とは既に凡ての關係を絶ちたるものにして、餘す所は唯だ根本的の反對あるのみ、蓋し基督教會に於ては神會て語り給へりと信ず、而して凡そ天下何等の問題と雖も神の言ひ給ひし言語の價值及び趣旨の攻究よりも更に優りて高尚なる實際的利害を人に及ぼすものに非ずと、斷定すればなり。夫れ之に反して神學若し一聯の抽象虛想に過ぎずと信ぜんか斯く信ずるものゝ組織攻究に時を費すは實に無用の業ならんかし、若し一教義を保持するの等閑不確なるや之を以て自己の衷に何の智慮をも開く無く何の心情をも動かす無く、何の便に高尚ほる程度にも導く無き者と爲すあらんか、斯る人に取りては全然と之を放擲する所の優れりとせんのみ、唯だ夫れ然らずして、確呼不拔の真理として現實に保有し抱懐する所のことをこそ始めて思を勞し氣を勵まして精査細檢するを得、随つて生ける信仰は必ずまた推論を誘になり。枯死して空穀と爲らざりし種粒は、若し之を泥炭質の土壤下に置かば必ず芽を出さざるは無きが如く思想及び感情の好土壤に植へられたる信仰は亦た必ず熱慮懇篤の士の道徳的及び智力的生活上に美花を開き良菓を結ばずんはあらざるなり。若し此の種子を土壤との關係を断らんか、其生長は茲に妨げられ而して遂に枯死せんのみ。人として一時或は宗教の信念と實際の生活を分離して、一方に信念を抱きつゝ他方に放姿なる道徳的若しくは智力的行



爲をなすことを得ん然れども憐む可し心情及び意思の中に發芽生長せしめざる所の信念は其命數や既に豫め知るべきのみ。

神學若し果して推理的のものなりとせば、それは一定の原則の下に於て一定の範圍の中に於て推理するなり、もしそれ一己人の獨特たる理論は俄に以て之を受容するに足らずとするも多數人の同意あり多世代に一貫して多くの學派多くの思想家の一致ある推論に至つては少なくとも尊敬以て注意せすんばあるべからず、例へ吾人は、天啓の林料より惹出したりと稱しつゝ其實は天啓の解説にあらずして却て之れを補足擴張したるが如き結論を拒絶すとするも之れが爲めに純ら解説的なる推論若しくは一の天啓的真理の意義を他の天啓的真理を以て彰表する處の推理をも拒絶すべきの理なし、而してかゝる推理こそ實に神學研究の場裡に於ける尤も有益に且つ合義なるものにして、凡そ天啓の委曲を意義明瞭ならしむるものは此の種の推理なり、此推理や或は甲の一事を揚げてこれを顯要ならしめ或はこの一事を抑へて背地に退かしむ、或は文字に拘泥せる批評家が尤も重きを置けるが如き言語をば却て表號的言語の下級に位せしめ、或は適當の主義を思慮とを欠ける人々か見て以て單に第二流の意義を有するに過ぎずと思惟せるが如き真理を揚げてこれを至重要の位置に置く事をなすなり。

却説今回の講壇に於ては其の狹隘なき意義の制限の中に由來深玄無量の妙義ある問題の講究をして最も簡單に且つ不完全ならしめたる一言語に就て論ずる所あらんとす。願ふに苟くも誠心篤實の人において自ら顧みて左の如き問を心中に起さんこと自然の情なりとす、曰く我れもし基督の神性を信ずとせば此の信仰は抑も如何なる事を含蓄するや、かゝる信仰は果して

我れにとりて日常の思想及び行爲の上に何の影響をも及ぼすことなく只に一個の死せる抽象的觀念なるべきや否や、此の大教義若し眞實にして而して吾れは充分に其眞なるを認むとせば只これを公認するの外果して猶他になるべき事なきや、イエスは神なりとは眞理を一度ひ確めたる後に於て、此の至重至大の結論を空しく心中の或邊隅に安置すること、恰も針裝は美麗なれども然かも不用なる書籍が單に圖書室の一角を裝飾するに過ぎざる如き物となし了るは果して一に滑稽に過ぎざるにはあらざるか、吾れは此信仰を我精神の最奥底に禁錮せざる可らざるか、抑も又我全精神これを以て照輝せられ維持せられ確言せられんが爲めに、常住不滅之を思念し其眞意義を貫徹通曉するの要はあらざるか、我れは此大確信の發する處、戴する處の意義が苟も我れの見て以て宗教的の眞理となす處のものを悉く型成薰陶するに至るまで致々として心ろ平らかにならざるは當然の事にあらずや、如此きの信仰は遂に我が各思想を悉く照輝するに至らずしては止む可けんや、これ一種新奇にして更らに深き動念を以て我が各行爲の力を強むるものにはあらざるか、我かために生き我か爲めに死に我か爲に甦り給ひし處のイエスも果して神なりとせば、彼れに對する我本分は、只だ彼れの神性を告白するのみを以て盡く可きや否や、彼れの生彼の死の意義の大ひなること、彼の命令の嚴格なること、彼れの垂れ給ふ約策及び與へ給ふ賜物の性質と事實は、之を此宗教眞理に照して觀想する時には一種嶄新に更らに深き意義を有する事を感ぜざるや否や、神なるイエス、キリストの惠福し制裁し給ふ處の事は悉く彼の神性の榮光及び威徑を意味するものにはあらざるやと。

善ひ哉問や、抑も基督神性の教義は、實に其人の豫期するか如く信仰及び道徑の境に於て然か



し有要に且つ至大なるものなり。本講の主題に掛ぐる所聖保羅の疑問は恰も以上問題の精神に符合せるものなり。彼は人類の罪の爲めに與へられたる神なる基督を以て人生の屈辱及び悲痛の死に對し無限無窮の希望を保證し最大無量の効果を約するものとす、即ち曰く、己の子を惜まずして我儕の爲めに之を付せる者は豈かれに併へて萬物をも我儕に賜はさらんやと、されば己ふ予はこれより進んで聯か此疑問の主旨を攻究せんと欲す、蓋し全諸講の論線より必ずしも離るゝ所以にあらざるなり。思ふに大丸之一個信仰の結果の攻究は即ちこれ其の信仰の爲めに實際的證驗の數を加ふる所以にして、之が辯證をして更らに便宜ならしむるを得ること何等直接の議論よりも勝れるものあればなり、蓋し我等の主の神性と云ふか如き大真理を直接に觀想するは恰も肉眼以て中天烈日の大壯觀を望むに似たり、其八紘を照灼する光明體の餘りに赫灼たる中眼これかに瞬人きて眞想を看取する能はさらんとす、寧ろ夕陽影麗らかにして徐ろに地上を照灼せるの美麗を寫し、其發射せる色彩及び型貌を熱視し却て天に於ける太陽の自然形を能く賞玩し得るの勝れるに如かず。義の太陽たるキリストの神性を觀想する亦た此の如し之を其正面より直接の義論を以てせんよりは寧ろ此大教義に多少依立する處の諸真理即ち該教義より然かく顯著深去壯絶の意義を注かるゝ處の諸教理を攻究せば恐らくは却て其眞想を更に善く了解するに庶からんか。

按ずるに我等の主の神性の教義に關し特に攻究を要するの意義三つありて存す。第一此の教義は已れに先つて存し而して自然神學及び天啓神學に屬するの諸真理を保護す。第二此教義は已れによりて立ち従つて已れ以下にあり已れを族に辯證せられ證明せらるゝ處の眞理を守る。第

三此教義は基督教徒の最特色として斯教の倫理をして異教の道德吾撰を異にせしむる所以の諸善徳に一個の道念を供し由て以て基督教の道德及び靈的生命を培養す。

第一、先づ注意すべきは本教義の保存的勢力にしてこれ已れに先つて豫しめ存する諸真理を保護する處のものなり、此教義は基督教界の信仰の中點に位しつゝ兼てまた後方及び前方を警視す、これ基督教徒の思想中に於て大凡そ宗教の成立に缺く可らざる根本的實識の了悟を守るものなり蓋し此實識たるや、あらゆる宗教的思想及び活動のために豫しめ缺く可らざるものとす。

(一) 請ふ問ふキリスト神性の教義と一個有心位ペルソナリティの神が眞實に存在すてふ根本真理との實際的關係は如何

(一) 若し宇宙間に一個以上の存在者ありとの虚説をして基督教の信經と關係を絶たしめば、世人をして此定説を更に明確に適切に承認せしむることを得るならんとは前世紀并に本世紀にける自然神論者の本望とせる所なり、彼等論者は曰く、有神の觀念なるもの若し能く受肉降世杯いへる俗界的物質的隨伴物より離るゝことを得ば若し神性の中に別個の身位ありといふが如き空漠なる思念の爲に攪亂せらるゝこと無かりせば、若し其の天成自然の勢力、本性の靈活、原形の單純に委して置かれたらんには、人間の行爲上には兎も角く人間思想の上には勢力を及ぼすこと實に驚く可きものあらん、然るに惜ひ哉有神の眞理が基督教々義の纏綿物に厚く掩はるゝ間は此勢力の熾盛に致さんこと到底望む可らず、小るが故に若し無神論を人心より驅逐して神に於ける眞實の信仰を深くし廣くせんを欲せば、宜しく基督教の定教義



を破壊せざる可らずと。然れども予は敢て問はんと欲す斯の如き期望は曾て自然神論を以て達し得たることありや否や事實は之に反し、最近十年間に全歐洲を通じて、基督教信經に對する最も熱烈なる不信的攻撃は、決して其基督教的成分に向て加へられたるに非ず全く其有神的部分に向て擬せられたるものなるを奈何せんや、見よ彼の奇跡の可能事たること拒むることや、神の攝理を人間自愛心の夢想として斥くことや、祈禱の効力を自然法の科學的解釋に無智なるを證する迷信なりとして論じ去ることや、或は自然法の絕對的齋一を假定し自然界を以て自存の勢力と自存の物質より成なるものと爲すの思想が現今の議論場裡に横行するものに於て、實に侵苦攻撃を被むれるものは論者の云ふが如く基督教にはあらずして寧ろ有神論其のものなることを知らざる可らず、見よ現時基督教に反對して擧げし軍勢中其尤も首尾一貫に且つ尤も猛烈なるか爲めに恐る可きものは彼の誇學的なる實驗説を更に智力的に組織したる純物質説なるにあらずや、夫れ斯の如き實驗論者に取りては尤も精微なる自然神論も亦た同じく憐笑嘲弄の資たることを敢て聖約翰及び聖アタナシウスの信經と撰る處なくして、俱にこれ人智發達の神怪時代に屬するもののみ排斥せらるるなり、而して吾人若し現今の非基督教的唯心論者と實驗説先達等とは爭論を今の模様ありしてせんに其舊と伍して凱歌を奏せるものは寧ろ後者にあることを認めるを得ず而して此事實は英國に於けるよりも歐洲大陸に於て更に顯著なるものをり、これ豈唯信者の智力唯物論者に比して劣等なるに由るとは強ちに云ふ可らず、况んや唯心論者が辯護する處の眞理の比較的薄弱なるか爲めにあらざるや言を俟たざなり、然らば則ち如何、他無し彼等が其下に在ること論

に従事せる所の事情之をして然らざるに外ならず蓋し唯物説と云ふか如き然かり猖狂なる反對論の類にたしる襲撃や巧智にして周到なる侵害に抵抗し得んが爲めには活靈として氣力健確なる信仰即ち所謂エテルの信仰ならぬ肉と智との信仰を要すると言を俟たず、而して自然神論は果して能く此信仰を人心に與こと得る哉否や、誰か知らん彼等の稱して神の觀念を改良し聖化し精美にすと云へる自然神説の主張は詮じ來れば彼等の確信の活力を滅ぼすもとに非ざるを抽象的なる自然神説は、縦へ無神的唯物説の侵害に依りて殺滅せらるる憂なき處に於てすら、やかてこれ自己の蒸發的作用によりて死し果つるは免れざるものなり何となれば大凡う人心は一個至高の存在者に於ける活信仰を維持せんか爲めには、刺動力を要し識力を要し後援力を要し保持力を要す而して諸ろ如此きの力は哲學的自然神論者が保持せる若干の抽象觀念の如きものに由りて供給せられ得るものにあらず、無神論に對する彼等の智力如何に有勢なるにもせよ、其立てる處の地點の薄弱なるは掩ふ可くもあらず、而して此弱點は其派の哲學すら已に顯著なりとせば、况んや普通人民の心中に自然神論を扶植せん欲するが如きは其不利果して如何や、自然論的學説が戴せて以て最上點となせる處の抽象空談捕捉すべからざる存在者の如きは天下公象の思想の爲めには餘りに微妙にして其心情の爲めには餘り冷淡に過ぐ、神を以て愛情及び活靈的者とせず寧ろこれを智力運用の等分點となすか如きに至りては信奉の感情は決して満足せらるるものにあらず、然らば餓へ疲れて死せんのみ、如此く純ら智力的に神を觀想して信奉心を殺滅するの風は、あらゆる純自然論説の特質にして、これが公衆の内に宗教的勢力を失墮せんこと期して俟つ可きものあり、自然論者か



其説を完成するに缺くべからざる處の最上勢力者次第はに其人格的の性質を失ひ遂には只だ最上勢力を云ひ顯はすの符號たらんのみ、彼れの道徳的完性は思想の背地は退ずき遂には只た宇宙の精神と云ふ如き漠然たる觀念に陥らざるを得ず、而して更に此至上の精神と云ふ語に代ゆるに最大勢力と云ふ觀念を以てするに至りては、神の智力的なる諸屬性は次第に無視せらるゝに至る、茲に於て半世の自然神の哲學家は此極點に達せん事を恐れ、其所謂神を以て尙ほ能く此の苦しみと罪とに充て人間に生ける攝理を以て行き渡れるものと思像せしめんと欲して頗る力むる處あり、隨つて彼れ等は自然と云へる想像の綱を造りて之を神の自由性の周圍に纏ひ、以て彼の眞姿嚴及び眞休息を説明せんとす如斯きに至りては彼等の神は縱へ唯物的反對論者の爲めに破壊せられむとするも、自然神的思想家の冷淡なる敬而遠之の思想によりて此の可覺的宇宙。最極端に安置せられ、尸位素餐の有様に於て空しく寶位に座して尊拜せらるゝものなる、而して人をして微弱なる間歇的の智力作用を起さしむるの題目としは神の名は文學上に於て時々唱へらるゝ事もあらん、然れども如此きの神が人をして生せしむる處の興味は尙最も善くとも只だ恒星中に人の住むべきや否やと云ふが如き閑問題と何の撰ふ處なかる可く、靈活して萬生を流治し萬物を駕御するの權能者としては自然論者の神は消れて復た跡なからんのみ。

却説斯の如く非基督教的の自然神論が廣布する能はず、否存保持するの力すら無き根本的唯神。受肉降世したるものなりとの教義あるのみ。謹で按ずるに神の受肉降世は我等の思想に於て天地との間を隔つる大虚隙に架橋せるものなり、これ全能全智全徳の存在者を降らし

て彼れの有理性的被造者たる人類の精神及び心中に來らしむるものなり、神なる「道」は肉體となりて謙下して我等の有限なる人格を取れり、而してこの神の謙下の事實が最も明確なる實在及び諸屬性は基督教會の堺域以外に於て發見せらる可きにあらざるなり。

イエスの爲し給ひたる最後の祈禱即ち彼の贖はれたる者どもをして唯一眞正の神を知らしめんとすの祈禱は爾來歴史の中に於て應驗せられたり、見よ聖約翰に於て聖保羅に於て將たナシアンセンの聖グレンヌクノ并に聖オーガスチンに於て神の性質及び屬性の觀念如何に深玄に如何に豐澤なるものあるか、嗚呼此觀念の語靈々たるこれを彼の學者輩空漠なる想像に比して其異なれる事果して幾何ぞや、神の顯存及び稜威に關する此英敏強烈なる觀念が人類の風俗文學立法及び國民の制度及び品性の上に影響を及ぼせる事如何にうれ顯著なるものあるや、この觀念の勢力範圍は如何に勢力上の思辨工夫に超越し、如何に數々人類の意志を柔らげ心情を優しく生活の風習及び意義を變化し精神を革新せし功蹟の如何にうれ大なるものありしぞや、而してうは何が故に然るか他なし神の受肉降世の事實が教會の思想及び心情の上に神に關する觀念を銘刻し隨つて教會の内にて唯一神の眞理は古今常にこれを侵害せんとする勢力を禦き得餘りてあるが故なり、受肉降世の事實は我等の智力以て捕捉すべからず思念以て及ぶ可からざるが如き若干の抽象觀念を我等に示す事をせず、直ちにイエス其人を示し、曰く、イエスは全能者の自ら其無限の權能を制限し給ひしものなり、イエスは無窮無極なる神の自ら甘んじて人類の領域に服し給ひたるものなり、イエスは神の永遠の經綸の我等人類の血肉を褻り給ひたるものなりイエスは慈眼を以て我等に接し視愛を以て我等を憐待し給ふ處



の神の無窮の愛なり、イエスは我等人類の言葉を以て無限なる思想の深奥を語り給ひたる無始無終の睿智なりイエスは（もし我等敢て然か云ふ事を得ば）神自ら己れを我等人類の有物となし給ひたるものなり、彼れは神が我等人間の口に於て心に於て甚だ近かく我等に來り給ひしものなり、我等は彼を見彼に接し彼に愛着し而して神の性質を預かり保つことを得（聖彼得後書一章四節）彼れの體肢たるによりて神の性質を有もつ事を得（哥林多前書十二章廿七節）我等は限りなく彼にあり彼は又我等に在り給ふなりと。

神の受肉降世の我儕に對する効益概ね如此し是れ神を將に人性の至奥内心に接近せしめ而して猶人類の思想に於て神の本性の靈なる事を能く護衛するを得、大凡う神に關する普通の觀念はイエスの神性に於ける信仰の最も明確に尤も強力なる處に於てよりも更に純清に更らに靈的なるにあらず、大凡う聖三位一體の教理及び神に受肉降世の教義を最も熱心に講解し主張したる記者等よりも更に克く神の本性の無聖單一を講解し主張し得たるものはあらざるなり。蓋し我等基督教徒にして能くキリストに於ける我福徳を知らば即ちこれ神に結合せられを有し神に於て生き動き又在るものなればなり。我等の智性我儕の心情はキリストの尊嚴美麗なる生涯に於て確かに且つ絶へず神を曉得す、何となれば彼は我儕の智性的道德的及び有形的の性質を悉く己れに取りてイエスの活人格を以て之を暖め之を照らし且つ恵み給ひたればなり、我儕はイエスとの結合を思念し且觀喜する毎に未だ曾て此イエスに於て我儕と一つにせられたる所の神の存在及び屬性と當面相見ゆるの思なきはあらず、聖書は善く世の哲學的自然神説が我儕と天父との現實交通を人心の中に造り若くは保たんとせし凡ての企ての失

敗の痕を示す、則ち曰く、凡う子を有たざる者は父をも有たずと（約翰第一書二章二十二節）然り、基督教徒をして生ける神に於ける信仰を世の空想の爲めに害せられずして實際に安全なるを得せしむる所以ものは取も直さず基督教徒信仰の窮極目的者たるイエスを絶へず思念し交通するに在て存す、嗟呼暗黒の中より光明を我等の心中に照らしイエスキリストの御面に於て神の榮光を知ることを得せしめにけり。

然るに茲に亦た問ふ可き事あり曰く、我儕の救主の神性に於ける、信仰は能く自然神説が提起する所の智力的危害に對して基督教徒の思想を護るとするも、果して凡神教説に對して亦た同一の防禦力ありや如何と是れなり、究むるに凡神論者に取りては神の觀念は左の二者必ず其一に出でざる可らずして如何なる大家と雖も此二中擇一の外に出で得たる者なし、即ち彼れ等の説く所に由れば、神は取も直さず萬物にして、物質的及び靈的全世界は即ち神自身なり、神は亦た即ち全人類なり隨つて各善徳及び惡徳の元力なり、千種萬様の道德的惡行は千種萬様の道德的美行と共に各々此宇宙的生命の到らぬ限なき運動の一部分たらざる可らず若し又た此恐懼すべき冒瀆の結論を肯んせずとせば然るときは凡神教説の神は抽象的存在の空想ならざる可らず、彼等の神は古昔アレキサンデリヤ學者等の思想せしと同じく、存在てふ事にすら超越する處の空想にして、全然不實不生命不存在のものとして觀じ而して現實は存在するものとは只だ此の宇宙を組織せる有限有形の物質の外なからんとす此說難は歐洲及び東洋諸國に於て上古二千年以來今日に至るまで凡神説の全歴史中に基羅せる處のものなり。凡神論者は其神を以て唯一無二の存在者、其存在は宇宙及び人類を吞滅し隨つて此れ等と同一



視すべきものとすか、然らずんば則ち神を以てあらゆる抽象的觀念中の最も珍奇に最も不實なるもの、明らかに云へば即ち神は存在するものにあらずとの事を許さざる可らず。茲に於てか一問は更に提起し來る、曰く、基督教義が教ゆる所神の受肉降世てふことは、基督教徒の思想をして此説に陥らしむるの憂はなきかと、答て曰く、極めて無し。夫れ此の如く我儕に甚だ近かく來り臨み無限の性を有限性の下に包み絶對自存の性を相難の姿に扮し、全聖無垢の御身を以て道徳的害惡の爲めに沈められ給ひし神を空漠不實在のものとなし終らん事は、苟くも思想の名譽を重んずる者の敢てし得可き所に非ざるなり。

神の受肉降世てふ基督教の教義は只だに人をして以上の如き説難に陥らしむるの虞なきのみならず實にこれ凡神的謬想の侵入に對し最も堅固なる防禦線たるものなり。惟ふに凡神説の力強き所以は人間が絶對者と結合せんと欲する智力及び心情の渴望あるに依て然りての事や我等人世の最も合義且最も高尚なる事たり、然り而して受肉降世したる神と基督教徒の結合するは即ち此渴望を達する所以なればなり、然れども受肉降世の事は一方に於て此結合の渴望を達せしむると同時に他方に於ては其事に關する凡神風の弊害に對し有力なる堡障を築くものなりとす、此基督教徒の信仰に根ざせる受肉降世の神の定教に對しては凡神教的思想の荒波は幾度寄せて返すとも何の甲斐だにもなかる可し、蓋し此教義は無神論者が最も熱心に拒非する處の眞理を豫じめ然定す、此教義は始めよりして有限者と無限者との間、創造者と世界との間、神と人との間には無量類の大懸隔ある事を認む、此點に於てや、此教義の凡神説に反對せる事の甚だしきは最も劇烈なる自然神説に反對せるの甚だしきに譲らず、然れども基督教

の信經は自然神論者が神を以て不偏なる道徳者が此地上に於ける莫大無量數の罪と苦痛とを明らかに知り乍ら而も冷淡無頓着に看過するものとなすの觀念には陥らず、此信經は神の無始無終の御子が我等の主を己れに取り給ひしと公認することに由りて、地と天との間に開ける大隔絶を塞ぐ、此御子の身位に於て被造の性は能造の性と結合し永遠無窮復た離す可らず、人若し此の超絶的奧義の基たる眞理は何なりや此の眞理は何を維持し何を増し加へ抑も又我等の思想に於て如何なる事柄を混亂して永久明確の認識を得ざるの如き迷妄に陥る事を禁ずやと問ふものあらば、余は將に答へて曰はんとすイエスの身位に於て如此く結合したる神人の二性質は根本より其本體を異にするものとの眞理即ち此れなり、イエスに於ける神性と人性との結合をして此の如く勝妙不思議の事柄たり、基督教徒に取りて感謝の因たらしむる所以は一に此の兩性の根元より異なるに因らずんばあらず故に基督教會の信經の中心に於て我等は凡神説の重大なる誤謬に對する堡障を爲すも、猶ほ一方に於ては我等は基督教徒として受肉降世の神の子に對し活ける信仰をなす事に因りて能く凡神説が人として欲して而かも得へからざらしむる處の望を達す、基督教徒の智識は苟も該教徒たらん限りは決して神は即ち宇宙なりと云ふ事を許さず、基督教徒の信仰は決して善惡の區別を否定して神を以て總ての不徳行爲の源なりとなすか、然らずんば、神を不在のものとなし終りて此説難を免れんとするが如き極端に馳すること肯せず、爾かも該教徒の愛は須臾たりとも其愛の目的者たる神と結合して之を己れに有するものなりとの事を疑はざるなり、左はさり乍らもしイエスの神性にして苟も否定せられ若しくは掩翳せらるゝあらんか此の智力的堡障及び此道徳的滿悦は共に消れて跡なからんとす、何と



ならば斯く一方に於て有害なる謬妄に對し基督教徒の習性を護りつゝ他方に於て其心情を満足せしむるものは眞に人なる我儕の主の神性なればなり、自然神教にして克く人の情を満足せしめんと欲せば勢ひ信仰的のものとならんが爲めに、萬有神説に走らざるを得ず、而して萬有神説は縦へ彼のスピーズの倫理説の如き之を讀むものをして殆んど其眞性質の如何を忘れしむる程の温情を有せるもの無きにしもあらずとするも而かも尙ほ其根底に於て將た其結果に於ては體裁能き無神論たるに外なる能はずと然るに之れに反して基督に於ける降世の神性を預かり受くる事は、神を道德の混亂中に没せしむることなく、又た神を以て空漠風を捕らへ雲を追ふが如き抽象的のものとなし終るの憂ある事なし

(二)本教義の此保護的効力に關し、更らに一個の例を擧げざる可らざるものあり、他なし、此の教義は我等の思想に於て神の尊嚴稜威生存を保證すると同時に他方に於ては又人類の眞威嚴及び權利を保證す按ずるに古往々來動搖不定なる時代の精神が信仰の問題と接觸するに方り曳き下ろし來りて之れを人間の不結なる智力及び意志に相應はしきものとなさんとし時とことあるを免かれず此誤謬たるや人類の複雑なる性質の高尚なる方面即ち思想及び權現の腦力の如きものを無視するか若くは夫等の腦力を以て單に文明の生産なりと縦ひまゝに断定す。又此誤謬は此世界に併列せる千種萬狀の骨相學的事實のみに拘泥し遂にニウトン若しくはハーセルの如き大智識すらも畢竟は異形なる不理性なる猿猴の開化したる子孫に過ぎずと

の事を熱心に主張す。此謬見は人間に何等靈的性質のあることをすら否定し思想を以て腦髓の物質中に於ける遺傳作用となし、無形の存在者を信すべき事を以て不科學的迷信的の僻見となし善徳及び惡徳の行爲を以て共に専ら形而下的勢力の結果となすものなり。嗚呼斯る學説に隨ふとき、人類は徹頭徹尾無精神の動物となり了らんとす戰慄せざる可けんや。但し斯く云へばとて余は強ちに我等人間の動物的方面の生理を致々として研究せる彼の尊ぶ可き學問の價値を漫に貶せんとするものにあらず、余は只だ此種の學者が異口同音に唱道して以て却て其學問の眞價を傷けんとするが如き輕卒不遜なる臆説に對して抗辨をなせるのみ、蓋し此の臆説は科學の眞意義を太く扭曲するものなればなり。惟ふに以上の如き學説は只だ熱心の餘りに出でたる無害の僻論に過ぎずとは云ふ可らず、何となれば此れ一個人に於ける健全なる道德の重要素たり且つ社界進運の上に於て更らに必要欠く可からざるの要素たる神の自全的恩賜物則ち人間靈物の高尚至當の價値を亡ぼすものなればなり

然れども尙も基督教會が受肉降世なる我等の主の眞神性を信する間は如此く人類性質の高尚なる方面を否定せる學説は決して盛かんに行ふ可からず、我等基督教徒は決して某々人類の頭蓋骨は某々の程度までゴリラの頭蓋骨に類するとの言を聞くことを厭はず實に我等は知る生命の賜物の享受者としてや吾等は下等動物の最下等者と伍をなすものなることを、我等が斯くて在り斯くて有する處のものは皆神に負ふ事を知る我等豈我等を創造し保護し此生命の萬福を與へ玉ふことに向つて神に謝する可けんや、神は豈我等が斯く有するものも更に少なく與へ得給はざらんや、否神は何物をも我等に與へざるを得給ふにあらずや、我等が有し我等が在る處のもの



の盡く之れを神より受けたるに非ずや、されば萬有中に於ける人間の位置如何の問題は決して我等自身の自得の威嚴に關するにあらず神の賜物の程度及び性質如何に關すればなり、左はさり乍ら我等苟も基督教會の信經を信する以上は如此き問題を以て自由に問はれ得べきものとはなすを得ず、人類の價値を漫りに貶下せる諸大學者の説を聞くに方りては自から悲愴慚惡の情なきを得ず、我等は如何にするも自己を以て何等物形以上の精神もなく前途將來の運命をも有せず吾人の周圍に蠢動せる諸動物と何の明確なる分界でもあるなく單に有機的動物に過ぎざるものとは思惟せんと欲するも得ざるなり、何となれば我等の中に印刻せられたる高尚なる本性は自ら吾等の智力を驅りて唯物的の物理學若くは心理學に首稽せしむるを許さず、我等基督教徒たるものは日夜心中に思念して曰く神は我等共通なる人性の上に爾かく高尚に且つ明確なる榮譽を置き給ふや自ら此人性を己れに纏ひ其榮光を得たる完全の有様に於て之を天上に帶び行きて永遠無窮彼れの寶座に預かり座する事を得せしめ玉ひぬと。

然りと雖も此我等人性の高榮もイエス若し眞に神且つ人なるものにあらざりせば最も其だしきの夢想たらんのみ、彼れの神なる事は取も直さず彼に於て我等の人性が榮光及び榮譽を得而して彼は敢て天使の性質を取らずアブラハムの末裔として我等の個人性を至高の榮地に進め玉ふ事の保證なり、受肉降世によりて我等の中に起さしむる處の希望は思辨と理性との顯象以外に於て苟も人類を貶して何等の道德をも自ら有せざる禽獸の列に伍せしめんとするが如き思想を全然禁遏す若し人ありて我等に告ぐるに如此きの希望は以て生理學の議論に直接に答ふることを得ずと云ふものあらば我等は又た答て曰はんとす、生理學は其科學的證明に依りて苟も此學

を驅つて人間の最上希望及び本能に關せしめんとするが如き人この偏癖を矯正するに非ずやと。此れを要するに基督教界に於て神の創造物中に於ける人間の威嚴を信することは神の子の受肉降世を信するによりて維持せらるるなり。經に曰く愛する者よ我等今神の子たり後ち如何ん未だ顯れず其の顯はれん時には必らず神に肖ん事を知る其は我等其眞狀を見る可ければなり。(約翰第一書二章二節)

## 第二

以上掲ぐる處は只だ基督神性の教義が自然宗教の眞理を其の危害より防護する無數例證の二三に過ぎず請ふ是れより更に進んで該教義が基督教天啓の内性たる眞理に對し有する處の照應的及び説明的關係を講究せんと欲す蓋し此等の眞理は豫じめ基督の神性に關する明確の信仰を期するものなればなり。

謹で按ずるに我等の主の中保的全功業は彼れの取り給ひし人性を通じて成就せられたるにも拘らず夫れが然か有效にして完全なる所以は一に該中保者が只だ人たるのみならず亦た神にてましますに因る、豫言者としてや彼れの教訓は不謬なり、祭司としてや彼れの獻け給ふ犠牲は靈驗赫々たり、而して王として彼れが執り給ふ處の權威は人の良心の上に絶對の命令權を有して且つ全然抗拒すべからざる處の權能を有す

イエス、キリストの神性に於ける誠實健全なる信仰は吾人をして彼れの不謬の教師たる事を信せざるを得ざらしむ彼れの不謬權は他よりの賜物にあらず彼れの高本性の心狀の所有に屬す但しキリスト若し實に唯だの人なりしとも猶且つ彼れは克く其使徒等が有したる如き不謬權を



有するを得玉ひしならん、されば尙くもキリストに於て誤謬ありと云ふは即ち彼れの神なるを拒むに等しきなり。神の智恵にも愚かならず神の實意にして詐偽の懸念なく神自ら好んで誤謬に陥り玉ふ事なり若くは己れの有理性的被造物を欺く事を肯てし給はざる以上は、而してイエス、キリストの眞性を誠實に信する以上は、イエス、キリストの言語を以て眞實不謬なる天子の言として、其前に跪かざる可らず。斯くも明瞭なる推論若し兎角に論議せらるるとせば、こは過ぐる數年間英國の教會を當惑せしめたる如き眞に一時の事情の下に於て然らんのみ。縦へ人イエス、キリストの神なる事を拒むとも尙必ずしもキリストの不謬なる事を拒まざるを得ざるにあらず、何となれば不謬は使徒等の如き人間すら賜物として然るを得可ければなり。然れども一度び彼れの神と云ふ如き不謬にして冒瀆なる觀念を抱くは常人の通識尙以て神間に値ひすとなさん。一方に於てイエス、キリストは神なりと主張して而して他方に於て彼れを以て只に些事小件の誤謬のみならず又た事體重大なる誤謬を教へ且つ擴布したるなりとの語を抱くは恐らくは古代のキリスト教會に在つては全然許容すべからざる奇妙なる逆説となされたらんと。然るに愛しき我等は今世に於て舊約聖書の重要部分即ち我等の主が其不謬の權威を以て批准し給ひたる處のものを奇怪なる古傳不徳なる性質のものなりと高言して憚らざる人あるを見る而して斯る人には一方に於て斯くキリストの批准し給ひし聖文の記事を排斥しつゝ尙且つ不謬理にもキリストの神性に於ける教會の信仰を公然拒絶するに躊躇せり豈亦た奇ならずや、近時智力的の魯莽と見るの外なきが如き結論が喋々と稱道せらるゝ所以實に茲に存す。即ちキリストを近世世界に對して眞に神なるものとして評しつゝ尙且つ重大なる誤謬を免れざりし

ものとなし、彼れを以て眞宗教の創立者となし乍ら尙且つ無價値なる古傳を以て充ちたる書翰を漫に庇護せるものとなし人道の至高の教師先導者となしながら尙且つ蒙昧時代の僻見及び愚想に知らず識らず犠牲なりしものとなすが如き奇論の行はるゝ所以なりとす。

察するにキリストの神性を公然否定する事なくして且つモーゼ五經の可信性を拒絶する人々は余が上に云ふ處を以て不當の論評と爲すならん彼等は云はん我輩はキリストを神の無始無終の子としては不謬の權威を有し給ひしを拒まんと欲せず、然れども福音書に於て語れる處のキリストは「一人の子」としてなり而して「一人の子」としてや彼れは不知及び誤謬の人間の在心を免かれず、見よ彼れは最後の日に關して其の無知なる事を明らかに自ら告白せしに非ずや、又彼れの傳福音者は彼れの智慧と身體は漸々に成長せし事を吾等に告ぐるに非ずや果して然らば彼れの人間の知識は制限ありしにあらざるや而して此知識の一度より他の程度に進み行く間に於ては彼の誤謬はよし必有ならずも可有のことなりしにあらざるや、されば彼がモーゼ五經の事を語るに於て何んぞ必ずしも現今の最大學者が未だ達せざりし程の高度なる檢定力を有したりと想像すべけんや。注意せよ汝はアロウズ及びネストリヤスを辨駁せんとする熱心の餘り知らず識らずキリストの人間の精神の實在を否定し而してアポリナリユス若くはユウテケスの徒と同調に陥らざらんことを。省よ汝はイエス、キリストの爲めに認可せられたれども現今の人間の高等批評家の爲めには斷然と否定せられたる舊約全書の歴史的眞價に關し自ら一理論の爲めに基督教の生命を犠牲に供しつゝあるにあらざるかを。偕て此點に關して吾人の第一に注意すべきは右は論者がキリストは神の無始無終の子としては斷然不謬なることを間接に許容せると是れ



なり、然り苟も基督教徒に取りては此眞理は最も明ならざる可からざる處とす、即是れアッウスの徒の告白するを背せざりし所にして、該異端の徒は「道」彼自身は審判の日に就て無智なりしと曰へり、而して此説や「道」が普遍全能の神と同一體なりし事を否定するの論旨と能くも應和せるものなれどもキリストの神性を信ずとの正直なる主張とは全然相容れざるものなるを余何せんや然るに何ぞ闢らん世間アタチシアスの反對者の誤謬を明らかにするに餘念なきの記者等にして、尙且時として不謬者たるキリストが誤りをなし得無始無終の精神たる彼の智識は其實制限せられ得たりと云ふが如き説をなせるものあらんとは。左れば請ふ神の無始無終の御子は眞實に不謬なりとの事を許容しながら受肉降世したるキリストとして不謬精確の眞理を教ゆる彼の權威を直接に抗論非議せる如き論説を些か攻究する處あらんとす。勿論論者は教師としての權威を不利ならしむる處の可謬性は彼れの人間たる精神在つて存すと云へりされば此の稱妙不思議なる問題を決定せんが爲めに聖書の陳述する處如何を先つて見究めんは。

〔聖路加が我等の主の智慧と身體に於て次第に成長したりと告ぐるに方りては之れキリストの人たる精神に於ける或種の智力的發達を意味せることは固より疑なく此の發達は彼れの體格的成長に應じたる事も亦論を俟たず、智叡に於ける發達の現實にして單に外觀のみならず、ことに智叡の漸々なる發現を意味するに過ぎずと云ふは恰もキリストの身體が漸々なる生長を顯しつゝ其實は成長せしものにあらずと云ふに同じくして勿論これ然る可らざるのとなり。然れども又た一方に於て之れより先き聖路加は小兒たるキリストを指して智叡に充ちたりと云ひ、(路

加傳二章四十二節) 聖約翰は受肉降生の道としてイエスは實に眞理に充ちたりと教ゆ、蓋し此の聖約翰の意味は單に我等の主は正直なりしと云ふに止まらず、客觀的眞理を十分に所有せりと云ふにあり(約翰傳一章十四節)此の眞理の充満は、聖約翰の云ふ處に従へば、主の弟子等が仰望し思念し得たる處に榮光の要素なりとの事を明らかに示す(前目節) 此明文はイエスの人たる精神が夫れ自らは眞理に満ちたるにはあらずして弟子達がよりて以て無始無終の「道」の榮光を見たる處の靈的關係に於て然りしなりと云ふの憶説と相容れざるが如し、聖約翰の語る處は此の「眞理に満つる」てふ事を單にキリストの公宣教の晩年に限り若しくは彼れの復活後の時機に限る當事を我等に許さず、此に於て之を見れば吾人の眼前には本問題に關して二個の陳説なりて一はイエスの智識に制限ありし事を示し、他は彼れの人たる精神に智識の充満せるありしを示す。然り而して此の兩説を調和せんが爲めには、必ずしも吾人は野卑なる唯理論者の囁に倣ひて吾等の主の神性に關し聖約翰傳の示す處と他三福音の説く處とは根本的に離隔せしと想像するを要せず、吾等も聖約翰の所述と聖路加の紀錄とを比較参照せば希くは之れを以て彼れの自謙の一例即ちキリストが甘んじて自らを吾等人類の有限なる生涯の種々の經驗と同一の繁累下に己れを置き給ひしことの例を見るに足れり、彼れもし小兒としてすら賦與の智識に因りて眞理に満ちたりとし而して且つ我等の智力的生涯の種々の状態を経験して適應の給ひしとせば必ずや彼れは觀察と推理の漸々たる行動に依つて諸眞理即ち他の意味に於ては彼れか己でに有し玉ひし處の眞理上に漸々なる知得を得給ひしならんばあらず、此く豫しめ眞理の窮極たる結果を己でに有しつゝ、尙其智識に於て漸々成長する事は普通人間生涯に於ても其例



なきにあらず、例へば道徳上の事柄に於て一個活現なる模範は行爲の或る法則を一個新たなる力を以て我等に教ゆ、而して其眞理たるや我等が前已に直覺的に認むる處のものなり、又他の智識界に於ても譬へば望遠鏡若くは測量器の如き、吾人が前已に心理的計算を以て知り得たる處の結果を更らに確定する事あり、是れを以て見れば我等の主の智力に實に發達ありし事は必ずしも彼れの智識の完備なりし事と衝突するものにあらざるを知る、人としてや彼れは常人生活の智力的常態と相應せんが爲めに總ての眞理に就て賦與的智識を受け且つ彼れの精神に散在したる處の事を經驗によりて委曲に知り得給ひたるならん、されど縦し此説明にして拒絶せられ而して聖約翰の右の陳述を眼中に置かず従つて聖路加の言語を以て單に我等の主の人たる精神が其何等の意味に於ても嘗て有せざりし處の智識を得たりとの意に解せらるるとするも、尙且つ「此の基督教の幼年の間知慧に於て彌増せり」との言は果して吾等の主の公宣教の時に於てすら尙彼れは猶太聖經の眞價値に就て無知なりしと云ふ事を得るが、従つて更らに進んで彼れが舊約聖書の問題に就て確然たる言説をなし給ふに當り彼れは重大なる誤見の犠牲たり宣傳者なりしと云ふ事を得るか安んず然らん如此きの推論は決して聖書の明文に依りて保證せらるのあるもならず又眞理の教師としてキリストの品性及び推威を破壊する力あるものもあらざるなり。

(二)然れども論者又或は云はん吾等の主は自ら最後審判の日を知らずと公言するに於て明らか其の公宣教の間彼れの人たる精神が現實に有したる智識に若干の制限ありし事を告白せるものにあらずや、即ち曰く「其日其時を知るものは只我父のみなり、天にある使者も子も誰れも得んや」と、然れば請ふ此議論噴びすしき一説に於て此「無知」てふ言葉は我等の主の以て何等の意味を示し給ふ處なるか此れ現實に何をも知らずとの意なるか抑々又た理想的及び假定的の自ら以て知らずとなし給ふの謂なるか、語を換へて之れを云へば此無知とは人類が自然に免る可らざる處なれどもキリストの精神は全き人として常に天來の全智力に依りて照されたるが故に當さに免かれたる可きの無知なるが或は亦た彼れが眞實無知にてある事とは異なる一種假定的のものなるか。此れ教師が其實自らは智識を有すれども其弟子等が未だ之れを研究するに堪へざるが故に、敢て彼等に語る事を差し扣ゆるが如き無知にして、即ち點識の智と兩立し得る處の智なるが、再び語を換へて之れを云へばキリストは自ら審判の日を點識しつつ其弟子等の輕卒を責めんが爲めに故らに自己の心眼中にあり得可き處の事を思念するを避け給ひしものなるが彼れは自己の眼界に對して開かれてはあれども他の輕卒なる好奇心を驅りて匆々貪ほり研究せしむるの恐れある秘密を公にするとを故らに自ら避け給ひしものなるか、

我等の主眼の言語の文字的意義に對するに當り必ずしも以上解説の何れかを猶豫なく採用せざる可らざるの理なし勿論此の「子も亦た」てふ言葉には縦へんとしてにもせよ「御子」に無知ありしとの意を含むものにあらずとは許多の思想潔く徳高き人々の唱ふる處なり、然れども古代の典據は此の信仰の爲めに確めたる承認を與へざるを如何せん此の解釋は此白の明白なる意義



の上に一種不穩當の調を加ふるの恐なきにあらず、且つ此文明の正確なる事に關しては何等疑問の根據もある可らざるか故に、此節に於ても又他の總ての章節に於けるが如し最も字義に遠きの解説は最も惡しき解説なりと見做さざる可らず、余若し本講に於て嘗て聖約翰及び聖保羅の大章句に訴へて之を正統教義の證據に供したる以上は此節に於てのみ文字的意義に代文字上に顯れざるの意義を以てするは不可なり、而て我等の主は斯く語り給ふ時に、彼れの人たる精神に於て實に最後審判の日を知り給はざりしとの解釋に對しては古代正統諸教父の保證ありて存す、聖イレニアスは最も明白なる言語に於てキリストの神なる性質に普遍全智の力らに歸し乍ら尙ほ此の我等の主の人として已か無知を認め給ひし事を引きて、其同時代神智論者の智力的獨斷説を辯破するの資に供し聖アタナシウスは我等の主の此の無知は彼れの人たる精神に限りて然るものなりと己が解釋を以て信徒等の能く知熟せるの件を爲し、而して小心翼く我等の主の「道」なる神としての全智力を一再ならず、唱道す彼れは人としてのキリストの無智をキリストが自ら甘じて己れを總ての人と等しくし給ひし自謙の愛に歸するものとなし、此れを以て彼れの飢給ひ渴給ひしとある事實に比せり。ナジアンゼンの聖グンゴリーは昂然として曰くキリストは神としては「彼の時」を知り給へど人としては此れを知らずと曰ひ玉ひし事は誰れれか亦た疑ふ事を得んと。アレキサンデリヤの聖シリルは曰く我等の主の人としての無知は彼れの受肉降世の全經論を能く應和せるものなり、神としてやキリストは審判の日を知れり然れども彼れが現實なる人生の總ての狀態を己れに取り、他のものと同じく智識に制限し給ひし事は、彼れの無限の愛に依りて定められたる自謙の法に能く協へるなり、左れば單に神

の受肉降世の結果たるに過ぎざる此一事實を以て決して彼れの神たる威嚴を損ふ所以と爲すの理あるべからずと、而して此判定はネストリアス誤謬の反對者なり實體的結合論の熱心なる主張者たり聖アタナシヤス神學の全特色の主たる後繼者が提出する處なるを思はざる可らず。勿論教會の内には此點に關して一種異なる信仰の己に受け容れられたるあり例へば聖オーガスチンが補助者の一人なりしレオボラスの政言論の如し、然れども縱へ反對の判斷が其後西方に於て盛んなりしとするもアリウス宗に反對したる重立てる人々はキリストの人としての精神に智識の制限ありし事を認むるに躊躇せず其證としてキリスト自身の言語に訴へたる事は確として疑ふ可くもあらず。

但し人或は問て云はん此の如き説は古への異端たる無智論が徒らに諸大家の英名の下に姿を装へるものにあらずやと、否極めて然らず無智論の異端は只我等の主の人たる精神に無智を歸したるのみならず亦無始無終の「道」にも之を歸したりき。一性説の論派としてや彼等はユージェスの類に倣ひて其人性を吞滅したる所の神性に對して無智を歸せり、此點に於て彼等はアリウスの論者と其撥を一にせり、然るに之に反し、彼等と論議したるアレキサンデリヤのエウロジウスは其先達たる正統教父等がキリストは人として智識の或制限に服し給へしと教へたるを認めしのみ。

人又た茲に於てか問て言はんすとす、若し我等の主と言語文字通りに取る可きものたらば而して其言語に彼れの人たる精神の智識兎に角に制限ありし事を意味するとせば我等は果してネストリアスの誤謬に陥るの恐れなきか斯く我等の主の一身位に於て或一個の問題に關して明智と無



智とが并びありたりとせば之れ「神なる人」の單一を害するものにあらずや、如此き三重の智性  
は我等が一個の人格に就て形造れる處の觀念と兩立せざるものにあらずや、見て茲に至れば我  
等は後世の神學者等が聖アタナシウス及び其他古教文の言語を其儘に受け容るゝ事を肯んせざ  
りし理由は解す可きにあらずや何となれば此等の言語は縦へ明らか右の如き意義を表せずと  
するも解説上勢ひ必らず夫れに達すべければなりと。

左れば余は更に問はんとす如此き意義は其影響を論者の欲するよりも更らに廣大なる範圍に及  
ぼすものにあらずや此種の意義は受肉降生したる御子に借りたる神性と人姓との間に相違の點  
ありしてふ天下の定論に關しても等しく提出せらる可きものにあらずや、例へば神としてはキ  
リストは普通全在に在まじませとも人としては彼れは空間中の或る一定の場所のみ在まじ給  
ひしにあらずや、然るの論者は此玄妙不可思議の事を以て、彼れの一個の身位に於て一の問題  
に關して明智と無智となすか、更らに又た此明智と無智との一兩存は彼れの一身に於て絶て無  
上の惠福と至難至重の痛苦とを兩立したる事よりも更らに多く不思議たりと云ふか。もしイエ  
スの痛苦を描寫せる聖書中の言語を文字通りに了解するも敢てネストリアン主義を確めるの虞  
なしとせば縦へ「子」は審判の日に就ひて知る處なしとのイエスの明言を解して彼れの人性に就  
ひて語り王ふものと爲すも何ぞ必らずしもネストリアン主義に陥るの虞あらんや。もしイエ  
スが人として圓滿なる福徳の神的屬性を共有し給はざる事は敢て神として彼れが此れを全有し給  
ひし之を妨げずとせば安んぞ亦た人として彼れが圓滿なる智識の神的屬性を有し給わざりしと  
を異とせんや彼れがゲツセマネの園に俯伏し給ふに方り彼れの存在の一體涯に於ては萬福を有

しつゝ他の一體涯に於ては太く憂ひて死ぬ計りにておわせしと事實なりとせば、然らば則ち彼  
れの一方に於て全智たり而して他方に於て智識の制限に服し給ひし事をも亦た事實とせざる可  
けんや。斯く受肉降生したる神の兩性方面に相異の觀ある事は何れの點に於ても不思議なるを  
免れず然れども此等の相違觀は我等をして主の愛と抑遜の意義を了解せしめつゝ尙且つ降世の  
キリストの身位的一致の觀念を打破する事なし。彼れの單一の身位は二個の存在境を有す、其  
一體涯に於ては是れ萬福不死全智のものなり而して他の一體涯に於ては心身の痛苦に遭ひ現實の  
死に會し隨つて亦た智識の制限に服す。我等は敢て信す如此き制限は彼れの救贖的本職の完全  
なるを害するものにあらず、此の智識の制限とは決して人類の教師たり救主たるものか須らく  
知る可き處の事に就て知らざるありしとの意味に解す可らず是れ唯だ彼れをして彼れの兄弟た  
る人類の心意識生涯の現實條件と全く己れを等しふせしむる所以のものに過ぎざるなり。  
左れば斯く我等の主の人たる智識に制限ありし事を許容せば此許容の結果は如何なる點にまで  
波及するものなるか、他なし正當に之れを云へば其自身の外何の他に影響を及ぼすともなし、  
即ちキリストが自ら之れを語り給ひし一定の時に於て彼れの人たる精神が此一定の方向に於て  
智識の範域を制限せられたりと是れのみ。

蓋し我等の主が其地上生活の間、常に己れの智識の人類の範域を全く超越せるとを證明し給ひ  
しは聖書に依りて明らかなり。彼れに於ては只た甚た聖徳なる精神の機敏透徹なる辨智力なり  
しのみにあらず、亦た聖靈の塗膏に由りて彼れをして人類の救贖に關する凡ての事を直覺的に  
知らしめしのみにあらず彼れは實に其五感にも示されず感能にも超越したる至難事件に關し



明らかなる智識を有し給ひしなり、即ち彼れは彼れの使徒が將さに捕へんとする細鱗の口中に含める貨幣の何たる事を的確に知り給へり（馬太傳十七章廿七節）又たカペナウンの途上天國に於て最大なるものは誰ぞやとの論議八對自ら其機密を最も明らか知れるものとして弟子等の兩親を説破し且つ告諭し給へり（路加傳九章四十七節）亦た二人の弟子に精密なる使命を與へて自らエレサレムの入城々御せんとする驢馬を發見せしめ給へり（馬太傳二十一章馬可傳十一章二節。路加傳十九章三十節）彼れは何人よりも通告を得ざりしにも關らず反逆者ユタの密計を悉く既に覺り居給へり（約翰傳十三章二節）且つ夫れ此れ等の全智識は惟た其時々臨んで超自然的彼れに授けられしものはあらず。是れ彼れに備れる超覺官的識能の結果たりしことは彼自ら明言し給ふ處なり、左ればこりナタナエルに向つは宜はく「ピリポ汝を呼ばざる前に我れ汝を無花果樹の下に見たりと（約翰傳一章四十九節）乞ふ之れを以てエリヤタニエル若は聖彼得に歸せられたる秘密の知能に比較せよ、夫れ等の場合殊にタニエルの如きに於て唯だ他より默示を被りて始めて若干の秘事を知りしのみ。然るに之れに反してキリストに於ては我等は曾て此間默示を受け給ひしことを聞かず彼れが天に屬するの事を語り給ふや極めて靜平慣熟にして恰も己れの内々見て之を知る所の人が自然に發し給ふ言語なるが如し（約翰六章六十一節）。

實に我等の主の智識は二個の境涯を包括し而して其各境涯は何れも只至上者の眼中にのみ開く處のものなりとす、但我等は此處に於ては彼れに固有の智識たり且つ彼れの靈の宿りし處の豫言者に分與せられたるの智識即ち將來を確知するの識力をのみ論ずるにあらず亦た彼れがツロ及びシトンにして若しコラジン及びベツサイダの如き好機會を有したらしめんには直ちに悔改めしならんとの斷言に含めるか如き全く偶有的の事を知り給ひし事實を云ふするにもあらず。尤も此の如きの智識も其内に含める處の動機及び事情を概観すれば必らずや神のみに屬するものと云はざる可らざれども。余が茲に論ずるは彼れが人間の秘心を知り亦た神の隠れたる思想及び目的を知り給ひしことにあり、實に彼れは人心の隠れたる念と志意とを察し（希伯來書四章十二節）點示録中彼れに歸せられたる「人の心腸を察るもの」との稱號は直に彼れに屬したるが故に（點示録二章二十三節）其歴史的出现の日に於ても人に就て證を立つつるものを求め給はずこれ彼れは人の心の中を知り給ふか故なり（約翰傳二章廿五節）。如此きの察識は決して彼れの周圍の人々が彼れの眼に映せしめたる行爲及び品格の委曲を小心觀察したるの結果にあらずして、彼れの靈に於ける識察彼れの中に於ける智能は人間の秘密なる心中に於て時々刻々現れたる處の無限論及び意嚮をば恰も有形事實を微細に看取するが如くに知り給ひしなり、彼の使徒等は此察識を認めて彼れに向つて云へり「我等は汝の知らざる處なきを知る」と（約翰傳十六章三十節）聖彼得も亦彼れに向つて曰へり「主知らざる處なき我が汝を愛することは汝知れりと（約翰傳廿一章十七節）音に然かるのみならず無始無終の父のことに於てもイエスは未だ曾て一として秘密の通曉すべからざるに會し給ひしことなきイエスの爲めには智識上一の雲霧若くは暗昧に取圍るることなく海上の航路も深水の道程も彼れの一步の足底も悉く彼れに知られざりしはなし、我等の主は其自ら有する處の父の智識を以て之れに等しき父の智識に對應し給へり即ち自ら宣はく「父の我を知るが如くに我は父を知る」（約翰傳十



章十五節)又曰く「父の外に子を知る者なく子及び子の顯わす處のものゝ外に父を知るものなし」(路加傳十章二十二節)されば此等の主語を以て縱へ我等の主は彼れの神的餘智を語り給ひしものなりとするも等しくこれ彼れの人たる精神に賦與せられて有し給ひし智識を語り給ひしなること疑ひなく隨つてこれらの言語は最後審判の日に關する彼れの言語を語るに直關係を供するものなり、即ち最後審判の日に關する彼れの言語より之れを講義的に解すとすも彼れの人たる智力の常態を云ふにあらずして只一個例外の制限を指せるものなること疑を容れず、何となれば福音の歴史はイエスの人たる精神に賦與せられたる智識が通例に全能力の智識と等しかりしことを示せばなりブーカー言へるあり曰く我等は如何に彼の精神の力ら發現し居るかを知ることを得此力や爾かく神の心の奥底を知るが故に苟くも神の爲し給ふ處の事は悉く與かり知らざるなく、隨つて縱へ神自身に特別なる無限の智識を有せずとするも必ずや一般全體に亘るの智識を有せずんばある可からずと

これ斯の如し故に「智慧と智識の蓄積は一切キリストに藏れあるなり」といへる聖保羅の確言は(哥羅西書二章三節)敢て之れをキリストの榮光の存在に於てせずとも彼の地上生活の有様に於て能く了解する事を得若し果して然らば縱へ彼れの神性より流れ出でたる人性的智力が未來に於ける一事件の時日に關して或一定の時に於て之を知る事を妨げられたりとするもこれ只だ恰も彼れの十字架に懸り給ふに當り其人たる愛着及び意思が一時神の慰藉を失ひ玉ひし事に比すべきのみ。監督ゾルの曰へりし如く神の智識若しキリストの人たる精神の上に某々の時機及び事件が要したる程度に隨つて影響したるものなりとせば亦た是れブーカーの我等に告る所

聖イレネアス及びセオドレットに由りて認められたる一原則の適用に過ぎざらんのみ即ちキリストの神秘なる公職の各部分各程度各勤務が要したるに従つて神性の光りの發用は自ら伸縮したりと是れなり。縱へ我等の主をして或る一時に於て或る一事に就ての智識を自から辭せしめたる處の動機を評知し能はずとするも、之れを以て彼れが總ての事に於て己れを其兄弟たる我等と等しくし給ひし處の愛に屬すと思惟するは亦何ぞ妨げんや。若し夫れキリストは該一時の外他の何かの時に於て何かの事に關して全然無知なる場合ありしや否や、或は最後審判の日に關しても彼れが斯く自から語り給ひし時の外他の時に於ても亦た、全然知り給はざりしや否やといふに至ては我等は之れを推定するに何か憑據をも有せず隨つて我等の安全に肯定し得る處にあらざるなり。

我等の主が人として審判の日に就て知り給はざりし事を以て彼れが五經のモーセ的述作及び歴史的信憑力を認可し給ひし權威を破壊する議論の根據となす可からざるの理由は皆に以上述べたる處に止まらず。究むるに此議論たるや智識の制限てふことゝ誤謬に陥り得てふ事を混同したるものなり安んず知らん二者全く別事なることを見よ。聖保羅は一方に於ては「我等の智識完全ならず」と云ひ「我等今鏡を以て見る如し見るところ昏然なり」と云ひ乍ら(哥林多前書十章九節及び十二節)而かも尙ほ彼れは己が教ゆる處の眞理を信するの確なるや、他方に於ては之に斷然として曰く「我にもせよ天よりの使者にもせよ若し我等が罪て汝等に傳へし處に逆ふ福音を汝等に傳ふるものは祈詛はる可し」と(加拉太書一章八節九節)蓋し聖保羅は自ら宗教的眞理の教師として己が不謬をすることを明らかに信したり、而して爾來キリストの教會は彼



れの書簡を以て不謬文献の一部と見做す、然れども聖保羅は宗教的真理に就いて己が智識の制限あるを信じたること亦た等しく明らかなり。蓋し不謬とは全智との意にあらざることを尙ほ智識の制限とは誤謬の意にあらざるが如し不謬とは誤りに陥らざる特別の力を賦すること依りて有限なる智識の人たる教師への與へらる可きものなり故に我等一教師を以て不謬なりと云ふときには強ち彼れの智識は百般に亘るの意にあらざる。只だ彼れは事實真理にあらざる處の事を真理として教へずとの意味に過ぎざるなり。

然るに舊約聖書を認可し給ひし我等の主キリストの權威を云ふる論者の云ふ處は首に我等の主は宗教的真理を教ゆるに當りて誤謬のあり得べきものなりとの意に止まらず亦た彼れの現實に誤謬に陥れりと斷言するにあり。左れば我等の主にして若し申命紀の記者及び眞性質に就て自ら無罪なりと信じ給ひしならば實にや我等は彼れを以て己れの知らざる處の問題に關し漫りに權威を以て語りて通常異教的正眞の標準以下にすら落ち給ひしものとしも斷定するを得ん然れども事實は之れに反し、彼れは自ら眞理を教ゆると信ずる處を語り給ひしものなりとは論著の已に認むる處なり、而かし尙ほ事實に於ては彼れは眞理を教へ給ざりしか彼れが知識と信じ給ひし事は管だ之れ世俗的無智の微響に過ぎざりしが、彼れ自らは己が智識に制限あるを少しく感じ給わざりし處の事件に於ても尙ほ彼れの知識實に制限せられてありしが果して然らば彼れは單に知ること乏しかりしのみならず亦た誤りに陥るを免かれざりし者なるか否は首に誤りを免れざるのみならず實際に誤り給ひしものとせざる可らず而して此眞相を若破して彼れを正當の地位に置く事を殊更らに第十九世紀の批評論者の事等として殘し置れしもの言はざるなり。

可らず。安んず夫れ然らん嗚呼安んず然らん。最後審判の日に關する我等の主の自ら無智なりと云ふ言語は之れを以て世の論者の唱ふる所管に智識の制限のみならず亦た自欺の性質を帯ぶるものとなして之れを以て凡う大なる教師としては何等確實の眞理を教ゆるの權利をも全く破壊するに足ると云ふが如き演繹説を支ふるに足らざることは敢て識者を待つて後知らざるなり。

(註)若し此處に一個の人なる教師ありて或一個の問題にしては自ら十分に知る處なしと云ひて之を語る事を肯んぜざりしとするも夫れを以て彼れが他に全く異なる問題に關して自ら其語る處を確證する程に熟知せりとの意を含みて進んで其所信を説ける時に於て我等は尙ほ夫れをしも信ぜずと言ひ得るの理由ある可らず却つて彼れが一個の場合に於て云はざる處あるは以て他の場合に於て言へる處の事を信ずるに足るの理由とこうなる可けれ。左れば本文所謂の如き論者の議論は假りに我等の教主が審判の日を定言し給ひて而して事實は其の謬りなるを示せし時に於てこう始めて有力ならんのみ只其の爾かあらざりしを奈何せんや

且また近年世に現われたるが如き論風に於て、我等の主の不謬を拒む事は單に彼れの智力的權能に關してのみならず又彼れの透徹麗朗なる道徳的感念に關しても亦た不當の判斷を下す所以なりとす然り而して此事たるや我等の主の靈的及び道徳的教師としての權威と彼れが歴史の批評の境に出入する處の問題を處遇し給ひし時の權威との間に劃せられたる區別を滅ぼすものなるが故に更らに注意す可き事なり。即ち或人は曰く我等の主若し後者の問題に於て誤りあるを



免れ給わざりしとするも猶ほ前者の場合に於て彼の本能は徹頭徹尾不謬なりしなり。然りと雖も吾人は敢て疑ふ我等の主若し五經の書を評定するに於て果して誤りに陥り給ひ而して近世の批評家が該書の起原及び成立に關して言ふ處を満足に受け容る可しとせば果して左の區別は存し得るや否や。見よ我等の主は申命記を以て人倫及び對神の義務に干する問題に就て至大の權威ある者の作と爲して之れを引證し給へり。然るに世の批評家は我等に告げて曰く、事實上に於て該書はエレミヤの時代に於ける信神家の偽作たるか然らざるもジョシヤ王の晩年に増長したる多神教を制せんが爲めに一豫言者モーセの名を權威とに籍りて作りたるものなり。而して此憶説の如何に關しては余嘗て一書に於て之れを論じ他にも亦た之れを批評したる人あるを以て敢て茲に論議せず、今は只だ左の如くに云はざれば足れり。曰く此憶説にして嚴密に主張せられんには其影響の及ぶ處皆に我等の主の智力的可謬性のみにあらざるなり。申命記若し果して偽作なりせばイエスは昔に文學史上の一事實に暗かりしのみにあらずして彼れの道德的觀念も亦た惡しかりしと云はざる可らず、何となれば彼れが以て神的權威を有せる大立法者より來りしものと明言し給ひし書籍が若し果して近世論者の云ふが如き後年の偽作にして只た其作者が書の効力を害するを恐れて其偽作たるを掩ひたるものなりしとは然る時はイエスの智力的及び道德的觀念は單に事の顛末真理の一論を見誤りたるのみとは云ふ可らざるなり。思ひ起す第九世紀の中葉に於てブシユドイミドリアン律書がアルプス山を越へて始めて羅馬に持來さるゝに方り法王ニコラス一世は當時方さに勢ひを張りつゝありし羅馬法座の要求權を辨護せん爲めにレームスのビルクメルの訴へに答へて直ちに此律書を引用せり。此事件に關し

ては我等は此法王を以て或は羅馬教會の著述者等が一人として辯護するを欲せざるが如き偽作書を看破するの力なかりしものと爲すか然らずんば即ち教權上直接の目的を達せんが爲めに自らは近時の偽作なりと知りたる文書をば恰も古昔の正確なる權威より成りたるもの如くに引用せしものと想像せざる可らず而して前者の想像は尤も能く基督教的徳義の眞情に適するものなること疑ひなし、然れども亦た之れ法王ニコラス一世の不謬力を信するに重大の妨げたる事と論を俟たず。福音史の議論に於ても亦た此の如し、五經に關する不幸なる理論若し果して信實に採用せらるるとせば恰も右と同様の説難は吾人の前に横らん、抑も此問題の關する處は單にキリストの智識は制限せられてありや。否やとの事に止まらず先づ以て彼れは果して眞實ならず、而して彼れよりも更らに善き道德心の人其偽りなる事を看破し得たらんが如き事を教へたりしや否やと問はざる可らず語を換へて之れを言へば彼れは歴史的真理の教師たらざるを全時に亦た宗教的真理の教師にもあり能わずと言はざる可らず。何とならば即ち凡う智力的の判斷力と等しく亦た道德的判斷力をも兼ね要するが如き事件に對しては歴史的真理の若しくは古文學的事實の批評的判斷と靈性的及び道德的眞理の判斷力とを區別する事は到底得可らざればなり、かるが故に我等は只た我等の主イエスキリストの道德的并に智力的の不謬を信するか然らずんば即ち世の批評家の破壊説に全く服するの外道なからんとす。請ふ見よ我等の主が教へ給ひし靈性的眞理即ち世の論者が依然として彼れの權威を認むる處の事と歴史的真理即ち人々が動もすれば彼れの權威を捨て去らんとする處の事との間に正確の區別を容るゝに由なきは我等の主自身の言語に徴して之れを知る見ずや主は己れの教訓の卑近な



る部分を受くるはやがて其高尚なる信仰に入るの門なりと云ひ給ひしことを、即ち宣はく「若し我等地の事を言はん汝等信ぜずば我れ天の事を語るも汝等如何ぞ信せんや」と(約翰三章十二節)實に然り、我等もしモーセ書冊の全體に於て將た其細目たる奇跡的事件に於て自己の權威の承認を與へ給ふイエスを以て單に野蠻時代の癡冗と知らず、繰返せる一個無教育のユダヤ人となしたるならば如何でか彼れか神の品性若しくは新生の希望若しくは無終世界の實在及び性質を示し玉ふ處の事を確信するを得んや。斯くても尙彼れは我等の爲に死生を以て追隨す可きの權能者となす事を得るか。但し人或は云はん後者の如き問題に關しては我良心は能くイエスの教の眞なるを保證するなりと、若し果して然るか然らば即ち之れ良心を以て窮竟唯一の教師となすにあらずや如此んば人の良心は能くキリストの教を或は豫期す或は棄却するを得るものと云はざる可らず、然ども尙ほ人の良心キリストの教を受くるに於て、安んず自ら誤れるなきを保ずることを得んや、斯くて、人はキリストの教義の道德的諸要素を吟味して自ら保證的力能を振ひ或は此れを是とし彼れを非とし、而して來世無終の禍福に關する最も慈悲深き天啓に至りては奇怪なる地獄説となして之れを捨て去らんとす、爰々としてこれ始からずや、語を寄す兄弟よ不信に陥るは極めて容易の事なり、信仰の生涯に於ては又た道德の生涯に於けるが如く滅びに至るの廣き大道あり、人一度び之れに踏み入らんか其果ては只だ迷ひあるのみ。我等の主の人としての智力に於て智識の制限ありしことを示せる只だ一個の事實あればとて強ちに之れを根據となして彼れの不謬權を拒まんとするは單に益なきのみに止まらず抑も是れ彼れの眞實なる神性に於ける恭しき信仰と相容れざるものなり、我等が信仰の常識は堅く自ら保證

す、曰くキリスト若し眞に神たりしならば彼れの不謬はまた自然の事のみと苟しくもイエス、キリストを神なりと信ずるものは亦た彼れの一言一行の確實なる事を信ぜざること能はず、而して苟くも彼れの最上權威を以て認可せられたる處の事は之れに關して被造者たる我等の輕々たる非難危うげなる評定を容る可きにあらざるなり

(ト)キリストの神性教義は彼れが眞理の教師としての不謬なるを示せるが如く亦是れ十字架に於ける彼の苦しみと死との眞意義を非常の明光を以て照らす所以のものなり。按ずるに我等の主の地上生活中の各事件及び各程度に關しては人々が彼れの身位に就て信仰の程度を異にするに従つて其要義も又た異ならざるを得ず。例へば世の單人論者に取りては、其最も多く興味ある處は専らキリストの宣敎事業にして、彼れは之れを以てイエスの人たる品性及び道德的敎訓の最大例解を供するものとして重んず、彼れ等の爲には我等の主の此人性に入り來り亦た離れ去り給ひし事件の周圍に集れる諸奇跡の如きは、甚だ些少なる事柄として、甚だしきに至つては後世の傳説的發明力を示すに足るものとして背地に投げ去らる。但し彼等と雖もキリストの誕生に關し幾分の歴史及び年代的價值を附するものなきにあらず、又た彼れの復活をも歴史的事件として承認せる單人論者の如きは甚だ豊富なる證據上の意義を之れに附するもの則ち是れなり、例へばブリストレー及び前代のソシナス宗徒の如き擧げて此事實を認めたるものゝ如し然りと雖も此種の論者に取りてはキリストの死は彼れの復活よりも更らに重きを置く可きの事件たり彼等の見る處に依ればキリストの死は則ち彼れの道德的實踐躬行の存する處にしてこれ一個の英雄が眞理の爲めに身を効したる頂巔の事件たり、一個の人たる教師が己れの敎訓



に對して捺せる處の最確の印證なればなり。斯くして單人論者は死したるキリストが世界の道徳的生活の蓄積を豊かにする事に依りて、將た萬世人類の爲めに最上献身の範例を示す事に依りて、世を救ふに足ると承認す然れども之れを専ら事實上よりしてはイエスの死には單人論者に取りて普通人間の死と何の異なる不思議でもある事なく、彼れの十字架上の死は單に彼の山上の垂訓に對する實踐的註脚に過ぎざるものと見做さる。かるが故にソシナス主義の廻禮者に對しては垂訓の山中カリヤの湖畔はマリヤが産聲に臥したるも更に多くの尊敬注意に値ひするものならずんばあらじ。

若し夫れ是れに反し我等の主の神なる事を恭しく信ずるものに取りては彼の地上生活中の諸事件に對する觀念大に上述の如きものと趣を異にせざる可らず、是れ強ち完全なる人たるキリストの生涯及び教訓が其徒の心中に惹き起す所の最大不可抗なる道徳的興味に冷淡なるが爲め然るにあらざらず、却て該生涯及び該教訓が彼等の爲めに有する消息の意味深きは單人論者輩の得て窺ふ處にあらざらず何となれば凡う信ずる者に取りてはイエスに於て住み且つ語り給ふ者は即ち神なりと知ればなり乍併人苟くもイエスを以て神の受肉降世したるものと信ずるや勢ひ其注目は専ら我等の主の地上生活中に於て彼の神にして無始無終なる性質を人として抑遜自謙の有様を最も明らかに對觀するに足る處の諸點に向つて引かれざる可らず。

然り而して此着目點は信ずる者の方よりイエスの生涯に向つて呈する處の思念と信心の態度に應じて反映せらる、之を發表するもの信經即ち是れなり夫れ信經は有信者全體の思想を發表す之れ神の獨生子、父と同一體なる者我等人類の爲め亦た我等を救はんが爲めに天より下り人と

なれりし事を唱へたる後ち更に進んで彼れの磔死苦痛埋葬復活及び昇天を語る、信經は彼れの道徳的摸範若しくは彼れの教義の性質及び細目に就て一言の及べるものなし。信經と同じく嘆願文に於ても亦た一統教會の信心を發表す、此文に於ても亦た我等の主は彼れの地上出現中の累々相次げる奇跡に依りて我等を救ひ玉ふものと稱せらる即ち彼れの人となり給ひし與義の上には彼れの降誕割禮洗禮斷食誘惑及び憂愁血の汗十字架と其苦しみ尊とき死と埋葬榮光なる復活と昇天の事を唱ふ而して茲にも亦た一言の彼れの無罪なる摸範若しくは權能の言語に及べるものなし。是れ何が故に然るか他なし教會の思想主としてイエスの神性に集注せるが故にあらずして何ぞや、若し夫れ彼の教訓及び摸範に至りては固より彼の神性を豫期すとは雖も尙ほ多くの點に於て其の我儕に訴ふる力に至りては必ずしも彼の神性を須て而して後に生ずるものに非ず、然るに之れに異なりて彼れの世に生れ給ひし事や、諸多の苦しみに會ひ給ひし事、彼れの死や復活や昇天の事に至ては縦へ全く然らざるにもせよ、重にこれ彼れの身位は神なりとの事實に依りて立つものなり、此等地上的出現の諸事件は彼れの神性の眞理を俟つて其意義を明らかにす、若し之を離れては是れ等の事件は彼れの摸範の美麗彼れの徳教の公明なるに比して其光彩赫々燦然たらざるを得ず單に人なるものゝ生死否を復活及び受榮すらもそれを彼れの觀念の範圍及び勢力彼れの行動の節操及び効果其當時の人類に及ぼせる道徳的及び智力的關係の興味深大なるに比しては只た之れ次第等附加の事件ならんのみ。然れども若し茲に人として生れ苦しみ死し、甦り、而して天に昇りし處の彼れは、身位的に、且つ讀んで字の如くに、神なりとの事一度び知らるゝに及んでは我等の思想及び信心の興味は直ちに進んで彼れの神たる



この奥義が最も直接に目つ最も剴切に感ぜらるゝの點に向ふことは勢ひ自然の數にして、キリスト教徒の信心は自ら此の無限全能の神の自現中に於ける最も大切なる時期、即ち由て以て神の無限の慈愛たる謙遜が彼れの神たり無始無終の身位たる尊嚴と相照して最も剴切に知らるゝの點に向つて注がざるを得ざればなり。何人と雖も單に一個の哲學者の智力的戰勝の跡を討ね得たる時には最早彼れの生地若しくは墳墓を必らずしも訪はんと欲せざるなる可し、然れども古往今來の教會に於ける基督教の巡拜者は之れと趣きを異にして、専ら其足を向くるの處はカリラヤの湖畔山麓よりは寧ろ彼等の神たり救主たる者が始めて人生の空氣を呼吸し給ひたる處もしくは恥辱なる十字架の上に其血を漉き給ひたる處の古跡なりとす

請ふ暫く想像を驅つて、我等の主の傳記が慶福なる傳福者の爲めに書かれずして、近世の或るソシナス主義若しくは單人主義の記者の爲めに書かれたりと假定せよ、彼れの傳記の各部分は必ずや我等が新約聖書に於て發見する所とは大に其注目を異にせざらんばあらじ、即ち斯る人々の記す可き傳記に於てはキリストは道德的に偉大なる事を盛んに講解演述して専ら之れを人類の個人的及び社界的生活に對する種々の關係に於て示すならん、而してキリストの出所若しくは靈界に於ける地位如何と云ふの問題の如きは、彼れの教訓の重大なるに比しては全く顔色なきものとせらるゝならん、勿論彼れの死は彼が當年に於ける人類の大弊害及び悖賊と勇ましく戰ひたる自然の結果として或は示さるゝならん然れども此の團圓は極めて多々に終結せらるゝならん、此の種近世の記者は或は我等を導びきてガリバリ山の麓に至らしめん、而して其上の事は只た我等の想像力に一任し單に一二行を以て約め記すならん、彼等は努めて此悲劇の

有形的方面に重きを置くの觀を避くるならん、即ち該受苦者の精神及び身體の許多の痛苦を表せる嘲算虐待罵詈の叫び等を録する事を厭ひ、而して云ふならん如斯き記事の重きを置くは徒らに人の感情を刺激し且つ讀者をして主要なる一般道德上の事柄に對して起さしむ可き注目を引きて之れを比較的輕微の事なるイエスの死に注がしむるの恐れありと、兎に角に斯る記傳者の筆法は傳福音者等の筆法の同一ならざるを必然なり。四個の福音記者は全く之れに反して其記傳の方針及び材料に就いて互に多く趣きを異にせる點あるに干はず、常にキリストの苦しみは大體の物語のみといはず亦た其の些細の廉々に對しても非常に重きを置けるとは其揆成な一なりとす、而して此點に於ては聖馬可及び聖路加の才能は聖馬太に比して更らに相符合せる處あり、若し夫れ我儕第四福音書の主意及び目的を考ふる時は聖約翰に於て此事最も著る蓋し聖約翰は受肉降生の「道」の自抑謙遜の事實を決して掩ふ事を爲さず却つて之れを以て「道」の榮光を發輝せるものと見做せばなりさればこゝ各四個の福音的物語は皆な其初部分に於ては幾分か簡畧なるにも拘らず記して十字架の下に近づくに隨つて次第に擴がりて詳細微密なる日記録たるの觀を呈す、

如此く四個福音記者に揆一の趣きあるとは蓋し重要なる事故の存する所以なり、即ち是れ彼等の至強なる關心が常に全體としてのキリストの死に引かれたるのみならず、亦た其大苦難の各程度各模様に對して痛たく興味を引かれたるに由らざるはあらじ、且つ此事や彼等の關心單に道德的人間的の意味のものには止らで更らに高調なる種類のものなるを知るに足る、若し夫れ歴史上道德的の需要のみならず、單にキリストは其教へたる道德的眞理を實踐躬行せし爲めに



遂に其命を失へりと記るるれば即ち足れりしならん、然るに事茲に出でずしてキリストの精神及び身體上の苦難の層に相尋で至れる程度及び模様を詳細に列擧する事は熱識なるキリスト信徒をして識らず此の侮辱せられたる苦難者の純潔尊嚴なる無始無終の身位を以てして尙ほ且つ此の如きの苦難を受け給ふ事の裏面には必らずや深き仔細の在て存するを思はしめずんばあらじ、斯してキリスト教徒の思想は次第に強烈なる觀念を以て此の奇絶妙絶の事件なるキリストの死の可能的若しくは盖有的結果如何を考ふるに至る。

蓋し如此き問題に關しては我等人間の理性は自ら何の解答をも發見する事能はず、嘗だキリストの死に於ては人中の最良なるものゝ死に於けるよりも更らに多くの意義を含まざる可らずと信じ得るのみ縦へキリストをして單に人ならしむるも必ず彼れの死の結果は人中の愛を大ならしめ、眞理に對するの熱心を大ひならしめ、道徳的教訓の最大なるもの并に宇宙の父たるものと聖旨に對する忠勤を大ひならしめ、快樂が本分と衝突するの時及び痛苦が良心の勤むる處たる時に於て之れを輕んずるの念を大ひならしめたるならん。抑も如此きの結果は大凡そ人間の誠心なる自捐の行爲より其度に隨つて必らず生じ來る處のものなり、而して神の道徳的王國は聖徳なる話紀念の大寶庫にして其内に於ける最高名譽の地位は常に最も實全に己れを犠牲としたる人々に歸せらる、否を苟くも犠牲の献身の行爲は最少最下のもので雖も決して滅する事なく後世百代を通じて不死の力を有し、道徳世界の各員の心中に時々新らたなる熱心を起し、眞理、本分、同儕及び神に仕ふるの念を爲くす、是れ固より疑ひなきの處とす。然りと雖も我等はもしイエス、キリストの神なる事を知る時は彼れの死の結果は何等強烈亘久なる道徳的衝動

力よりも更らに絶大なるものあらん事を期す、即ち今の何たるやは我等之を知らずと雖も、必らずや歴史の範域及び法則を超越し感能及び時間の境に卓絶し、自然の効果及び人より人時より時に傳與せらるゝ顯明若しくは隱密の勢力の如きよりは更らに以上のものならん事を期するなり。

凡そ人をしてキリストの神性の話麗々たる勢力を感せしむるを此の死の事實及び結果に於てよりも更に剴切なるはあらず。人若し此の十字架に死し給ひし者は眞に神なりとの絶大なる事實を眞面目先づ確信するときは、彼の死の効果に就ての有らゆる説明は、苟も適當の馮據にあらば、進んで之を受容するに躊躇せざるなり。

されはこつフリーカーは曰へり、「彼の處女より生れたるものは神の御子に外ならず、彼の洗禮を受け罪せられ十字架に磔せられたる者も亦た神の御子に外ならずるなり、これぞ基督教信仰の唯一の要點にして、凡そキリストが我儕の生命及び救贖の爲めに爲し又た苦み給ひたる所の事に關して我儕の信すべき大本は即ち神の御子は此無限の功蹟に在て存す」と。監督アンドレスは曰へり、「此犠牲をして至貴の價値あらしむる所以は他なし之を獻げ給ふ所の彼が神なるに由るなり」と。ホルサレムのシリルは曰へり「縦へ全世界は彼に由て晴はれたり云ふとも驚くと勿れろは我儕の爲めに死し給ひし者は單に人間にあらずして神の獨生子なればなり」と。アレキサンデリアの聖シリルも亦た曰へり「キリスト若し神の御子神よりの神に非ずして、唯だ一個の彼造者にてをばさんには、彼の犠牲としての價値は全被造物に匹敵せず、彼の獻くる所は以て全世界を贖ふに足らず、其の我儕の爲めに棄てたる所の生命と流したる所の寶血も未だ價



には當らざりしならん」と。

彼の聖保羅の言に「なんぢら贖はれて先祖より傳りたる徒き行より離れしは銀や金の如き壞る物に由るに非ず、疵なき汚なき美の如きキリストの寶血に由ることを知る」(彼得前書一章十八、十九節)と曰へるも亦た此意味に外ならず。聖保羅が希伯來書第九、章十三、四、五、節に於て、羊牘の血と瑕なくして己を神に獻け給ひたるキリストの血を比較して論ぜるの主意も亦た茲に在て存す。聖約翰も亦た此事を骨子と爲して言ひけらん「神の子イエスキリストの血凡ての罪より我儕を潔む」と。若し夫れ此の十字架に懸り給しとイエスキリストは神なりとの顯明なる教義を離れん乎彼の死の效果に關する新約聖書の解説は何に皇張誇大なるべきや彼所には言はずや、キリストは道德上及び靈性と奴隸の境過より人類を贖へり(馬太傳二十章二十八節、哥林多前書一章二十節節以弗所書一章七、十四節、四章四節五節)キリストは我儕の罪の爲めに挽回の祭物なり(約翰第一書二章一節、四章十節、伯來書二章十七節以弗所書二節、希伯來書十章十二節。哥林多前書五章七節、三十三節。彼得前書一章十九節點示錄五章六、八、十二、十三、節彼は現在に神と其彼造者とを復和し給へり羅馬書五章十節と哥林多傳書五章十八、十九、節)と。然れども若しこれか爲めに拂はれたるものが無限に高價なるに非らざりせば、焉ぞ斯る救贖を爲すとを得んや、若しこれを獻ぐる所の者の眞價が克く無限の愛よりして完全の正義に行き渡るの祭物たるを得るに非んば如何にしてか斯る挽回を爲すことを得んや。神と人類との眞の復和を若し之を行ふ者が眞に仲保者たる本來の資格あり能く神に對して人を代表すると同時に亦た人に對して神を代表するにかあるに非んば何ぞ之

を爲し遂ぐるを得んや。彼にして若し自ら神に非んば。焉ぞ彼は神の榮光と人類の慘狀とを交換し且つ其の慘憺たる人類を擧げて神と偕ならしむるを得んや。嗚呼兄弟よキリストにして若し神のあらざれば氣息奄々たる罪人が感謝を以て其胞に緊懷せる救贖の約束も忽地に空漠たる一種の猶太思想となり風の如く雲の如きの迷忘と爲り了せんすとす、若し果して然らば我儕が新約聖書に於て發見する所のものは既に神なる救主即ち彼に由て神に來る所の人々を窺極に救ふことを得給ふ者の無盡の複徳無限の慈愛にはあらずして唯だイエスの無教育なる若くは極めて淺學なる追隨者の粗笨頑強なる僻見に過ぎざらんのみ。若し夫れ是れに反してイエスは神の獨生子の此世に遣されたるもの彼に由て神の愛は我儕に顯され我は彼を通じて生命を得ると一朝確實なるに至ては、然る時は則ち彼の死の效驗に關する聖書中の説示は決して過大なるものにあらず、彼の死に由りて罪人の世界は贖はれて神に復和せりとの結論は縱ひ如何に絶大のものなるにもせよ、其の十字架に死せしイエスは即ち眞の神なりとの前提優に以て其の結論を證明し得て餘りあるなり、而してイエスの苦死に伴ひ起りたる諸事件は之を教會の信仰よりしては當然爾かある可きことたり、借問す彼の時に當り何故に天は暗くなりしか、何故に神殿の幕は自ら裂けたるか、何故に岩石は自然に破碎して既に眠りたる諸聖徒の體は死の境より生者の都に歸りたるか自然界にして若し心あらば必ずや答へて、これ我が主十字架に懸り給ひたるが故なりと言はん。然れども此の十字架の前に自然力の服事したる大事變も、之を彼が等しく人間の言語を以て發し給ひし願求及び約束即ち自然界の事變は唯だ其可視的徴候たるに過ぎざる所のものに比べては殆んど言ふに足らざるなりイエスが盜賊をして惡心を翻へさしめ、其



周囲の岩石土よりも尙ほ頑き精神を曳きて己れに來らしむるの力を有て而して「爾今日我を借に樂園にある可し」との約束を以て之を賞し給ひしは、決して彼れが死より甦り給ひし時にあらず、海と風とを叱咤して之を鎮壓し給ひし時にあらず、亦た惡鬼を驅逐し給ひし時にあらずして却て十字架上に磔せられ釘を以て貫ぬかれ唾せられ嘲けられ責め罵られ辱められ給ひし時あるなり。實に此か約束たるや彼の救贖の權能の深さ高さを現はせるものにして彼の神性の光の閃めき出でし其の人としての謙遜の眞意義を照らし明らめたるものなり。かるが故に我儕は彼を神なりを信するときは我儕は一方に於て彼の死の効果に關し使徒等の教ゆる所を故懸すると共に亦た彼の十字架を以て無限の神機密を表せるものと爲して其の前に俯伏す、若し夫れ此等の効果を思考して尙ほ且つ機干の難問題を解くに惑ふことあらんか我儕は須らく此の深遠無極の大經綸の一端を揣摩し得るに過ぎざることを思ひ而して見ゆる所のことば早晩必ず見へざる所に由りて解明せらるる日あるを期す可きなりさはさり乍ら苟くも此の救贖者を神なりと知るときには我儕は決して彼の救贖的慈愛の巨大なるに驚くを要せず平然として聖保羅と共に言ふことを得可く、曰く「己の子を惜すして我儕衆ての爲めに之をせる者は豈かれに向つて萬物をも我儕に賜はさらん乎」と。

我儕の主の神性の眞理現は、彼の死の全世界を贖ふ力なることを明に保證するが如くに、亦た基督教徒の聖奠を以て超自然的恩恵の現實なる何路と爲すの教義をも説明し保證するものなり。

夫れ「エスキリストの神なるを否定する人々に取りては、聖禮奠の如きは單に社交的協同の

表號たるに過ぎざるは亦た是非もなきことにして、彼等は謂へらく一の聖奠は唯だ由て以て人の基督教徒たる者と然らざる者とを識別する所以の記標たり、他の聖奠は最も善くとも唯だ、基督教徒たるものが當さに相互間に致す可き愛の外徴たるに過ぎずと、(以上聖奠の教義に關しては英國聖公會大綱第二十七條二十八條を参照すべし)斯る人々の爲めには聖奠は全然人爲的のものとして視做され、神は聖奠に於て何たる人に與ふるとなく、彼は聖奠と何の特別なる關係も無く、而して聖奠は、往昔死去したる一教師を紀念するに由りて人をして或は若干の道德的觀念を催さしむることを得可き純ら形而下的の義式に過ぎず、其効力としては單だ其の一教師の名の人類に忘却せらるることを防ぐに止まり、斯くして其達する用は唯だ一片の公紀念碑若くは或る一協會の會員たることを示すの徽章とては或る歴史上の英雄の名を表彰する爲めに設けられたる年祭の如きものと何の撰ふ所もなく而して其道德的効力の點に於ては善美なる肖像若しくは畫影にだも及ばざるものと云はざるを得ず、何となれば單に外表的なる一儀式は人をして其の古大人の品性を追想せしめ道德的同情を催さしむる力に於てかの石面や色彩や若くは彫刻の線織を以て其の秀貌英風を巧みに描出せるものに比すれば及ばざると萬々なる可ければなり夫れ斯くも専ら歴史的なる用を辨なるに止れる禮式は決して星霜の遷ると共に人の感情及び聯想の上に生じ來る變化に堪へ得るものにあらず、人々は次第に更に能く己が嗜好に投合す可き他の方法を以て其目的者を紀念せんと欲せん、彼等は此一定の紀念式が縦ひ基督教の創立者の命ずる所なるにもせよ、何等道德的の義務を以て彼等を強ゆるがあるを許さざらん、而して終には斯る紀念式を全く等閑にすとも何の妨る所なしと決定するに至る可きなり。



ンシナス若くはツウイングリーの徒が聖奠會對するの評定若しキリストの教會の主趣なりしならんには、聖奠は必ずや夙への者に於て無用の虚式とぬして既に放棄せられしならん、然れども教會は之に反して古來、毎に聖奠に於て單に人間の嗜好若しくは想像力に訴へたる外表のみならず將た（カルビン流の論者が主張せし如く）是れに由らで受くる恩恵の徴したる表號のみにもあらず、キリストの約束と言語との力を應じて其の表する所の効驗を實に有するものなることを見たり、聖奠は即ち神の我儕に對する恩恵と好意の實効ある徵表にして、神は之に依て我儕の裏に見へざる業をなし給ふものなり（大綱第二十五條）さればこゝ法禮に於て基督教の子女はキリストの肢、神の子天國の嗣子にせられ（公會問答）主の晚餐に於てキリストの肉と血は信する者の確實に與り享くる所とはなるなり（公會問答）

基督教の聖奠實効驗力を斯く高大深玄なる意義を以て味ふことは、受肉降世のキリストの神性を信することゝ相密着して離す可らず、キリストが由て以て聖奠を創め且つ之を説明し給ひし言語には之れを語れる者の神性を信するに否に隨つて自ら異なる意義を附せざるを得ず、人若し之を語れる者を以て單に人間と爲さんか、然るときは亦た被を以て徒らに自慢無思慮の愚言を吐きし者と爲さんらんが爲に、其言語に極めて亂暴なる解釋法を取て自然的及び皮義的の意味を悉く傾け去らざるを得ず斯る解釋法にして一般に適用せんか凡う救贖のこと若くは基督教神性のことは擧て破壊せられしんとす若し夫れ之に反してキリストを以て實に神の無始無終の子と信ぜんか然らば則ち彼れが世の終に至るまで彼の教會に於て、彼の生命を與ふるの力ある人性との交通を約し給ひし所の言語は、其の最も簡單明白なる自然的意義を以て立つことを

得可し、斯るときは、洗禮は實に更生の潔祭盤たる可し、聖餐禮は實に受肉降世のイエスの體と血の交通たる可きなり（提太書三章五節及び哥材多前書十章十六節）我儕若し眼をキリストの現實神性の上に定めて彼が由て以て聖奠を立て給ひし所（馬太傳二十九章十九節、同二十六章二十六節）更に亦た一層明白人之を説明し給ひし所の森玄重要な文意（約傳三章五節、六章五十三節以下）を町重に吟味するときは、凡そ限なき生命を與り享くる人々はキリストを以て軒を爲せる所の生ける葡萄樹の枝たらざる可らずとの割切なる教義（約翰傳十五章一節以下）を能く能く考料するならば、又た彼の使徒の宣言する所「我等は彼が身の肢なり彼が肉より出でかれが骨より出てたり」（以弗所書六章三十節）の言を誠心もて聽くときは然るときは則ち「凡そバプテスマを受けてキリストに入れる爾曹」はキリストを衣たる者なり（加拉太三章二十七節）若くは我儕の爲めに與へられたるイエスキリストの身體は——聖奠的に之を受くれば——我儕の身體と靈魂を無限生に至るまで守り給はん（聖餐式文）とのとは、縦ひ如何に我儕の自然的理性の對度力に全く超絶し専ら信仰の大原則に支配せらるゝの事柄なりと雖も決して疑はしきのこととは見へざるなり。苟くも我儕の主の神性を信するの眼を以てしては彼の使徒等が斷へず洗禮の盤の邊り聖餐の棹の傍らに、ありし昔を忍びつゝ繰り返しかる此等至重至大の言語を以て無義無實の空式と視做す能はざるは、尙ほ十字架上に神の靈を以て劇まれたる最要最貴の希望及び約束を等閑に「視する能はざるが如し」。キリストノ神性は彼の贖罪の血の潔拭力を眞實に保證するか如く亦た聖奠の恩恵の眞實在を保證す。キリストの神性を信する以上は我儕は罪の爲す捧けられたる彼の大犠牲を以て單に道德的一摸範とは視做す能はざるが如く、亦た



此神救主の設定に係る大聖式の意義を貶して之をす律法の死儀文とは爲すと能はざるなり、而してこれと同一に聖奠翁恩惠の實在を信ずるとは、また眞神なるキリストに於ける信仰を保護す、聖奠は、若し全く之を信するに於ては、基督教徒の敬慮心及び常の生活の爲めに外廓を供し、以て其主の特權及び尊嚴を必然に且つ熱心に護衛するの功あるものなり。

然るに若し之に反して聖奠の意義を輕視するときは隨て亦た我儕の主の無窮の身位を輕視するに至るは歴史と争ふ可らざるの事實なり尤も世には聖奠の恩惠の實在を否定しつゝ尙ほ克く熱心に我儕の主の神性を信するの人無きにもあらず、然れども經驗上よりして、言ふときは、これらは只たにして、久しきに堪ゆるものにあらずと明なり、聖神に對して、縦ひ不完全乍らも、一時の現象ツウイングリの乾燥なる自然論よりは遙かに眞理に近き信仰を有する人にあり、次第に單人説に走るの傾向あるとは由來歴史の證明する所なり、英國に於て第十七世紀中に教會より離れ去れし人々に由て建てられたる長老派の會象は次の第十八世紀の間に多くはリウス派若くはソシナス派の爲に吞派せられたり而してアルツマン派の講壇及び教會座は悲ひ哉該派の神學の積極的要素よりも寧ろテコヴァン問答者の主意に更に多くの同情を有せる人々の占むる所とはなれり。夫れ斯の如く凡う一主義の發起點と終局點との間には縦ひ數百年の間隙ありとも、人間精神の動きて休むと無きや何時しか必ず其主義の適用を最極度にまで押し進めずんば息むと能はざるなり、されば我儕にして若し聖奠を以て單に逝きて復た在ると無きキリストの紀念式のみと視做さんか然るときは我儕は既に斯る虛式に由りて世に無き者にして紀念せらるゝ所のキリスト彼自身は單に人なるのみと信するの道にありと言はざる可らず。若しキリス

トにして神に非りせば、然らば則ち、彼の人格より流れ出づる所の恩惠の价路として聖奠の効驗を信するが如きは蓋し妄想の極ならざる可らず、聖奠にして若し彼の恩惠の价路にあらざりせば然るときはこれかの一大革新の時期即ち猶太宗教の死儀文及び無益の陰影を棄却し照破して凡ての制度を天來の生命の力に應じて確立したる所の時期に於て、何等正當の地位を占むることを示すは蓋し難かしんとす。聖奠といふか如き制度が福音といふか如き宗教の中に於て分法とせらるゝの事は頗て其の現實の効驗あるものなるを察あるに足れり、即ち聖奠の効驗は其創立者の神性に由來せるものなり、該効驗は單に人々をして遠き古への事件を再び記憶に新たならしむる而已にはあらで、實にこれ一個現在靈話の救主と結示するに由りて、其基督教徒の余力を話發ならしむ、聖奠は我儕に保證して曰ふ曰くナザレのイエスが今我儕に對してあり給ふとは恰も一千八百年以前其の第一の徒弟等に對してあり給ひたるか如しとまた聖奠に我儕をして知り且つ感せしむ、曰く、キリストは昨日も今日も永遠も彼の仁慈なるに於て變るとなし、何となれば彼自ら變ると無き神にて在ますに由るとか。之を要するに聖奠の指す所はキリスト神の性教義にあり、而して此教義はまた此の聖奠の意義を照らして、承へに其の力を失墜すると無かふしむ。

(d)我儕の主の神性は由て以て彼の祭司職如何てふ問題を照らし明らむるとは必ずしも之を茲に詳論するの要無からん、唯だ我儕は知る彼の約束及び靈約我臨は、果敢なき人間の言語及び粗造なる物質を彼の王國中に取り揚げて之に與るに其の自らが有せざる所の力を以てして、之を彼の仁慈の倫路と爲し給ふとを。其れ斯の如く天に於ても亦た、彼の仲保力をして爾かく普及の



感あらしむる所以のものは即ち彼の神性なりとす。彼が天に於て自らを頼りて自らを頼るを頼てこれ彼が仲保を爲し給ふ所以なり、彼は神の聖所の前に俯伏せる希願者の如くには在まらず、實に其實座上に座せる一個の祭司たるなり。爾のみならず、我儕は彼の王者たる職と彼の神性との關係に關しても亦た敢て長論を須ゆるの要なし、唯た彼れが無限の權能を以て天地を主治し給ふこの事實頼て我儕を確信せしむ凡ての有道的生物は、其の合意に出づるを檢束に由るとに論なく、終には心ならず皆を彼の足下に置かる可きとを、(哥材多前書十五章二十五節。布伯來書二章八節)但しこれ極めて意義深玄に興味深き問題なりと雖も、時間の制限は予をして之を長論するを許さず、且つ此の明確なる推密に對しては現今差し當り異論者も非るが故に、予は寧ろ前段の論議中に於て人をして心中に起さしめらんが如き買議を聊か考究する所あらんとす。

## 第三

人あり或は曰はん、キリストの神性教義は以て基督教信經中の他の諸教義の意味を照らし且つ基督教會がりの立てたる聖餐に附せる要義を説明するに足るとのとは吾人其意を諒す然れども吾人の心は寧ろ斯教の道德に重きを置くものなり、而してキリスト神性の意義は單に人類の道德的生法を奨励せざるのみならず、亦た人類の道德的原義に對する有力の感念を奪ひ去るの虞あるを奈何せんや、然るに之を撰を異にして、單人論者のキリストは人間世界の道德の藏庫中に於ける最貴重の資産たり、即ち彼は宗全無缺の人なり、而して人類は其同儕たる一人が爲したる生涯を實際に摸るとを得然れども若しキリストは神なりとのとを主張せらるゝに於ては彼

が人類の道德的模範としての價値は既に失はるゝものと云はざる可らず、凡う模範とは或る意味に於ては之に摸はんと欲する者共と事のものならざる可らず、模範にして若し之に倣ふ人々を周れる事情境遇と全く異なる境遇の者ならん乎、到底これ他か正當に由なきものと言はざる可らずかるが故にキリスト神性の教義は縦へ耶斯教の他の諸教義を照らし且つ保持するに足るとするも、其結果たるや吾人の判する所に依れば凡ての實際的の利益を價として買ばざる可らず、爰ずりれ單に人なる牧主の遙に摸倣し易くして人類の直接道德的の必須に更に能く恰當するの優れるに如かんや、蓋し人間は要するに通情(sympathy)(若くは常識)の兒なり、彼等は苟くも一個重要なことを爲さんと欲するに方りて之に従事するの前に方り、先づ以て自己は到底不可行のことを企てつゝあるにあらざるやを適當に確めんと欲する者なればなりと。

(一) 情ら按ずるに、此論者の異義たる要するに一種抽象的(先天的)のものなり。此異議はキリスト若し神ならば彼の人生も亦た人間模倣力の及ぼする所ならざる可らずと主張するに誰れか知らん古來最も近く彼に倣ひ得たる人々は即ち最も深く彼の神性を信じたる人々なることを。之を要するに、此異議論者は極めて肝要なる二個の事情を看過せるものなり。

(い) 即ち該異議者は一方に於て我儕の主は正統教會の言語に由れば眞實なる人にして、且我儕の宜しく倣ふ可き所も亦た彼れの性に在ることを忘れたるものゝ如し。夫れ彼の神性は決して神の人性を掩蔽し若くは吞滅して之を亡ぼす者にあらざるなりイエスの屬性は我儕の模倣し能はざる所なるとは固より論を俟たず、彼の無限の智能、不可抗の意思の如きは我儕は唯だ之を崇拜し得るに過ぎざるのみ、然れどもイエスの生涯に於て我儕の倣ひ得可き境域は決して明かな



らざるに非ず、收税吏及び罪人の友として、苦める者の慰藉者にして、乏しき者の扶助者として、イエスキリストは能く我儕の性能に協ひ給へる者なり、我儕は單だ慈善の業の外に部に於るのみならず亦たかの内心に於て彼に模倣することを得、彼の完全なる人性より發射し出る所の温厚柔和堅忍勇爲の性を模倣するを得べし、彼の人たる完性は實に道德的美の圓滿なる理想を成し、我儕道德的模倣者なる者は須臾も眼清を是れより離す可らず、凡う人間生活の真正至高の模範とは何ぞやとのとはイエスキリストの肉體に於ける發現に由て我等基督教徒の爲めに既に決定せられたり、他の人には或は此問題を再びせんと欲するならんも我儕基督教徒の爲めには、これ既に症まれにとたり、定まりて復た動かす可らざるをたるとるなり、且つ夫れキリストの人たる完性は人間以上なるものにあらず、これ神たる性質に由來して我儕の達せんと欲する能はざる如きものにはあらず、これ單に人性とは如何なるものならざる可らざるかを我儕に知らしむる爲めのみにあらず、亦た如何なるものなる可らざるを知らしむるものなり我儕は縦ひ思慮無き乍らに彼に肖るとを得、我儕の不完全なる現状態に於ては圓滿に彼の如くならんとは到底能ふ可らず、然るも尙ほ能ふ可き丈け近くナサレのイエスに似んとは我儕の義務たり且つ特權たるなり。蓋し神は我儕を受くる所并に我儕の爲す所に由りて、彼の憂構なる人たる狀に倣はせんと預じめ之を定む、此は其子を多くの兄弟の中に嫡るたらせんが爲めなり（羅馬書八章二十九節）。

（ろ）眞に該異議者は、他方に於て我儕が斯く我儕の主に倣ふ所以は我儕の衰廢したる性質の力に由るに非ざるを忘れたるものゝ如し、彼等若しペラジアンは自力主義に由りて、キリストの尙狀を我儕の生活に寫し出さんと努むるならば、其盡力や實に徒爲ならんのみ、我儕の性質は業に衰へ己に譲りたるものなるが故に、一個更に高き他の力の入り來りて、我儕の性を其れ自らにてはあり能はざる所に高尙なるものと爲すに非んば自ら其の原との完全なる理想形を實現するを能はずかるが故に我儕はイエスに倣得るの力は即ち彼の靈と恩恵と現臨とに由りてイエスより來るならんイエスキリストは——我儕が彼を拒まざる以上は——今日尙ほ聖保羅の目に於ての如く我儕基督教徒の中に在り給ふ、（哥林多後書十三章五節）我儕の中に働く所は彼の力は決して單に遠き古への記念のみにはあらず、これ決して感情の自然力にもあらず、意志を緊約する自修の力にもあらずして、實に榮光を受けたる我儕の主の活かす靈（生命を與ふる靈）（哥林多後書十五章四十五節）の現臨と伴へる所の靈活々たる感化力に由るものなり、キリストが我儕に「我に隨へ」と命じ給ふは彼自ら我儕をして彼に従ふとを得しむるの力なるが故なり彼が我儕の「我が如くならん」とを欲し給ふは則ち彼が我儕の中に住みて我儕をして彼に有せしめんと欲し給ふに因るなり、若し我儕が凡てのことに於て生長して教會の主長たる彼の如くなるに至らんと彼の嘉し給ふ所（以弗所書四章十五節）なりとせば、其所には則ち彼の生命を與へ且つ之を支ふるの力が實に彼の肢たる者其の一體を通じて眞實に分與し給ふに因るなり（以弗所書一章二十三節同四章十六節）我儕自らは惱めるもの憐むべき者また貧しく裸體なる者なり（點示錄三章十七節）然れども我儕は彼に謀り、彼より火に燬きたる金を買ひ（同上十八節）而して我儕に力を予ふるキリストに因て諸ての事を爲し得るなり（腓立比書四章十三節）凡そ規則正しくキリストに倣はんとその努力をして勞力の空費たらざらしむる所以は



主としてキリストが教會の中に將た基督教徒の精神の中に、靈的に現臨ましますに因る（以弗所書四章十五、二十四節）併し乍ら我儕が斯く模倣する所のキリストは縦へ眞に人なしとするなし又た斯く我儕の中に道德の力を造り且つ之を豊にし給ふ所のキリストは即ち神ならざる可らず、是に由て之を見れば彼の神性は決して彼の人性に由て供せられたる模範の區域を亂だす者ならず却て我儕に供するに完全なる道德者を模倣するに缺く可らざる内力の蓄積を以てして其努力を空しからざらしむる者なりとす。

(二) 謹で思ふに凡う開化したる異教者流が其眞味たも知らず況んや之を造り出すの力をきと萬々たるが如き道義上の善徳を以て人生を富ましめたる所のものは即ち我儕の主の神性に於ける此の信仰に外ならざるなり、我儕若し此大義教の或宗に就一二の事例を思考せば道德界に於ける其の効益の潤澤なるをは更に適切に我れ現はれ來らんとす。

(い) 回顧すれば古への世、希臘の思想最も英敏に、其美術は最も創作に富み、其政治は人間の至高なる天賦力を活動するに便なると未だ曾て其比を見ざるが如きの組織を有したる時に於て、希臘の社會は業に已に、其思想に對し文藝及び自由に對してヘルシヤ若くはサゼドニアの劍戟よりも更に恐る可き無形の敵の爲めに全々貫かれてありしなり。更に首を轉じて之を羅馬國に觀ん乎。其初期帝國の世に於て羅馬は既に衰頹滅落の因たる腹心の病を宿したりき、此時に當り基督教の道德家は早くも之を看破し侃々論して籍かさりしとは、身自ら異教の社會に事へたる記者の明に示せる所たり、國家既に斯の如き病毒を藏す、則ち其民の族の生命を傾け去るの慘なるは彈煙硝雨の慘なるよりも慘に、あらゆる高尚寛大なる努力の爲めに要する國人の

性能、本分の爲に勇ましく苦難に堪ふるの資質即ち國家緩急の干城たる可き徳力の全蓄積は悉く内部よりせる賣節者の爲めに蝕はまれ、壞はされ盡されざるを得ず、當時帝國羅馬の運命は實に斯の如く、其の大邦土の滅裂は敢てライン若はダニューブの戰敗を待て後に決したるに非ず、北夷南蠻未だ此の帝國古文明の境域に臨んで其手羊を牧し始めざるに方て、破滅の業は殆ん既に成り、破壊の力は早く巴に都市に於て殿堂に於て否々皇帝の内寢に於て着々として勝を制してありしなり、嗚呼斯の如く危急存亡の域に臨みて内憂外患の爲めに苦しむに方り、古異教の社會は果して何を力らに倚り頼まんとはするか、彼等は國家權を以て頼と爲すと能はず何となれば皇帝は即ち國家なりければなり、加ふるに皇帝自ら公然として國家最悪の敵の友侶たり愛顧者なりしと唯た一再のみに非ればなり。然れば哲學を以て此難を救けんとする乎、固より哲學は其言語に於て將た其の代表者に於て必ずしも見る可きの無きに非らし、然れども哲學は人の獸慾と戦ひ之に勝たんが爲には其力餘りに薄弱にして、而して實事上に於て屢々其智力的武器を委して放縱者流の用に供せられたるを奈何せんや、然らば則ち宗教自身は如何、其は果して其の異教の儘に、克く防國濟世の要素を供し得なるが其機密其殿堂及び其の神宮は乃て最醜なる淫蕩の特許たり現場たり媒价者たりしを奈何せんや。然り而して此の下等社會の弊愚及び於邊の上に光と愛と輝とを與へんと欲して下されたる制度が、却て其儘に地獄なる此地の道德的暗黒を益甚だしからしめたるの時に方りては、此墮落社會の腐敗忠害は恰も頂點に達したるものゝ如きなり

却説イエスキリストが此弊害に向て戦ひ給ひしとは顯然たる歴史上の事實にして、而して彼の



勝利は縦ひ未だ實際に於て完たからずとも、近世社會の道德標準に於て歴々銘記せられたり、尤も以上述ぶるが如き弊害は未だ基督敎國の境外に全くは驅逐せられず、我儕が社交上の調るや、文學の趣味や、法庭の所置は屢々我儕をしてカナン人未だ此上に在りとの感を引き起さしむ、然れども此カナン人は縦へ未だ我儕の域外に於て逐し了られざるにもせ少くとも彼は尙ほイエスキリストの名を唱ふる所の社會の表面よりは潜伏するの止むを得ざることはなれり、今日我儕の中に於ける最も過激なる懷疑論者雖も、尙ほ且つ古昔ブレトリーの同人等が無論のとして看過したりし如き風俗を敢て辯護せんとするとは世論の爲に許されず、我儕が多慾的な文學の放恣を以てするも、尙ほ且つ社會一般の激烈なる公憤を恐れて之を辯護する能はざるに至りぬ、これ豈イエスキリストが近世の社會に於て其の眞禮拜者等の境圍を越へて遙かに廣く、一の輿論を造り、其の社會か尙ほ未だ全く防過し能はざる道德的弊害を烈しく厭棄し非難するに至らしめ給ひしに由るに非ずして何ぞや勿論此輿論も動もすれば其の眞の造出者及びそれに對して負ふ所を言ひ逃れんと欲するも無きにあらず、即ち自らキリストの徒弟と稱するを憚らずして全く人間の思想に由て作成せられたる獨立の道德論を案出し、之に由て自家が我儕の主に對して負ふ所あるの感も避けんと欲すると稀なりとせず、然れども之を事實としては、凡そ斯の如く國民の公心に於て眞實なるもの恰好なるものは皆なこれ人間の救療者が由て以て數千萬基督敎徒の生徒を美にし給ひたる彼の生ける聖徳の大蓄積より發せる智心的光輝ならざるは無きなり。然り而してイエスは如何にして人を潔からしめ給ひたるか、請ひ問ふ彼は曾て衛生學若くは健康學を盛に講し給ひしとあるか彼は曾て生理世界の法則は亦た生理的刑罰を速く

と無しに之を枉げ之を破るを得ざるを證明し給ひしか、否々斯るとあるなし何となれば彼は能く人間の性質を知り給へり、而して我儕の經驗は由來未だ曾て放縱なる生活の生理的結果を科學的に證明せば以て人間の猛烈なる情慾制止するに足るとの憶説の可なるを示さざればこりキリストは單に彼自身の美麗なる模範のみに由て人を潔くせんとはし給はず、彼は唯だ清徳の燦爛珍瓏たる活理想を人々に示して、之をして耻ぢて動物的の敗徳を惡ましむるのみに止り給はざるなり、これ抑も何が故ぞや、他なし、予は再び云ふイエスキリストは能く我儕人間の性質を知り給へばなりと。彼にして若し單に完全清徳の模範を供し給ひしのみならば、彼は唯だ律法の業を繰り返し給ひしに過ぎざる可し若し然らば、彼は理想を以て我儕に與へ乍ら之を實現するの力を與へ給はざりしものと言はざるべからず、最も善くとも、唯だ我儕が達するに由なき完全の標準を示して更らに我儕をして自己の薄弱醜耻に惱むの情を起さしめ給ひしに過ぎざらんとす宜なる哉、我は單に善美なる人性の圓滿模範を入たる形に於て我儕に與へ給ひし己而にあらず、更に多くのことを爲し給へり、即ち彼は唯だ眞實に全能の神なる者の外何者も爲し能はざる所のことを爲し給へり、彼は人性をして己れの神性と接觸せしめて之を醫し之を福せんが爲めに、自ら人性なるものと爲り給へり、彼は人性をば己が無始無終の身位の周圍に纏ひて、之れを己れのものとし給ひ、たる其の人性を以て我儕を生じまた挽回するの力を爲し而して後彼の聖靈の賜と聖奠的結合サクラメントに由りて我儕を彼の人性に結び合せ給へり、(哥羅西書二章十九節)彼は彼の人性を通して我儕を彼に繋ぎ、否々之を以て我儕に被せ之れに由りて彼は我儕の中に入り來り而して我儕人類を彼れ自身のものとし給へり、神の幕



屋柱に於て乎則ち人の間にあり、而して神人と共に住み、人の神の民となれり、(點示錄二十一章三節) 基督教徒の人性は是れに由りて其中に彼の人性の現臨することを自覺し此の人性の前に恐惶狼狽唯だ畏縮するの外なる能はざるなり、(路加傳四章三十三節) 使徒保羅の哥林多の信徒に賜れる議論は明かに基督教徒が世の終りまで不潔の誘惑の現在を自覺するは思想を發表す、即ち曰く、爾曹の身はキリストの肢なるを知らざるか我キリストの肢を娼妓の肢となして可ならんや、可らざる也」と(哥林多前書六章十五節) 嗟呼當時よりして今に至るまで、苟くも基督教徒なるものが忘恩の舉動より立歸れること不潔の行爲を犯すを恐るゝこと己が中にキリストの住み給ふことを感謝して認むることは實にこれ人道を治理し保維し、聖代するの動機にして、神の恩恵に由りて惡念に對して勝を制したる所以のものなりとすさり乍ら此等の動機たる固きこれキリストが神機的に其教徒に結合し給ふとの教義に根底せるものなるが故に、若し其の中に住み給ふてふ基督にして眞に神ならざれば、最も甚しきの忘想ならずんばあらじされば清徳に於て我儕を扶持すべき此の動機の力の強弱はうれが志が全く豫め據り處とせる主眞理に對する我儕が念慮の強弱に由り異らざるを保す、即ち神なるキリストに於ける我儕の信仰強ければ此動機も隨て強く且つ力あり、此信仰弱ければ亦た隨つて弱からざるを得ず、若し亦たイエスの神なることを明に否定して全能なる救主が我儕の弱き人性を眞實に共なり給ふことを説ける言語を以て空中樓閣を畫くが如きの虛想となし了らんか、即ち此動機は最早我儕の道徳的生涯より消へ去りて、我儕は只だ惡力勁敵の飼食ならんのみ怖れて亦た慎まざる可けんや、

(ろ) 文化したる異教は其の不眞なりしが如く亦た是れ驕傲自負のものなりしなり、但し彼等は或は公然驕傲の行を恣にするを以て是れ惡神の復讐を速くの虞ありとの理由に於て、不愼の舉とは爲したるならん、而して言はん、運命は人の永久繁榮を許さざるものなるが故に運命が將さに之れを亡さんとして待ち構ふるもの、爲めに驕り傲ぶるは智にあらざるなりと。然れども此謹慎の思慮も以て彼等の心を壓し能はざるに至りてや異教者流は其の思想言語行爲に於て全く自負を恐るゝに憚る所を知らざるなり、斯の如きに至ては驕傲の感は基督教徒に於けるが如く高き本心と相容れざるよりあらず、彼等は之を恣まにして省みざる所を知らず、揚々として人盛んなれば天に勝つと放言して得色あり、彼等は驕傲其ものゝ本性なる弊害を見るの明を全く缺けり。彼の福音の道徳的榮光と輪廓を競はんとして是れと最も遜く現はれたる、後ストイック派の如き稍善き倫理説に於てすら驕傲の病は既に昏盲に入れるものありき。驕傲は之を要するに異教の過失と言はんよりは寧ろ異教其れ自身の弊害たりしが如し何となれば人は自らを乗ること能はず人の自身は凡ての場合に於て常に其の思想の主題たるものなり然れども此の思想が果して克く謙りて自己の存在の眞状態に應ずるか或は憐む可き倨傲尊大の姿勢を取るかは専ら其の人が彼の一個の存在者即ち只だ獨り能く道徳界及び智力界に於ける我が眞地位を我れに示し給ふ所の神を絶へず且つ眞實に見ると否とに依て別るゝなり然り而して異教主義の謙遜ならざは即ち該主義に取りては眞神とは單に名のみものなるに由る斯るが故に異教の全生活全思想が一に驕傲を以て基礎と爲せることは亦た怪むを須ひず其文學其の政治其の宗教の制度其の社會の組織及び階級其の人類の生涯及び本分に就ての教説は凡て皆な等しく驕傲自負主義上に



立てり彼等が其の基礎とせる暴虐無道の主義は終に最敏の機智を有し最強の武力を有せる者をして單だ自家の利己的先見の最も甚だしき憂慮に由て僅に其の強猛肉慾の極度に達することを伺ひ制止外するの何れの制裁をも知らざるが如き壓制の大權を掌握せしむるに至れり然り而してイエスキリストは果して如何にして斯くも異教の舊世界に跳梁跋扈したる驕傲の權力に向ひ給ひしが之は果して諄々たる教訓を以てし給ひしが然り彼は寛爾として教へて宜はく異邦人の王は其の民を支配す又た之の上に權を秉る者は恩を施す者と稱せらる然れども爾曹は如是すべからず爾曹のうら大なる者は幼きが如く首たる者は役る者の如くなるべし(路加傳二十二章二十五、二十六節)「凡り自ら高ぶる者は卑みされ自ら卑だる者は高くせらる可し」(路加傳十四章十一節)彼は又た模範を示すを以てし給ひしか然り請ふ彼の言ひ給ふ所を聽け曰く「我は心柔和にして謙遜するものなれば我軛を負ひて我に學なべなんぢら心に平安を獲べし」と(馬太傳十二章二十九節)又た曰く「我は爾曹の師また主なるに尙ほなんぢらの足を濯ふ可し」と(約翰傳十三章十四節)

さりながら何故にこり彼の模範は爾かく有力なりしや請ひ問ふイエスキリストに於て人類に對して自遜てふことの道德的美と力とを示されたる所以のものは抑も何なりしかこれ一個の人として彼が自家の天才の獲取するに委せたる得益若くは彼が富を以て買ひ得たらん所の位地或は歡樂を委く棄てゝ顧み給はざりしに由ると言ふが然らば重ねて問ふ彼は果して單だの人として付て富貴及び尊榮を棄て給ひしことあるか將たこれこのものは果して彼の掌握に委したるものとるか假りに是れありしと想像するも彼が之を辭し給ひしことは以て能くイエスキリストなるも

のうちにありし精神即ち聖保羅が之に向て基督教徒の視線を注がんことを促せる所の精神を測度するに足ると爲すか(腓立比書二章五節)焉ぞうれ然らん我等の前既に見たりし如く聖保羅が彼の主たり師たる者の自制に眼を注げる時には其の主が何等俗界の幸榮を辭したりと云ふことよりも更に大なることを意味せるなり言はずや「彼は神の像にて在せしかども……自ら其の榮光を棄てゝ僕の形を取れり」と(腓立比書二章六、七節)歴史上よりして之れを言ふも基督教の謙遜をして實に力あらしむる所以のものはキリストが何等地上の幸益を辭し給ひしに由るに非らず基督教徒の謙遜の最強なる動機は一には我儕が萬福なる御子との交通に由りて神の清徳及び慶福を更に近く見ることを得るにあり二には否を寧ろ主として該使徒が指示せる如くキリストの自ら示し給ひし模範の真相及び眞力を就視するにあるなりキリストは人と爲らんが爲めに世界の未だ有らざる前よりして自ら父と共に有したる榮光を捨て給へり彼れは萬民の爲めに我等と同じき肉體をとり十字架の上にすら死し給ひけり(復活前主日特禱)斯かるが故に凡て基督教界に於て現はるゝ謙の度は概するに人々が其の救主たるキリストが自ら其の豫先存在の榮光を捨て謙りて十字架の耻を忍び給ひしことを信する誠意の多少に由りて差違し來らざるを得ず但しイエスに於ては此謙遜の深意は彼が人類靈魂の爲めに垂れ給ふに慈の結果たり而るに是れと異りて我儕人類にありては謙たる思想及び行爲は眞に己れの分を知るの智を參表するものに過ぎざれば固より是れ必然のことに屬すとは雖も然れども我儕苟もキリストの眞神たる教義を信して尙ほ彼の人性の自謙及び忍苦の事實を認むるに於て基督教徒たる者の良心自ら謙遜を勧め驕傲を咎めざるを得ず既に神が謙遜の徳を斯程まで貴しとし給ふことを



見る人誰か之を看過し去ることを得んや凡ら一つの受造物として自らは何の善をも有せず却て  
 藝は悉く己れに歸する所の我儕人類が至高至上の存在者斯くも自謙りて人たるの眞個標本を  
 示し給ふに方り何人が能く感激羞耻自責の情を起さずして可ならんや又た既に己れは受肉降世  
 せし神の御子の死によりて救はれたりとのことを誠實に信ずる人の思想に於ては焉んぞ彼の傲  
 然自ら負ふが如き不遜の言語を恣にすることを得可きや苟も我儕の主イエスキリストが自ら  
 富める者にてあり乍ら我儕の爲めに貧くなり給ひし絶大の恩恵を思ひ至れば何すれぞ我儕は區  
 々たる自己の識見に驕り技倆傲ぶりて徒らに自家の收得若くは地位若くは智力を以て私かに揚  
 々たるを得んや(哥林多後書八章九節)惟みるに神の受肉降世は即ち人間の意に對し明かに神  
 の啓示するの由りて人間の驕傲を制し給ひたる所以なりと雖も就中其の最も力あるはキリス  
 トの至極自謙の上に至高の榮譽を附し給ひしとに由らざるばあらず受肉降世は人々をして能く  
 此の世の威福榮地を棄てて高尚の賜たるベツレヘム及びガルウアリの道徳的榮光に庶希くは與  
 らんことの願を起さしむ斯く政治的威力を有す者に與ふるに亦之と匹敵するに足れる自制の力  
 を以て由來人間の社會を革命反富若くは專制威壓の野望より救ひたること當に一再のみに非ら  
 ざるなり受肉降世の神を拜して人生の宴席に最底の地位を占むるの眞榮譽たる所以を彼より學  
 びたる人々に於ては紛々たる俗界の爭利を避けて他の魂に染まざらんとするの念轉た強烈なる  
 ものありさはさり乍ら斯くの如く自己を克制するの動念は唯だキリストの神なることを信ずる  
 の念強く且つ明なる處に於てのみ強力なるを得るものにして謙徳の修養は決して自然的倫理研  
 究の中に在りて存するものに非らず而して單人論者の教義には概するに必ず智力的及び社會的

の自負を伴ざるを得るを古今皆然り然るに之れに反して彼のマリアの子にして馬槽に伏し十  
 字架に懸りし者は即ち神の獨生子に外ならずと承認する所の誠心なる信仰は人をして其の心の  
 自然的驕傲を自ら征服し一小兒の貴き所以即ち天の王國に嗣たる可き者の眞相如何を知らしむ  
 るに最も有效なる誘因力たるなり(馬太傳十八章三節)

(は)請ふ我儕をして我救主の神性に於ける信仰の道徳的效力を明にせんが爲めに今一個の例を舉  
 げしめよ思ふに我儕世界には一の大恩恵の存するありて世界は之れに對して無限に負ふ所あり  
 り而して此恩恵は世界の救主の前に其の心をも將た其の膝をも共に屈するを好まざる人々と  
 雖も尙必ず之を以て救主人類中に臨み給ひしことの結果たることを承認せざる能はざるもの  
 なり

按ずるに異教主義は其の不潔にして驕傲なるが如く亦た隨て無愛なる者なり蓋し不潔の惡徳は  
 人間凡ての眞温情の妙處實核を腐蝕するが如く驕傲の弊は又た先づ以て自損の美情を滅して只  
 管自己を以て君主と爲すものなり前世紀の哲學者等が空中樓閣の如くに畫きたる所の其の所謂  
 「人道の感念」若しくは道義感情を以て人々相互眞正の愛を造出するには其の力弱きに過ぎざる  
 なり凡ら人は其の自然の有様に於ては或は自己利害の動機或は血縁 繋るあるに非らずんば決  
 して他を愛するものにあらず否を爾か而已ならず人は凡て自己の自然的競走者若は敵手の一大  
 體と視做し之れに對しては只だ自己の利害休戚の懸る所の外他に何の關係をも有せず爲すもの  
 にして彼の希臘の古曲中に所謂

「人は唯た己のが爲めにこゝ思ひ煩ひ候へ余の人の惱みには與る所に候はず」とは實に基督に教



化せられざる人心の聲なりとす斯る人心の有様に在りてや至高の愛は唯だ自己の愛なり他愛は是れ此自愛に事ふる所のもののみ斯る人心より成れる社會は唯だ自愛動物の集合所にて其の動物の性は或強者の力に制せられ或は自家利害の念に驅られ茲に政法的團體を造る然れども利己の野性は依然其の中に潜在し苟も機の乘す可きに會せば忽ちにして四裂八出し以て蠻勇縱逸の極に達せずんば思はざらんと思ふ可き哉奴隷を輕蔑し虐待することや政治上若しくは文學上の對手を憎惡することや外人を狐疑し厭忌することや人の善徳及び清廉の眞實を疑ふこと等が異教時代人心の原素として認められたり斯る時代において人は人生の學問とは只が自己が他に蒙らしめんと欲する所の禍害の量と他より蒙らざるを得ざる苦痛の多少とを計量比較するものに過ぎざりしなり夫れ斯如く利己の生活を以て公則に適へりて爲し且つ人は階級種族間相互の憎惡とは僅にかの異教文化と純粹の野蠻と區別する所以の空義なる利主義の薄衣を以て掩ひたる如き社會にありては人類に對する愛は實にや癡人の夢を見へたらんぞかし

却説イエスキリストは如何にして斯る社會的腐敗を革新し給ひしか他なし彼は新なる誠命を與へ給ひたり則ち曰く「我れ爾曹を受する如く爾曹互に相愛す可し」(約翰傳十五章十二節)是れなり但し敢へて問ふ彼の愛は單に其の心餘りに鈍く餘りに俗にして彼に酬ゆる能はざる如き人々に對する一個聖人の愛に過ぎざりしか焉乎然らん斯る人爲的の愛何ぞ克く道德界の改新を成就し人類重深の本性を變化するを得んや由來キリスト教信徒がキリストの愛を測量することとは之を人たるものが凡ての愛を測量するが如くにして其の程度の高きを彼は之れが爲めに自己を與へ給ふに至りたるを見たるに非ずや夫れ然り愛とは即ち他の爲めに自己を與ふるの事なり

愛は我曹の貴きものを他に與ふ然らずんば則ち愛に非らざるなり愛の性心は其の強弱に隨て或は差違あらん然れども其の主趣たる毎に唯だ他の爲めに自己を供するにあるのみ即ち是れ己が時間を與へ勞力を與へ財貨を與へ哀情を與ふ又令聞を棄て名譽を棄つ而して必要に會しては他の爲めに悲哀痛を受くるを辭せざるものなりとす

愛の精神の冷温如何は其の愛を發表する所以のものたり且つ凡て愛自身たる所の献身犠牲の大を感ずるの程度如何に由て分る之れ然り故に神なりキリストの愛は即ち無限の愛なりとす一使徒言へるあり「キリスト我れを愛し我が爲めに己れを捨て給へり」と(加拉太書第二章二十節)而して此のキリストが人類の爲めに與へ給ひし「己れ」即ち無窮無限の神に外ならずキリストが實に神たるの眞理は以て彼愛の大なるを測る唯一つの尺度なり彼の地上生活中の仁慈業の如きは畢竟神の無始無終の御子の自捐てふ愛の大炎火中より時々閃めき出でたる多くの射光に過ぎず彼の苦死に於ける許多の惱みは道德的意義を以て照らさるゝと共に亦た是れ二盜の中間に際せられたる者は然し乍ら榮光の主なるてふ至重至大の眞理の教義的意義を以て照らされずにはある可からず此の至聖者が任意の自捐に於ける信仰よりして愛の新力は流れ出でゝ人類の精神に注ぐ(腓立比書一章八節路加傳一章七十三節參照)斯る絶大なる愛に就ては神の愛肉降世の以前に於ては人類は唯に未だ一の經驗なかりしのみならず彼等の道德的教育は未だ之れを嘆美する程にあらず修練せられざりしならん然るに無休無極の存在者は克く自己の本性を害することなくして彼の迷妄なる被造者即ち人類の心を己れに得んが爲めに自ら謙りて忍辱と苦痛を己れに取り以て人類よりして恩謝の愛の應答を促し給へり即ち先づ人類をして彼自身(神)



に向て愛せしめ次に神の爲めに其同儕（他人）を愛せしめ給ひぬ斯くの如くにして彼は其の右の手をもてりの聖なるかいなにて人類の慾念併に罪の上に勝を己れに得たまへり」我儕は彼を愛す何となれば彼先づ我儕を愛し給へばなり」（約翰第一書四章十九節）若し其れ人類の生活が吾基督教文明の千百の禮讓に由て光澤を發したりとせば若し蒼生の疾苦が基督教慈善の無數の活動に由て醫せられたりとせば若し基督教國のもの億兆民衆の生を安せしむるの政治を以て美にせられたりとせば此れ等の成績は専ら救主基督が神なるが故に無限なる所の基督教慈善の信仰に歸せずんばある可からず夫れ既に如斯し故に基督の神權力の人中に於ける活證驗たるものは唯獨古來綿々彼を禮拜するの場たる諸會堂而已にはあらず彼の愛の指導の下に科學の手を以て疾病貧者の床を慰むるの病院や營利的ならざる懇情の薰陶に由て利己的縱慾の犠牲たる者を高め起して新に道德的生涯に歸らしむる所の感化院や大都府内の無告の孤兒を收容し教育して無智と無徳の犠牲たるを免れしむる所の學校等諸ろ斯如き慶福實果の源泉は彼の人の爲めに己れを與ふることに由て人をして仁慈の心を燃さしめ給ふものゝ神性の眞理より發するに非ずして何ぞやカルヴァリ山上の道德的結果の道德的結果たる所以はそのキリストが即ち神なるにあり他を以て之れを言へば天より降りて十字架の辱を忍び給ひし彼が其の贖ひし人類の心に愛と憐みの源泉を開き給ひしに在て存す而して此の愛の流れは人類種族の大集團中に於ける何等差別と雖も之れを狭め或は止めざることを得ず且つ苟も基督教徒たるものが人類の爲めに十字架に懸りしキリストの神の獨生子なることを信ずる間は決して其の流を止むるものに非ざるなり

是を以て之れを見れば我儕の主の神性の教義はキリストを人間模範の境より取り去ることに由てキリスト教界の道德的生命を貧しくすと云へる想像の誤れること明かなり何となれば該教義は一方に於ては決して彼の人性を損せざると共に他方に於ては彼の模範を以て謙遜と愛の美德の標本となして大に其の力を増し加ふるものなればなり宜なる哉此の教義は古往今來智力的眞理を守護し照明したると同じく亦た實に人類生活の道德的精神を豊富にしたること嗟乎己れの子を惜まずして我儕衆ての爲めに之れを付せる者豈かれに并べて萬物をも我儕に賜はざらん乎りれ神は其の無始無終の子を我曹に賜ふと共に智翼正義成聖救贖の恵を賜はらんとも誰か之れが爲めに驚き怪むことを要せんや且つ此の賜に由て神の靈心性及び凡て生命に關する鋭敏なる感念并に人類の眞威嚴及び恩恵に依りて生活の至高至良に達し得るの力あることの眞自覺が人間思想の中に守らるゝとも何ぞ復た怪むことを須ひんや且つ夫れ此の賜と共に我儕が不謬なる一教師の言語に依て立てる天啓確實の眞理の一體を世々迷襲し罪の世の汚れの爲にカルヴァリ山上に開かれたる源泉より流れ出る潔めの血に由て洗はれ我儕をして我が神の性を實に與り享けしむる所の聖徒に由りて養はれ支へられ隨て人道を飾り高むる所の徳即ち若し我儕の主の力らの範例とするに非りせば到底企て及ぶに由なかる可き徳に達し得と信ずるとも誰か敢て之れを駁んことを得んや

之れを要するに我儕罪人の爲めに苦み且つ死す可く與へらるる神の子の神てふことは吾が基督教信仰の中心實に核にして苟も之れを否定するは取りも直ほさず基督教の生命を絶たんとする所以なり其れ根底の遠く古への舊教世界の豫言者豫表并に倫理中に占むイエスキリストが其の



同時代の人々に對して呈し給ふ道德的姿勢を適當に解釋するものは獨り此の教義あるのみ此の教義は彼の教訓奇跡彼の生活の主なる奥義及び彼が後世の歴史的结果を支配し給ふ權力に對するの眞關鍵たり夫れ斯の如し故に彼の使徒等の間には他の問題に就て互に多く意見を異にせる所多るに關はず彼等がキリストの神性并に此の神性と連關せる所の眞理に於ける信仰を説くに至りては甲乙符節を合するが如し此の信仰や由來哲學的論争の題目となりて分折せられ批評せられ駁撃せられ排斥せられ將た内部よりして破却せられたれども然かもよく反對者が千思萬考より成れるあらゆる智力的鎔解術の坩堝中より出で、其の光輝益々新なるものあり此の信仰は斯る鍛鍊の爲めに其の源意義に何の加ふる所もなく亦た失ふ所も無く其の愛したるは只だ新世代の人に解し易く教會の告白に適したる標號を以て包れしのみ而して其の後代の歴史に至りては吾人は此の信仰の依て安定せる基礎の如何に徴して克く解するを得可し之れを要するにキリストの神性如何の問題は直に是れ基督教の眞否如何の問題たりキリスト若し神に非らざれば彼はマホメットの如くにも大ならずと或る人の言へるは眞なり然れどもキリストとマホメットとの道德的關係は苟くも良心盪惑せられたる人々に非らざるよりは誰れか優に之れを既に判別するに迷はんや我が良心彼を以て人生の道德的主長と爲すとに服す然らば則ち彼自ら我が對して其の超人的榮光を示し給ふに方り矣其の言語の儘に彼れを受けずして可ならんや蓋しキリスト神性の教義は單に歴史の過去に我儕の思考を限ることをせず况や之れを基督教の初期のみに限ることにて於てをや抑も此教義は今日只今に於て依然基督教會の力なりとす今世の思想界に於ては許多の勢力を跋扈せるものありて此等の勢力若し之れと相對抗せる力を離れて

獨り之をのみ觀るときは轉た基督教徒をして人道の將來を憂へしむるに足るもの無しとせず但し現今基督の教會が千百年の間安らかに己れに屬したる權力若しくは由來宗教を守り強めたるよりも文明を保護したること恐らくは更に顯著なる名譽の地位を失はんとせるが爲めに爾が言ふに非ず曾て斯の如き攝理の賜無くして能く勝ち得たる信仰は縦ひ之れを喪ふとも復た勝ち能はざらんや寧ろ予の憂ふる所は基督教の根本的眞理が爾かく激烈なる敵意を以て駁撃せらるゝの甚だしき現今歐洲の各文明國に於けるが如きは福音の初年以來未だ曾て非らざること是れなりこれ或は神の深意よりして教會が從來未だ曾て經驗したること無き大試験を故らに其の信仰に加へ給ふるに由るものあらん或は古き異教氣質の嘲罵の復興に連れて憎惡迫害の内尙ほ未だ收まらざるにもや由あらん之はとまれかくもあれ我儕は只だ神に托し奉らん神の聖城たる教會は神の中在す故に動さること無きを知るに於て力強し神は之れを助け給ふと必ず遠からじ異教人は力を盡し多くの民は擾がん爾かも神其の聲を出だし給はば地はやがて鎔けん縦ひ人間の思想海は浪高く風吹き荒みて山岳爲めに動くとも我の神主の力は其の御名と尊榮を護り給ふに於て得々として餘裕あり縦へ空は暗く風逆ひて我が文明の最強最烈なる智力上及び社會上の逆流怒濤は殆んど其の上に漂へる聖方船を壓するが如くに見ゆるとも我儕は其の方船と共に在ます者の誰なるを知る彼れは一見眠れるが如くに見へ給ふとも其の精神は曾て休せず其の警戒は曾て緩め給はざるなり彼の現臨は我儕の絶を禁ず彼の現臨は堅く我儕に保證す戰破れたるが如き日に於て却て勝てる神の味方は後必ず徐ろに功を示めさずんばあらじ古人言はずや縦へ無花菓樹は花を開かず葡萄は實を結ばず野は食を産せず羊は糧より放れ牧場に一の群の止まら



さるも我は尙ほ主に於て救はん我は我が救の神に於て喜ばんと

嗚呼斯の如きの熱望は神の善攝理にありて早晚彼の教會の創傷を醫するに至る可きか共同の敵の面前に在りて爾かも益共同の信仰に榮着して各基督教徒は早晚相互の心事を能く諒解するに至る可きか然り誰れか復之れを疑はん磔殺せられ給ひし我儕の主の神性といふが如き爾かく絶大なる信仰に於ける一致は安ず之れを懐ける者其の不調を和解せずして止む可けんやイエスの神性を更に一層篤く深く且つ實際的に解得するや必ず彼の子供をして贖れたる一團に再び結合せしむるの日あらんと希望は豈空中の層樓なる可けんやキリストを眞の神なりと信する輩は他日更に明に該信仰の中に含まれる所并に是れと相容れられざる所の何のものたるを見ん其の信條に於て必要なるものを供へて不調なるものを棄て斯くして人と天使との前に於て公々然として神なる主長を禮拜し告白するの時あらんとを期するは何が必ずしも百年河清を待つ業ならんや嗚呼此の未來大平の幼衆を思ふ毎に此の前途悠々なれども爾かも愉快極まれる基督教徒復和の光景を豫する毎に誰れが又心躍り氣動きて坐ろに涙下らざるを得るものぞや此の大復和の來るに及んでは何の暗澹なる懷疑か得て解けざらん何の深雲なる慰籍か億兆の上に注がざらん罪人の心の爲めに盡せる基督の僕等の共同の祈禱調和の事業の光景は抑も亦た如何に快活珍麗なる可きぞや尙へ復和したる教會が旗鼓堂々として人類至上の利益を更に深く増進し基督教徒生活の豊かなる發達を促し世界の感化の爲めに更に有力なる働きを致せる其の勢力威風の如何に漂然たる可きぞや然れど神の攝理の機密は我儕の得て論ずる所に非ず只だ之れを希望し之を祈禱す可き而已我儕今世のものに示すには只だ其の業を以てし其の榮光の有様に至ては之

れを後生の爲めに保存し給ふことは或は我儕の主の經論にもやあらん只管に彼の天啓の意思を仰ぎ見彼れの智慧と權力に於ける單純明白なる信仰を以て「凡そ神の聖名なる道の真理に於て一致し結合あり敬虔なる愛に於て住まんことを主に祈るは我儕の本務ならざる可からず

論じて既に茲に至る予はキリストの尊榮を護り及び基督教徒智力的資産中の最も貴重たる大真理に關し近世思想家若干の誤解を反駁するもの論を結ばざる可からず而して今に至る迄で堪忍なる關心と篤厚なる同情を以て予を勵ましたる聽者諸君に對しては予は諸君に與ふる現今の聖福及び無終の平安の以てし給ひたる榮光ある生ける我儕の主の神なる身位を一層明かに見んことよりも更に誠實に希ふ所はあらざるなり嗚呼諸君よ諸君にして縦へイエスの眞に神なることを告白するは決して巧みたる虚譯や古昔半開の時代の粗笨なる想像談に従隨ふ所に非らずと智力的に悟諒する所ありとも請ふ自ら此の智力的悟諒を以て足れりとする可きこと勿れイエスキリストの神性と曰ふが如き爾かく崇高絶大の眞理は諸君の思想中の或る部分に於て唯だ神の善慈及び人間の必要に關する一聯の理論を形造るのみを以て止むる可きに非ず更に進んで大いに爲す所無くんばあらざるなり福音の神なるキリストは縦ひ人類歴史の大活劇中に於ける最大の主人公たりしとは雖も抑も彼は決して過去史中の者に止らず彼は昨日も今日も永遠も變らざるものなり彼の今あるは尙一千八百年前にありたるが如く我儕の父祖に對して在り給ひしことは尙我儕の子孫に對してあり給ふが如し彼が神なる謬らざる教師たり罪の醫癒者赦免者たり萬の恩恵の源泉たり惡魔と死との征服者たり給ふことは古然り今然り將來も亦た必ず然り今も尙ほ彼は古への如く彼に由りて神に來る所の者を全く救ふことを得給ふ今も尙ほ彼は死に勝ち給ひし日に



於ける如く能く凡ての信徒の爲めに天國の門を開き給ふ今も尙ほ彼は彼の初年に於けるが如く「開かれて何人も閉づこと能はず閉ぢられて何人も開くこと能はざるダビデの鍵を有し給ふ」(黙示録三章七節)彼は斯く永遠に同じくあり給ふ唯々時間の兒としてや我儕は絶間なき變化に於て進み行く我儕の生命の時間は逝て復た歸らず然れども過去は忘られずさもあらばあれ現今は我がものなり我儕は若し欲せば受肉降世の神の榮光の爲め生ずるものとして生きんと決するを得噫呼兄弟は何ぞ屑々として悲むを須ひん人生の重荷に堪へざるの時殊に人爲的援助も其甲斐なき危急の時に方り我儕は全能なる救主の腕に固く依り頼むを得彼は實に我儕と共に在り給はん此の世の旅路を通じて然り又其の終りを告る時に方り然り我儕は彼の現臨と援助とに支へられて死の蔭の谷を恐れなく進むことを得而して無窮世界の間に至りては凡ての信仰と凡ての希望とは清明圓滿の神なる主に見へ奉ることに由て委く成就せらるるを見ん噫呼亦樂からずや

主イ基督の神性 大尾

明治三十三年十二月二十一日印刷  
同 十二月三十日發行

\*定價金壹圓五拾錢\*

發行者 中川藤四郎

京橋區竹川町十五番地

翻譯者 吉村大次郎

京橋區明石町五十三番地寄留

印刷者 齋藤章達

日本橋區兜町二番地

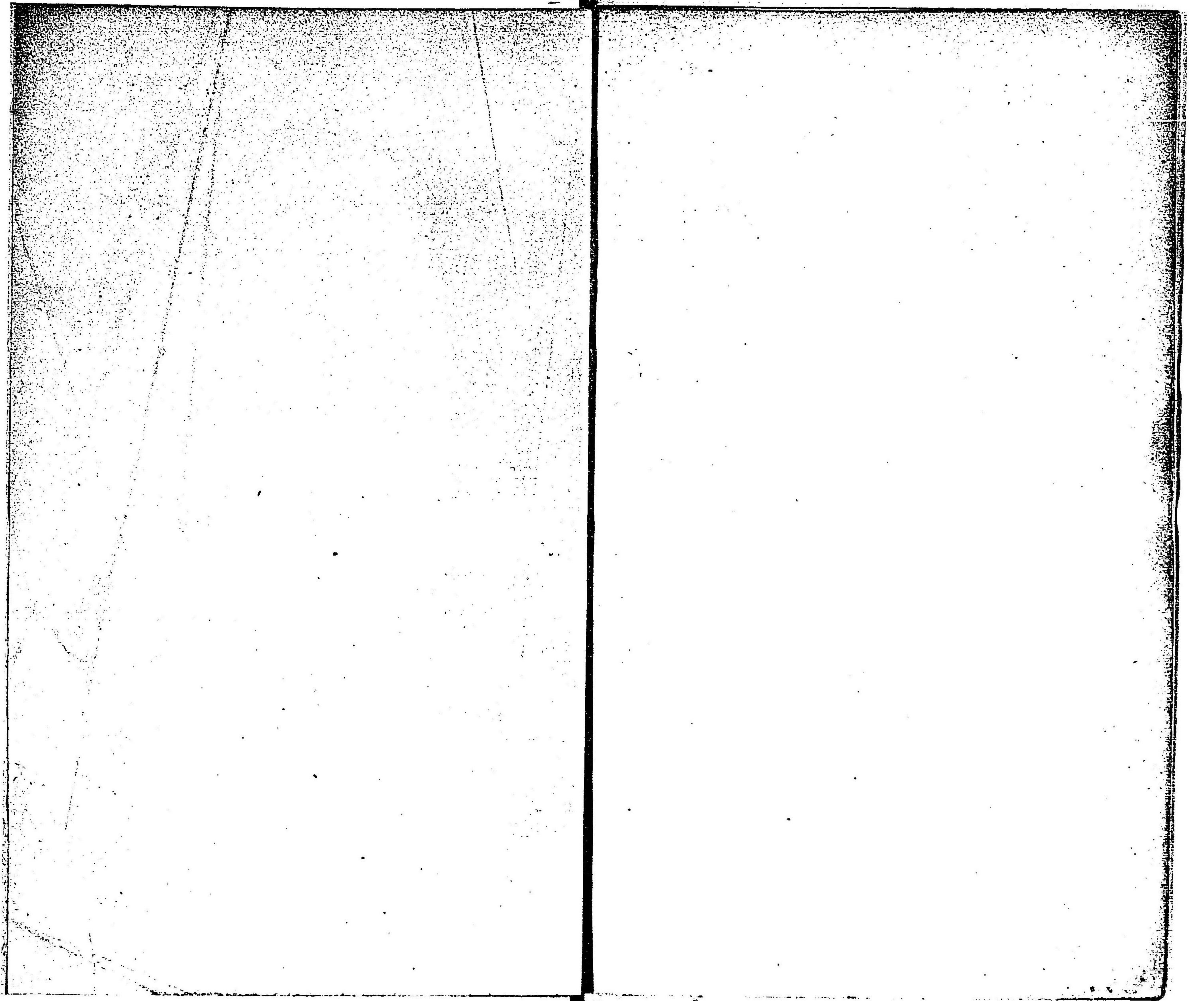
發行所 日本聖公會出版社

京橋區竹川町十五番地

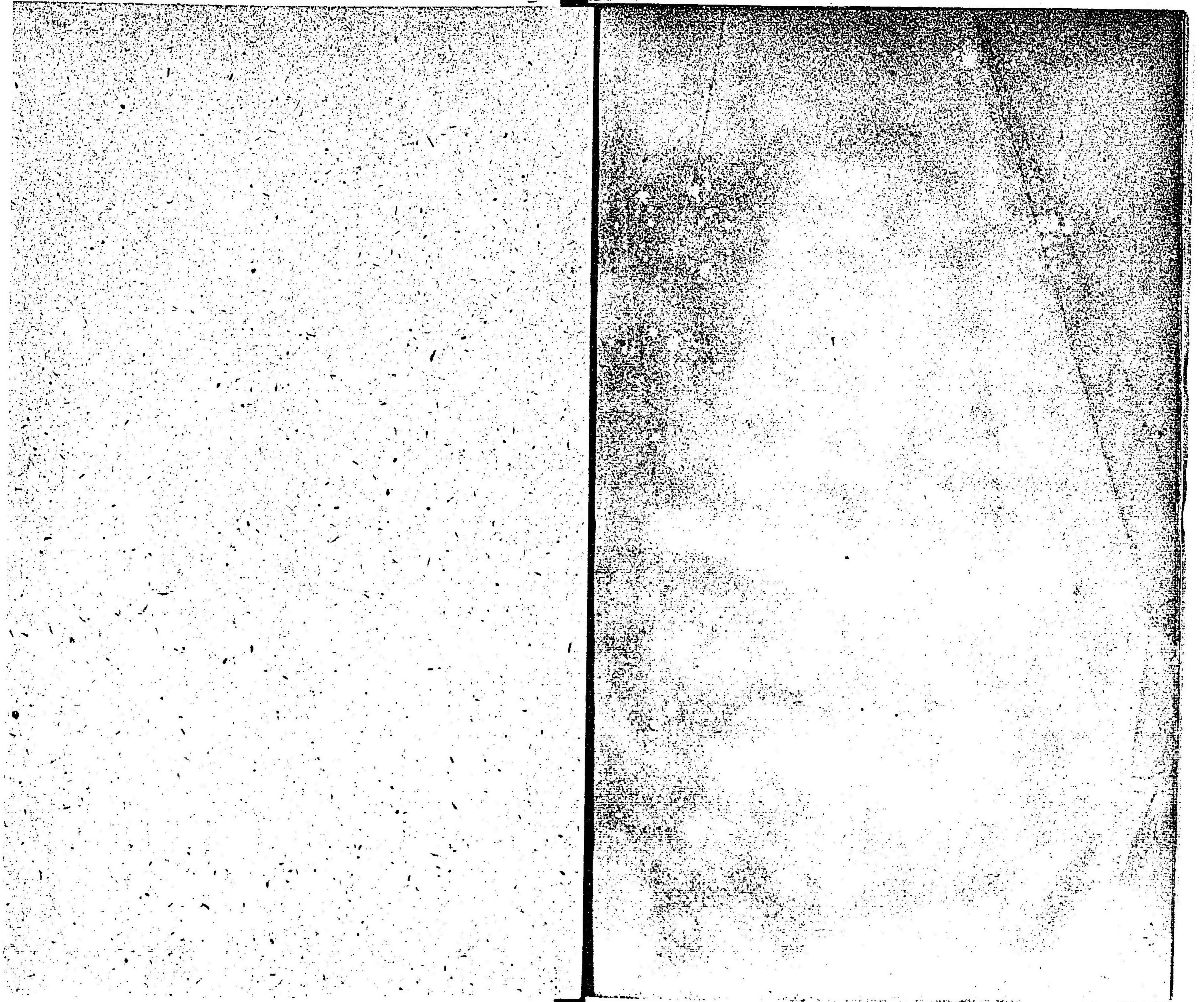
印刷所 東京印刷株式會社

日本橋區兜町二番地











90
30